

---

# 光と影

金弘 美樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と影

### 【Nコード】

N3763F

### 【作者名】

金弘 美樹

### 【あらすじ】

警視庁のアイドル、佐藤美和子が行方をくらませた。失踪か、事件か？手がかりがなく右往左往する刑事たち。そんな中、高木は佐藤の無事を信じ、行方を追う。はたして佐藤はどこに消えたのか。佐藤を想う高木の気持ちと、高木を信じる佐藤の気持ちで事件の謎を解く。

## 序章 1 佐藤美和子、失踪？

捜査 1 課に戻った千葉は、キョロキョロと課内を見回した。

探している彼女の顔が見えないと、一足先に帰って来ていた同僚の高木渉に声を掛ける。

「なあ高木。佐藤さん見なかったか？」

高木は少し怪訝な顔をして千葉を見る。

「さあ。お前、一緒じゃなかったのか？佐藤さん、今日はお前と聞き込みに行ってたハズだろ。」

千葉はその返事で彼女がまだ本庁に戻っていないことを悟った。

「まあ、そうなんだけどさ。被疑者の親に話を聞きに行く途中で、野暮用があるから先に行つててくれて別れてから戻って来ないんだ。携帯にかけてもつながらないし。」

千葉は途方に暮れた様子で肩を落とした。

「携帯にかけてもつながらないって？」

高木は心配顔で千葉に尋ねた。

「ああ。呼び出しは鳴るんだけど、すぐ留守電になるんだ。メッセージも入れてるんだけど、連絡もないし。」

高木は表情を曇らせた。

仕事熱心な佐藤が勤務中にどこかに消えるなんて、考えられなかったからだ。

高木はすぐさま自分の携帯を取り出し、佐藤の携帯にかけてみる。数回呼び出し音が鳴り、無機質な女性の声が、持ち主の留守を告げる。

高木の表情はますます険しくなった。

「千葉。佐藤さん、どこへ行くとか言ってなかったか？」

千葉は力なく首を左右に振った。

「まさかこんなことになると思ってなかったから、突っ込んで聞かなかったし・・・」

2人の刑事は顔を見合わせ、大きな溜め息をついた。

「まあ、もしかしたら野暮用が長引いているのかもしれないし、目暮警部に知らせるのはもう少し待とう。もしかしたら、ひょっこり帰って来るかもしれないし。」

高木は千葉にそう告げると、千葉の肩をポンと叩いた。

千葉は無言で小さく頷く。

自分の机に戻る千葉の後姿を見つめながら、高木はじっと考えこんでいた。

佐藤さん、まさか、事件に巻き込まれたりしていないよな。

悪い予感が胸を締め付ける。

何もなければいいけど。

しかし、その願いが聞き届けられることはなかった。

1時間経つても、2時間経つても、佐藤が戻って来ることはなかった。

携帯にもかけてみるが、やはり佐藤が出る気配はない。

佐藤が千葉と行動を別にしてから5時間半が経過したころ。

さすがに周りの刑事達も千葉と行動を共にしていたはずの佐藤が戻らないことに疑問を抱き始めた。

もう隠してはいられない。

そう判断した高木は、自分の席で所在なく小さくなっている千葉にそっと耳打ちした。

「もうこれ以上隠し通せないな。」

千葉は高木を見上げて頷いた。

## 序章 1 佐藤美和子、失踪？（後書き）

初めてミステリーを書いてみました。作者の想像で書いておりますので、多少おかしい所もあるかもしれませんが、ご了承くださいませ。

## 序章 2 行方

二人は、どちらからともなく目暮の元へ向かった。

もしかしたら、佐藤さんは誰かに拉致されたのかもしれない。

高木の脳裏に不安がよぎる。

佐藤さんにもしものことがあつたら・・・

考えただけで、気が遠くなりそうだった。

「あの、目暮警部。」

高木が目暮に声をかける。

目暮がその声に、少し眉をしかめて顔を上げた。

「あの、佐藤さんと連絡が取れないんです。携帯にかけても留守電になってしまつて。メッセージも残してるんですが、返事もなくて。」

千葉がおずおずと状況を説明し始める。

「千葉と聞き込みに行った先で、野暮用があるからと別れたらしいんですが、その後の行方がつかめないんです。用事が長引いているのかもしれないと思って今まで待っていたのですが、千葉と別れてからもう5時間以上経つのに、まだ本庁に戻っていないようですし、携帯も呼び出しは鳴るのですが、留守電になってしまつんです。」  
高木の説明に、目暮もただごとではないと感じたのか、表情が固くなる。

「佐藤君は、どこに行くとは言わなかったのかね。」

目暮は険しい顔で千葉に尋ねる。

「それが・・・野暮用としか聞いてなくて。すみません。佐藤さんのことから、まさかこんなことになるなんて思ってもなくて。」  
千葉は小さな声で答えた。

「警部。考えたくはありませんが、もしかしたら、佐藤さんは何か事件に巻き込まれたのかもしれない。あるいは、何者かに拉致されたか・・・」

千葉の言葉を受けて、高木が唇を噛み締めて呟く。

目暮は無言で電話に手を伸ばすと、佐藤の携帯番号をダイヤルする。しかし。

やはり応答はない。

目暮は静かに受話器を置くと、高木と千葉を見上げた。

「佐藤君の自宅にはかけたのか。」

「いえ。まだ・・・」

高木が答える。

「体調が悪くなって、自宅に帰ったとは考えられないかね。」

目暮も佐藤が行方不明になったことを信じたくない一心で2人の男に問う。

「いえ、それは無いと思います。自分は佐藤さんと別行動をするまで一緒にいましたが、特に変わった様子はありませんでしたし・・・」

千葉がはっきりとした口調で答える。

「それに、もしそうだとしたら、佐藤さんが電話に出られなくても彼女の母親から何らかの連絡があると思うのですが・・・佐藤さんが行方をくらませてからもう5時間以上も経っているのに、未だに連絡が無いのは不自然じゃないですか？」

高木がよどみなく答える。

目暮もその通りだと思った。

しかし、もしもということもある。

目暮は再び受話器を取り上げると、佐藤の自宅へ電話してみる。

数回コール音がして、

「はい、佐藤でございます。」

と女性の声がした。

### 序章3 事件かもしれない

電話の声は、期待していた佐藤のものではなく、彼女の母親の声だった。

「いつもお世話になっております。警視庁捜査1課の目暮です。」  
目暮は丁寧に挨拶をした。

その目暮の様子を2人の刑事が固唾を飲んで見守る。

「まあ、目暮さん。お久しぶりです。いつも娘がお世話になっております。」

佐藤の母は、少し高い声で答える。

「あの、美和子さんはお戻りですか？」

目暮は手短かに確信に触れる話を切り出した。

「いえ、美和子はまだ戻ってませんけど。」

佐藤の母は、少し怪訝そうな声で答えた。

その返事に、目暮の喉がゴクリと鳴る。

「美和子、どうかしたんですか？お急ぎでしたら、あの子の携帯にかけていただいたら・・・」

話が飲み込めていない佐藤の母は、少し戸惑ったような口調で言う。  
「ああ。先程携帯にかけたのですが、留守電だったもので。もしかしたら、もう自宅に帰ってるんじゃないかと思ひまして。」

目暮は佐藤の母親に勘繰られないよう、もっともらしい理由を取り繕ったように答える。

「まあ、そうですか。それは御迷惑をおかけしました。まったく美和子ったら何やってるのかしら。」

最初は訳が分からずに怪訝そうだった佐藤の母親も、目暮の言い訳を信じたのか、少し安堵したように溜め息をついた。

「もしかしたら運転中か何かで電話に出られなかったのかもかもしれません。それでは、再度携帯の方に連絡をとってみますので、もし行き違いで美和子さんが帰って来られたら、お手数ですが一度目暮

の方に連絡を入れるよう伝えていただけんでしょうか？」

目暮は佐藤の母親に余計な心配をかけまいと、やんわりと伝えた。

「はい、分かりました。本当にお急ぎのところ御迷惑をおかけして申し訳ありません。美和子には重々言って聞かせますので。」

目暮からの電話に疑いを向ける様子もなく、佐藤の母親は、再び目暮に詫びを言った。

そして、娘の身に起こっているであろう災い事など微塵も感じていない様子で電話を切った。

一縷の望みを絶たれた目暮は、深い溜め息とともに受話器を置いた。  
「警部。」

その様子をじっと見守っていた高木は固い表情で目暮に言った。

「佐藤さんは・・・」

目暮は顎に手を当てて視線を落とす。

少し考えてから、表情を引き締めて、意を決したように告げる。

「自宅には戻っていないようだ。考えたくはないが、高木君の言う通り、何らかの事件に巻き込まれた可能性がでてきたな。」

## 序章 4 絶望と希望

覚悟していたこととはいえ、目暮の言葉に高木の表情は強張った。

高木は佐藤の身を案じ、思わず瞳を閉じる。

「しかし、まだ佐藤君の身に何が起こったのか確定する決め手が無い。誘拐なら犯人から何らかの要求があつてしかるべきなのに、それもない。もう少し時間を置こう。」

目暮の言葉に、いつもは温厚な高木が今にも掴みかからんばかりの勢いで詰め寄った。

「佐藤さんの命が危険にさらされているかもしれないですよ。職務に忠実な佐藤さんが、仕事をほったらかして何時間も行方をくまらずなんて、考えられません。それは警部もよく解っているでしょう。」

目暮に胸の中に広がるもやもやとした想いをぶつけても、どうなるものでもないことは、高木も充分承知していた。

しかし、高木は千葉が止めるのも構わずまくしたてる。

「佐藤さんにもしものことがあつたら、僕は・・・僕は・・・」

高木の目にはうつすらと絶望の色が浮かんだ。

そこまで一気に吐き出した高木は、うつむいた目暮の瞳に苦渋の色が浮かんでいるのに気付いて、はっと息を飲む。

「すみません。取り乱してしまつて。」

高木はバツが悪そうに肩を落とした。

「いや、構わんよ。君が取り乱すのも無理はないさ。」

目暮は高木の肩に手を置くと、静かに呟いた。

「高木君。君も解っていると思うが佐藤君は優秀な刑事だ。彼女ならきつと何があつても帰つて来る。そうだろう。」

高木はその言葉に力強く頷いた。

「今は信じよう。私だつて辛いんだ。分かってくれ。」

目暮の言葉に、高木はただ従うしかなかった。

「だが、事件かどうか断定できないからといって、ただ待つだけじゃない。その時が来たらいつでも動けるように、準備は万全にしておくつもりだ。」

目暮は力強くそう言うと、部屋中に聞こえる大きな声をあげた。

「みんな、よく聞いてくれ。佐藤君が聞き込みの最中に行方をくらませた。まだ未確定だが、事件に巻き込まれた可能性が高い。」

目暮の言葉に、先程まで遠巻きに様子をうかがっていた男達がざわつく。

警視庁のアイドルである佐藤が行方不明になったらいいことは、1課の刑事達に大きな衝撃を与えた。

不穏な空気が張りつめた室内に、目暮の声が響く。

「今から、手が空いている者で手分けして佐藤君の足取りを追うことにする。行方不明時の詳細は、これから直前まで行動を共にしていた千葉君から説明してもらう。何か分かった事があれば、直ちに私まで連絡してくれ。ただし、現段階では佐藤君が事件に巻き込まれたという確定要素はない。この件に関しては、あくまでも任意でやってくれ。」

室内に居会わせた誰もが力強く頷く。

高木と千葉も大きく頷いた。

## 序章 5 搜索開始

すぐさま男達は地図やら筆記用具やらを持って、捜査会議用のデスクの周りに集まった。

目暮を中心に、千葉と高木、鋭い眼光の男達を取り囲む。

千葉が、地図を広げながら、佐藤と別れるまでの経緯を説明する。

「僕と佐藤さんは、先週起こったホステス殺害事件の聞き込みのために、10時半頃に現場近くのこの場所で落ち合いました。佐藤さんが捜査会議に出ている間に、僕が張り込みの交代に向かう高木を送り届けて、ここで待ち合わせたんです。それから、この目撃者の家と、こちらのコンビニの店員に聞き込みに行った後、この店で昼食を取り、被害者が勤務していた店と最後に立ち寄ったとされる恋人のマンションに寄った後、被疑者の実家に向かう予定でした。」

千葉が地図を指差しながら、自分と佐藤の足取りを説明する。

それを聞きながら、高木が千葉の指差した地点にペンで印を付けていく。

「美和ちゃんは車だったのか？」

刑事の一人が尋ねる。

「あ、はい、そうです。佐藤さんは自分の車でここまで来て、このパーキングに車を止め、その後は僕の車で移動しました。」

千葉が待ち合わせ場所近くのパーキングを指差す。

高木が地図に印を付け、千葉が語った情報を簡潔に書き込んでいく。

「それで、美和ちゃんはいつかからお前と別行動になったんだ。」

別の刑事が問う。

「ええっと。被害者の恋人のマンションを出て、被疑者の実家に向かう直前に、佐藤さんが、ちょっと用事があるから先に被疑者の実家に行ってくれて言ったんです。3時ちょっと過ぎくらいだったかな。」

千葉は自分記憶をたどりながら、はっきりと答えた。

高木は円で囲んだパーキングの上に15時頃と書き込んだ。

「美和ちゃん、どこに行くか言わなかったのか。」

すぐさま千葉は今日何度も尋ねられた質問をぶつけられた。

「それが・・・まさかこんなことになるとは思ってなかったのだ。

佐藤さんも何も言わなかったし、僕もつつこんでは聞きませんでした。すみません。」

千葉はガツクリと肩を落とした。

「千葉。誰もお前のことを責めちゃいねーよ。誰だってそんな状況じゃあ行き先なんて聞かねえさ。ましてや相手が美和ちゃんなら尚更な。」

高野がすっかり小さくなっている千葉を元気づけた。

## 序章 6 検証

「千葉君、佐藤さんと最後に別れたのはこのパーキングに間違いありませんね。」

それまでだまって聞いていた白鳥が尋ねる。

「はい、そうです。」

千葉はあわてて答える。

「時間は3時頃で間違いはないですか。」

さらに白鳥が念を押す。

「ええ、間違いはないです。時計を確認したので。」

千葉が答えるのを待つて、

「佐藤君がどちら方面にむかったのかはわからんのかね。」

今度は目暮が口を開いた。

「はつきりとはわからないのですが、この道を車で西の方に向かったのは確認しました。」

千葉ははつきりと答えた。

「車を使ったとなると、佐藤さんの野暮用とやらは、ここからかなり離れたところにあつたようですね。」

白鳥がうつむきかげんで呟いた。

「いえ、そうとも限らないと思います。」

千葉が、遠慮がちに反論する。

「なぜだね？」

白鳥は不機嫌そうな口調で問い返す。

「いえ、その、被疑者の実家もこの場所から西の方にあるんですよ。4キロくらい離れた所なんですが。」

千葉の言葉を受けて、高野が呟いた。

「そうか。千葉との合流がスムーズにいくように、この近辺で済ませられるような用事だったとしても、車を使ったかもしれないってことだな。」

高野の言葉に、千葉が頷く。

「だとしても、その用事が何なのか、どこへ行ったのか、皆目検討もつかんな。」

目暮が頭を抱えて唸った。

その言葉に一同は一瞬しんと静まりかえった。

「しかし、佐藤さんの野暮用というのが、何処かの店に立ち寄るとか、そういった類でなかったことだけは確かですね。」

白鳥ははつきりと言いつた。

「もし誰かと会うような用事でなければ、佐藤さんなら千葉君に行き先を伝えたでしょうから。」

その言葉に目暮も頷く。

「白鳥君の言うとおりだ。私も佐藤君は恐らく誰かに会いに行ったんじゃないかと思う。」

目暮が賛同した。

しかし。

肝心なその誰かがどこの誰だかわからない。

「おい、この近所に美和ちゃんの親戚とか友達とかいないのかよ。」

一人の刑事が隣の刑事に聞く。

「さあ。そういうことは俺よりアッチに聞けよ。」

聞かれた刑事は少し苦笑しながら、さつきから押し黙ったままじっと考え込んでいる一人の男の方をちらりと見た。

「悔しいけど、美和ちゃんのことはアイツが一番良く知ってるだろ。」

「

男たちの視線がいつせいにその男に注がれる。

「おい、高木。お前、この辺に美和ちゃんの親戚とか友達とかがないか知ってるか。」

さっきの刑事が同じ質問を高木に投げ掛ける。

突然名前を呼ばれて高木はびくりと体を震わせた。

「えっ、あ、いえ。えーっと、僕の知る限りではいませぬね。」

高木は少し上擦った声だったがきっぱりと答えた。

男達が深い溜め息をつく。

「とにかく、現状では搜索範囲を絞り込むのは難しそうだな。仕方ない。とりあえずこの付近を手分けして探そう。」

目暮は男達の顔を見回した。

男達は決意を胸に力強く頷いた。

その間も高木はじっと考え込んでいた。

いつも自分をフォローし、引っ張ってくれた佐藤が消えた。

今朝、凜とした瞳で飛び出していった佐藤の横顔を思い浮かべる。

背中にゾクリと悪感が走った。

佐藤さん。

高木は強く瞳を閉じた。

## 序章 7 愛情の証

室内では相変わらず男たちが手がかりを求めて慌しく動き回っていた。

ざわつく室内で自分の席に戻った高木は、ただ一点を見つめていた。どうか無事で。

それは願ひ。

そして、祈り。

今までの人生の中で、こんなに強く何かを願ひ、祈ったことが他にあつただろうか？

高木は押し潰されそうな心で愛する人の無事を強く思い描いた。

佐藤の無事を信じる心と、僅かでも油断すれば折れてしまいそうになる心の間で揺れ動きながら。

ふと瞳の奥から熱いものが込みあげてくるのを感じ、振り払うかのように強く目を閉じる。

その瞬間。

「こら、高木！」

頭の中で、突然聞き覚えのある愛しい声のはつきりと響いた。

凜として澄みきったその声は、ざわついた高木の心を嘘のように凪いでいった。

瞼の裏に、大きな瞳に強い光を宿した佐藤の凜々しい姿がくつきりと浮かび上がる。

「刑事だったら感情に流されずに職務を全うしなさい。」

佐藤の意思を秘めた迷いのない声は、高木に向かって語りかける。いつの間にか、高木の心はすっかり落ち着いていた。

決意に満ちた瞳で前を見据える。

絶対に見付けて見せる。

必ず見つけて、無事に助け出して見せる。

この命に変えてもきつと。

さっきまで胸に立ち込めていたもやもやとした黒い影は、もう陰も形も無かった。

その頃、自分の席でじっと考え込んでいた高木を千葉は自分の席から心配そうに見つめていた。

そして、自分を責めた。

自分が佐藤に行き先さえ聞いていれば。もっと早く佐藤の失踪を知らせていれば。こんなにも高木を傷つけることは無かったかもしれない。そう思うと、強い自責の念に苛まれた。

申し訳なくて、居場所がない。

千葉は血が滲むほど強く唇を噛み締めた。

ともすると溢れ出しそうになるものを堪え、皆に気付かれないように顔を伏せる。

俺よりも、高木のほうが辛いんだから。

千葉は震える拳を机の上でぎゅっと握り締め、自分に言い聞かせる。その直後、突然背後から肩を叩かれて、千葉はびくりと肩を竦めた。

「千葉、お前が責任を感じることはないよ。」

立っていたのはさっきまで身じろぎひとつせず考え込んでいた高木だった。

「でも俺が・・・」

言いかけた千葉の言葉を遮って高木は続ける。

「佐藤さんはきつとどこかでオレたちが来るのを待ってるに決まってる。オレたちがしつかりしなくちゃ、信じて待つてくれている佐藤さんに申し訳ないだろ。」

一番大切に想っている人が失踪して一番辛いはずの高木が、穏やかに千葉に微笑みかける。

「高木・・・」

千葉は同僚の言葉を呆然と聞いていた。

「佐藤さんは必ずオレが見つけ出す。必ず助け出すから。だからそんなに落ち込むなって。」

真っ直ぐに、力強く言い放たれたその言葉に、千葉は息を呑んだ。

この男の何処にこんな強さが潜んでいたのだろう。

普段は温和で、お世辞にも頼りがいがあるようには思えないこの男の何処に、こんな。

そして、千葉はふと気付く。

ああ、そうか。彼女がいるから。

彼女のことを命がけで想っているから。こんなにも穏やかに、しかし、力強く言えるのだ。

それは、高木の佐藤に対する愛情の証。

そして、2人の絆の証。

千葉の中でドロドロと渦巻いていたやり場のない思いは、いつの間にか消えていた。

高木の真っ直ぐな視線に、千葉はゆっくりと頷いた。

## 序章 7 愛情の証（後書き）

何とか序章が終わりました。この先どういう展開になるのか、作者自身も手探り状態での執筆です。高木君がかなりかつこいいキアラになっているのは作者の夤縁目でしょうか・・・？

## 第1章 不可解な事故

慌ただしい部屋を出て、高木は地下に停めた自分の愛車に乗り込んだ。

シートポケットに無造作に突っ込んであった地図を引っ張り出してページをめくり、先程千葉が言っていた、佐藤の姿が最後に確認された地点を指で押さえてみる。

確か、千葉は佐藤さんがここから車で西に向かったのを見たって言うてたな。

東西に走る道路を指で左に辿りながら、高木はあることに気付く。この道って、確か。

高木の指が辿る道の先には、佐藤と共に何度か訪ねたことのある、ある人物の家があつたはずだ。

高木は吸い寄せられるようにその場所へと指を動かす。

神崎史乃。

神崎物産の会長を勤める初老の上品な女性。

史乃さんの家は、確かこの通りを西に行ったこの交差点を左折して、細い路地を右折して突き当たり左側。

もしかしたら、佐藤さんは史乃さんに会いに行つたんじゃないか？

高木の頭に確信に似た思いがよぎる。

神崎史乃は、佐藤が最後までただの交通事故ではないと言い張つたあの事故の被害者、神崎麻緒の母親だ。

あの事故は佐藤の意に反してもうすぐ運転手の前方不注意による事故だったと結論付けられようとしていた。

佐藤は、史乃に事故の真相を明らかにできなかったことを詫びに行つたのではないだろうか。

あの事故。

神崎麻緒という女性が、雨の日の夜8時半頃、実家近くの路上で車に跳ねられ即死した事故。

佐藤と高木も1ヶ月程前はこの事故の捜査に加わっていた。

この事故には不審な点がいくつかあった。

事故が起こったのは今から1ヶ半月程前。

実家に帰宅する途中だったと思われる神崎麻緒が何らかの事情で道路にしゃがんで居たところを、走行中の仲田慎也が運転する車に跳ね飛ばされるといったものだった。

事故直後、仲田の通報によって救急隊が駆け付けたのだが、彼女は頭を強く打っており、ほぼ即死だった。

直ぐさま出頭してきた加害車輛の運転手である仲田は自動車運転過失致死の現行犯で逮捕されたのだが、仲田の証言によると、神崎麻緒は土砂降りの雨の中傘もささずに道路の真ん中にしゃがみ込んでいたのだという。そのため仲田の発見が遅れ、ブレーキを踏んだが間に合わなかったという事だった。

仲田の証言を裏付けるように、女性にしては長身の彼女の頭部には、車と接触した時にできたと思われる傷跡が残されていた。

仲田の証言や鑑識の捜査から、彼女が誰かに突き飛ばされたり、転んだりしたような形跡がないことが判り、彼女は自らの意思で路上にしゃがみ込んでいた事が立証された。

だが、何故神崎麻緒が道の真ん中にしゃがみ込んでいたのかは判らなかった。

胃の内容物からアルコールや薬物などの類は検出されなかったし、道路の周辺に彼女の目を引くような物も落ちてはいなかった。

一体何故。

刑事達は首を傾げた。

## 第1章 不可解な事故（後書き）

これから少しペースダウンしそうな予感です。大まかなプロットはできているのですが、執筆が追いつきません。ぼちぼち更新していきますので、よろしければお付き合いくださいませ。

## 第1章 仮説

その不可解な謎に着目したのが佐藤と高木だった。最初に違和感を感じたのは高木だった。

彼女の遺体には、結婚指輪が無かった。左手の薬指には指輪をつけていたような細い跡が残っているのに、事故当時、彼女は指輪をしていなかったのだ。

しかも、指輪はハンドバッグの中に大事そうにハンカチに包まれた状態で遺されていた。

「佐藤さん。何か変じゃないですか？彼女、左手の薬指に指輪の跡が残ってるのに、事故当時は指輪をしていなかったみたいですよ。いつ、何の理由で指輪を外したんですかね。」

高木が首を捻りながら佐藤に問いかける。

佐藤は顎に手を当てて、ん、と小さく頷くと、さっきまで高木が見ていた死体検案書に目を通して言う。

「もうひとつ引っ掛かるのは、麻緒さんが右側のピアスをしていなかった事ね。どうして彼女、片方しかピアスをしてなかったのかしら？」

二人は互いに捜査資料を覗き込みながら唸った。

「落としちゃったんじゃないですか？」

高木が苦笑しながら言う。

「そう考えるのが自然よねえ。でも、なんか納得いかないのよ。しつくりこないっていうか。何がって言われても困るんだけど。」

佐藤が首を捻る。

高木もそれにつられて首を捻り、しばらく考え込んでいたのだが、はたと何かに気付いたように、まさか、と呟く。

「例えば、ですけど。」

ふ、と高木が覗き込んでいた資料から顔を上げ、思い付いた事を口にする。

「佐藤さんが大切にしている何かを誤って落としてしまったら、どうします？」

突然の高木の問い掛けに、佐藤は怪訝な顔で答える。

「どうするって、拾うでしょ、普通。」

当たり前じゃないの、と言わんばかりの佐藤に、たたみかけるように高木が次の質問をぶつける。

「じゃあ、落としたはずのそれが見つからなかったら？」

何言ってるの、と佐藤は呆れたような溜め息とともに言葉を吐き出す。

「探すに決まってるでしょ。」

そう言ってから、佐藤は短く、あつ、と声をあげる。

「そっか。麻緒さんが道路にしゃがみ込んでいたのは、何かを探してたから。高木くん、やるじゃない。」

ばあつと顔を輝かせて佐藤は高木を見上げる。

「いや、まだそうと決まった訳じゃないですけど、そういう可能性もあるんじゃないかって。」

高木は佐藤に褒められて、まんざらでもないといった表情で言う。

「ううん、多分それが正解よ。麻緒さんは探していたんだわ。」

右耳のピアスをね。と佐藤は呟く。

「どうしてピアスだってわかるんですか。」

高木は腑に落ちないといった顔で首を傾げる。

「あら、だって麻緒さんはコンタクトをしていなかったし、結婚指輪はバッグの中にしまってたじゃない。」

佐藤は自信に満ちた笑みで高木を見上げる。

「そっか。それならピアスが片方なかったのも頷けますね。」

高木は佐藤の言葉に感心したように呟いた。

## 第1章 事故or自殺？

「でも、なんか不自然な気がするのよね。これはあくまでも私の刑事としての勘なんだけど。」

佐藤は再び顎に手を当てて俯き、首を捻った。

「確かに僕も釈然としないんですね。僕はピアスなんてしないからよく分からないんですけど、ほら、ピアスって普通キャッチっていう金具みたいなのがついてるじゃないですか？何もしないのに、そんなに簡単に外れることってないと思うんですね。」

高木の台詞に佐藤は少しふて腐れながら、

「あら、よく分からないわりには詳しいんじゃない？高木巡査部長。」

じろりと横目で睨み付ける。

「あ、いえ、その、こないだ行ったアクセサリーショップの店員さんが、なんかそんなこと言ってたっけなあって、思い出しただけで別に深い意味は……」

高木がぎくりと肩を竦めて慌てて言い訳する。

「ふーん。一体誰と何しに行ったんだか。」

佐藤は疑いの眼差しを高木に向ける。

高木はあははと引き攣った笑いを浮かべる。背中に嫌な汗が流れ、その場から逃げてしまいたくなる。

「まあいいわ。どうせ私には関係ないことだし。」

関係ないと言いながらも、佐藤の眼には怒気がこもっている。

高木はぶんぶんと言がするくらい首を左右に振ると、自分でもびっくりするくらい大きな声で否定する。

「関係大有りです！僕は美和子さんの誕生日プレゼントを探しに行ってただけで、美和子さんに疑われるようなやましいことなんてしてませんから。」

高木はそう叫んでから、しまった、と慌てて手で口を塞ぐ。

佐藤に内緒でプレゼントを探しに行っていた事をばらしてしまった事に対するしまったと、職場で思わず上司である佐藤を美和子さんと呼んでしまった事に対するしまったが高木を混乱させた。

佐藤は呆れたような苦笑を浮かべながら、高木の頭をこつんと軽く一発。

そして、

「刑事のくせに、相手に手の内見せちゃ駄目でしょうが。それに、仕事中は美和子さんじゃなくて佐藤さん、でしょ。」

小さい子供にするように高木をたしなめる。

悪戯を咎められた子供のように、高木は肩を丸めて聞き取れないくらい小さな声で、すみません、と呟く。

そんな高木にくすくすと笑いを噛み殺しながら、佐藤は先ほどとは違う優しい瞳で高木を覗き込み、ありがと。楽しみにしてるね。と囁いた。

その言葉を聞いて生氣を取り戻した高木を見て、さっきまでひとりの恋する女性の顔をしていた佐藤は、さっと刑事の顔に戻る。

「さっきの話の続きなんだけど。」

きりりとした佐藤の表情に、つられて高木も刑事の顔になる。

「高木くんの言う通り、ピアスってそんなに簡単に外れるもんじゃないわよね。なんか偶然にしては出来過ぎって感じ。」

佐藤は得も言われぬ違和感に眉を潜め、不快感をあらわにする。

「それに、もうひとつ疑問に思うことがあるんです。」

高木も眉間に皺を寄せて唇を歪める。

「どうして麻緒さんが逃げなかったか、でしょ。」

佐藤が高木の疑問をさらりと口にした。

高木は一瞬驚いた顔をして、そして佐藤が自分と同じ事を疑問に思っていたんだと解るとすぐに少し嬉しそうな表情になる。

「いくら探すのに夢中になっていたとしても、街灯の少ないあの薄暗がりで、煌々とライトを点けた車が走って来れば、気付くと思うんです。例え逃げ切れなかったとしても、腰くらい浮かすんじゃない

いかつて。」

佐藤は無言で頷く。それは、高木に次の言葉を促した。

「でも、麻緒さんには逃げようとした形跡がない。それほどまでに必死になって探さなければならぬほど大切な物を探していたのか、あるいは……」

高木は次の言葉を口にするかどうか一瞬躊躇する。

佐藤から目を逸らすように視線を空中にさまよわせて、そして、意を決したように、溜め息と同時にその続きを吐き出した。

「跳ねられるのを待っていたか。」

高木と佐藤の間に数秒の沈黙が流れる。

佐藤はいたたまれないといったように瞳を伏せた。

「彼女、覚悟してたのかもね。」

佐藤の吐き出した言葉が、2人をやるせない気持ちにさせた。

「跳ねられるのを、ですか？」

高木は佐藤の答えを確かめる。

佐藤は複雑な表情を浮かべながら小さくこくりと頷いた。

2人の間に重たい空気が流れる。

深く、長い溜め息が2人の口から漏れた。

## 第1章 揺れる

「自殺、でしょうか？」

口火を切ったのは高木だった。

「かもしれないわね。考えたくないけど。」

俯きがちに佐藤は高木の腕にそつと手を伸ばす。その手は少し躊躇しながらぎゅうつと高木の腕を掴んだ。

高木ははつとして佐藤の顔を覗き込む。佐藤は唇を噛んで何かに堪えているようだった。普段捜査に感情を持ち込まない佐藤だが、資料室に高木しかいない状況がそうさせたのか。

高木は辺りに人影がないのを確かめると、佐藤の肩を引き寄せ、頭を優しくぽんぽんと撫でてやる。佐藤はことんとたれ掛かるように高木の胸に軀を預けた。華奢で小さな肩が震えている。高木は何も言わずに佐藤の髪を撫でる。佐藤の気持ちが高木の胸に突き刺さるようで痛かった。

佐藤は幼い頃に刑事の父を捜査中の事故で亡くしている。その後も大切な人を失う辛さを嫌というほど経験してきた。何度も心が折れそうになるのを一人で、あるいは高木と付き合うようになってからは二人で、必死に乗り越えてきたのだ。そんな佐藤だから、人の死というものに対する恐怖感や絶望感は相当なものだろう。

ましてや自らの意志で命を絶つということに対しては、高木以上に強い思いがあることは想像に固くなかった。

勝ち気で普段は決して動揺や弱さを見せようとしない佐藤のことだから、こうして付き合うようになるまではまったく気付かなかったのだが、当然佐藤にも心が揺れそうになる瞬間がある。彼女はそれを刑事の顔で覆い隠しているだけなのだ。本当はとても壊れやすく、繊細で、揺れ動いている。それを知ってしまったから。

だから自分はいつでも彼女の傍に居て、彼女が手を伸ばしてきた時いつでも捕まえられる存在でいようと誓ったのだ。彼女が自分の力

で前へ踏み出せるように、いつも見守っていようと決めたのだ。いつだって彼女の傍で。そう約束したのだ。何があっても決して彼女を一人ぼっちにしないと。

高木は佐藤の背中を幼子にするようにとんとんとさすってやる。

ややあつて、聞き取れないほどの小さな声で佐藤が、ごめんねと呟いた。

しばらくそうして背中を撫でていると、佐藤はふいに顔を上げ、真つすぐな瞳で高木を見る。

「ありがと。もう、大丈夫だから。」

その瞳に涙はなかった。

代わりに決して揺らぐことのない光が宿っていた。

佐藤は何事も無かったかのようにきりりと唇を結びなおすと、ずりと軀を起こす。

「とにかく、この事故に関してはもう一度慎重に調べる必要があると思うね。」

佐藤は高木が手にしていた捜査資料をぱたんと閉じると笑みを浮かべた。

その眼はすっかり刑事の眼に戻っていた。

## 第1章 揺れる（後書き）

シリアスな展開が続いたので、前回の『事故or自殺?』と今回の『揺れる』では高佐の2ショットシーンを書いてみました。いかがでしたか? やっぱりラブラブな2人を書くのが一番楽しいです! 感想お待ちしております。

## 第1章 結婚指輪の謎

翌日から高木と佐藤は神崎麻緒の周囲の人間に聞き込みを始めた。遺族である神崎史乃や夫の神崎篤はもちろん、神崎物産の社員、友人など、麻緒と関係のありそうなありとあらゆる人物をあたった。しかし、高木と佐藤が推測した事故の真相を裏付けるような有力な証言はなかなか得られなかった。麻緒は自分のことをむやみに他人に話さないタイプの女性だったようだ。

やはり、ただの事故だったのだろうか。

そんな思いが2人の脳裏をかすめたある日。

麻緒の大学時代の恩師から興味深い証言が出てきた。

その恩師によると、麻緒は数カ月前の同窓会の席で夫との離婚の意志をほのめかしていたというのだ。

すぐに冗談だと否定したらしいが、もしそれが冗談ではなく本気だったとしたら。

高木と佐藤はお互い顔を見合わせると、小さく頷いた。

可能性は十分だった。

彼女が本当に離婚を決意していたとしたら。そして、離婚問題でもめていたとしたら。それは自殺の動機となりうるのではないか。あるいは、自殺などではなく殺人事件である可能性も出てくるかもしれない。

2人は大学の研究室を後にすると、急いで車に乗り込んだ。

「麻緒さんが死の直前に指輪を外していたのは、もしかしたらその後会う相手に不快な思いをさせないためだったのかもしれないね。」

興奮冷めやらぬ、といった口調で高木が自分の手帳を繰りながら佐藤に同意を求める。

しかし、佐藤は顎に手を置き少し険しい顔をして、そうとも限らないわ、と呟く。

「現場の位置関係や史乃さんの証言から考えて、麻緒さんは実家に帰る途中で事故に会った可能性が高いわ。家に帰る人が、目と鼻の先にあるあの場所でわざわざ待ち合わせなんてするかしら。ましてや家に帰った直後にあの雨の中を誰かに会いに傘もささずにまた出掛けて行くなんて、考えにくいじゃない。」

「じゃあ、事故が起こったのは指輪を見られたくない誰かと会った後だったのかもしれませんがね。麻緒さんが傘をさしていなかったのも、その誰かに車で近くまで送って貰ったからかもしれません。」

高木は佐藤の言葉を受けて、淡々と自分の推理を話す。

「多分そんなところね。麻緒さんの性格なら、お母さんを心配させまいと実家に着く前に指輪をはめなおしていたでしょうしね。」

佐藤は顔を上げると、少し悪戯っぽい目で高木に問い掛ける。

「高木くん。相手は誰だと思う？」

高木はむうつと唸り声を上げ、首を捻る。しばらく考えてから、普通なら、と怖ず怖ずと答える。

「浮気相手、とか、ですよね。」

佐藤は相変わらず唇の端に笑みを浮かべて高木の答えを聞いている。「でも、今のところ麻緒さんが浮気をしていたという話は何処からも出て来ていませんし。」

誰なんだろう、と小さく呟きながら、高木はぽりぽりと頭をかく。すると、さっきまで黙って高木の推理を聞いていた佐藤が口を開いた。

「こうは考えられないかしら。麻緒さんが指輪を外していたのは、相手に自分の意思を伝えるため。つまり、自分はあなたと離婚したいという意思表示。」

あつと高木は息を飲む。

「じゃあ、麻緒さんが最後に会ってた相手って。」

佐藤が静かに笑む。

「恐らく、神崎篤。彼女の旦那よ。」

## 第1章 消し去られた意思

高木と佐藤は神崎篤に事情を聞こうと何度も彼の元へ足を運んだ。しかし、彼は離婚話はなかった、麻緒とは上手くいっていたと繰り返すばかりだった。

次第に彼は高木と佐藤の来訪を疎ましがるようになり、口数も減っていった。時には居留守を使うこともあった。

「これ以上神崎篤を追求しても進展はなさそうね。」

佐藤が溜め息と一緒に吐き出す。

「そうですね。」

高木も苦笑を浮かべるしかなかった。

「仕方ないわ。今度は違うところから攻めてみましょう。」

佐藤は不敵な笑みを浮かべて高木を見る。

オレが事件の容疑者だったら佐藤さんに事情聴取されるのは嫌だなあ。だって佐藤さん、いろんな意味でうちの課で一番恐いんだもん。高木はその笑みを前に不謹慎ながらそんなことを考えていた。そして困ったような笑みを浮かべる。

「あの、違うところって？」

怖ず怖ずと問い返す高木に、

「当事者が何も話してくれないんだもの。近親者に聞くしかないでしょう？」

当たり前じゃない、と言いたそうな顔をして佐藤が答える。

「さあ、まずは史乃さんからあたってみましょうか。まあ恐らくこちらが期待しているような答えは聞けないと思うけど。」

佐藤は運転席の高木に神崎邸に向かうよう促した。

高木は無言で頷くと、車を神崎邸へと走らせる。その車内で佐藤は頬杖をつきながら、高木には目もくれずに呟いた。

「恋人同士でもいろいろあるんだもの。夫婦となれば尚更よね。お互い言えない事もあるだろうし。」

佐藤の言葉に高木はどきりとする。

一気に汗が噴き出し、喉の奥に声が張り付く。

「さ、佐藤さんも、あるんですか？僕に言えないこと。」

何とか張り付いていた言葉を吐き出し、高木はちらりと佐藤の横顔を見遣る。佐藤の返事が怖くてまともに顔を見ることができない。

少しの沈黙の後、佐藤は相変わらず前を向いたままぶつきらばうに答える。

「んー。あるといえばあるし、無いといえば無い、かな。」

高木ががつくりと肩を落としたその時、さっきまで高木の方を見ようともしなかった佐藤が突然くるりと振り返る。

「でも誤解しないで。あなたに対する気持ちは変わらないから。」

それだけ言つと、佐藤は再び何事もなかったように前を見る。

高木は天にも昇らんばかりの笑顔を零す。

「僕も佐藤さんに対する気持ちは一生変わりませんから。だから・

・」

続けようとした高木の言葉を佐藤は恥ずかしげに苦笑を浮かべてやんわりと遮った。

「続きは仕事が終わってからにしましょう。でないと仕事にならないわ。」

高木は、はいつ、と勢いよく返事を返した。

ほどなくして2人は神崎邸の近くのパーキングに着く。

神崎邸は細い道の突き当たりにあるため、車で乗りつけるのはどうかという佐藤の判断からだった。

2人の突然の来訪にも史乃は嫌な顔ひとつせず出迎えてくれた。

しかし、2人が麻緒と篤の離婚話について切り出すと悲しそうな顔で答えた。

「あの子がそんなことを？私にはそんなそぶりは一切見せませんでした。篤さんもちつともそんな話はしませんでしたし、2人とも変わらず私には優しくしてくれていました。私には仲がいい夫婦にしか見えなかったのに。」

今にも泣き出しそうな顔をして史乃は俯いた。

高木は少し困ったような笑みを浮かべて史乃の顔を覗き込む。

「史乃さん。僕たちはそういう情報があったから確認したかっただけなんです。直接麻緒さんに聞くことができない今、僕たちはひとつひとつ疑わしい情報をこうして確認して潰して行くしかないんです。その事で史乃さんに嫌な思いをさせてしまつて。すみません。」

高木が頭を下げると、続けて佐藤も頭を下げる。

「ただでさえ娘さんを亡くしたばかりでお辛い時に、こんな不躰なお話をしてしまつて。本当にすみません。」

2人の言葉に史乃は顔を上げ、小さく首を振った。

「いいんですよ。それが刑事さんのお仕事ですものね。私なら大丈夫です。気を使わせてしまつてごめんなさいね。」

史乃は気丈に微笑んだ。

それ以上2人は何も言う事ができなかった。

## 第1章 お互いさま

高木と佐藤は神崎邸を後にした。

今にも泣き出しそうな空を見上げながら、高木が呟く。

「やっぱり史乃さん、何も知らなかったみたいですね。」

佐藤は立ち止まり、俯いたまま短く、そうねと答えた。

「佐藤さん？」

泣いているんじゃないかなどと不安になって高木は佐藤の顔を覗き込む。

しかし、高木の心配は無用だった。佐藤はじつと1点をみつめたまま眉をしかめ、不快な顔で言った。

「刑事は人を疑わなければならぬ嫌な商売だって、昔長さんが言ってたけど本当にその通りね。このまま諦めてしまえば、これ以上誰も傷付かずに済むかもしれないのに。」

刑事の私がそれを許さないのよ。と佐藤は静かに、しかし意思を秘めた口調ではつきりと呟く。

本当に嫌になるわ、と佐藤は不快感に身を沈めたまま、唇の端に苦笑を浮かべながら顔を上げる。

「佐藤さん。確かに刑事ってのは因果な商売です。時には誰かを、もしかしたら自分をも傷付けてしまうかもしれない。でも、誰かが真実を明らかにしなければ、いつまでも真相は闇の中に置き去りにされてしまふんです。そのことの方が、僕は怖いことだと思ふんですよ。」

高木は佐藤の横顔に語りかける。

佐藤の強張った苦笑がふとほぐれた。

「格好いいこと言っちゃって。」

佐藤は静かに笑んだ。高木の方を真っ直ぐに見据えると、参ったな、と呟く。

「いつも、そう。高木くんは私以上に佐藤美和子っていう人間のこ

と、分かつてるのね。私が辛い時、揺れた時、必ず傍に居てくれる。

「

高木は満面の笑顔を返すと即答する。

「そう約束しましたから。あなたが僕を必要としてくれる限り、あなたの傍に居るって。」

高木の笑顔に佐藤も眩しそうに目を細めて相好を崩す。

「それに、僕、頼りないからいつも佐藤さんに引っ張って貰ってますし。お互い様です。」

あはは、と二人は顔を見合わせて笑う。

「自分で言ってちゃ世話ないじゃない。」

佐藤は高木の肩を指先でつつく。

「ありがとう。おかげで少し気が楽になったわ。」

小さく礼を言くと、佐藤は駆け出した。

「今度は麻緒さんの近所の人に話を聞いてみましょう。高木くん、運転よろしくね。」

高木は慌ててその後が続く。

相変わらず泣き出しそうな空を気にしながら、麻緒と篤が住んでいたマンションへ向かう。

近所の住人に話を聞いて回ったものの、やはりそれらしい話は出てこなかった。

高木と佐藤はどちらともなく深い溜め息を吐き出す。

「やっぱり麻緒さん達の間離婚話があったっていう事を裏付けるような証言はないすね。」

高木が頭を掻きながら呟く。

「そうね。」

佐藤は言葉少なに答えた。

この数日後、高木と佐藤はこの事故の捜査から外れることとなった。事故は仲田の前方不注意によるものだとして、起訴されることとなったのだった。

## 第2章 手掛かり発見

高木は静かにエンジンをかける。

ゆつくりとアクセルを踏み込むと、緩やかに車は発進した。

高木ははやる気持ちを抑えるように、数回深呼吸をする。

3月ももうすぐ終わるというのに、夜はまだ少し肌寒い。コートを羽織っていても寒く感じるくらいだ。

今朝、佐藤が本庁を後にした時の服装を思い出し、高木は心配になる。確か、コートは羽織っていたように思う。しかし、もし暖房の入っていない場所に監禁されていたとしたら、コートだけでこの寒さをしのげるだろうか。しかも、佐藤はああ見えて結構寒がりなのだ。もし自分が一緒にいたなら自分のコートを佐藤に貸してやることもできるかもしれないが、佐藤がどこにいるかも分からない今では、それも無理というものだ。

高木はただ佐藤が無事にこの寒さをやり過ごしてくれることを祈った。

そして、自分の無力さを恨んだ。

監禁されているのが自分だったら良かったのにとすら思った。

だが、もしもの話ばかりを並べてみても何も始まらないことは、高木が一番よく知っていた。

とにかく一刻も早く佐藤を見つけたさなければ。

高木は自分の刑事としての勘を信じ、神崎邸を目指す。

神崎邸は幹線道路から少し離れた場所に位置しており、しかも狭い路地の突き当たりにあるものだから、車を乗り入れるのははばかれる。そのため、佐藤と高木は史乃の家に聞き込みに行く際、いつも神崎邸から300メートル程離れた所にあるコインパーキングに車を入れ、歩いて向かった。もし、佐藤が車で神崎邸に向かったのなら、恐らくあるはずだ。あのパーキングに。佐藤の愛車、赤のアンフィニが。

自然に気持ちが高ぶる。何故かはわからないが、高木は自分の推理に自信があつた。

神崎邸へと通じる細い路地の少し手前にあるパーキングはさすがにがらんとしている。

駅に近いという立地のせいか、日中は車も比較的多く停まっているのだが、深夜に近い時間ということもあつてか今は閑散としている。高木はハザードランプを点け、パーキングに車を寄せて停止した。

急いで車を降り、中へ向かう。

そんなに広くないパーキングには車が3台。

その中に見覚えのある赤のアンフィニがあつた。

奥から3番目のスペースにピツタリと止められたその車に、高木は駆け寄る。

ナンバーを確認し、それが間違いなく佐藤の物であることが判ると、高木は大きく息を吐いた。

やっぱり。

やっぱり佐藤さんは千葉と別れた後、史乃さんに会いに来たんだ。

高木は自分の推理が正しかったことに少しの自信と不安を感じた。

この車をここへ停めたのは恐らく佐藤だろう。

しかし、万に一つの可能性ではあるが、佐藤以外の誰かが佐藤の車をここに放置した可能性もあるのだ。

高木はこの赤いアンフィニをここへ停めたのが佐藤であるという確固たる何かが欲しかった。

高木は佐藤の運転席のドアを開けようと試みしてみる。

しかし、当然のことながらドアはきちんとロックされており、すんなり開くことはなかった。

「畜生！」

普段は滅多に口にしない言葉が苛立ちとともに口から零れる。

こんなことならスペアキーを借りてきとくんだった。

高木はがしがしと頭をかく。

千葉に電話して持って来て貰おうか。それとも一度本庁に戻ろうか。

考えあぐねてうろつろと歩き回っていたその時、高木の目に何かが飛び込んで来た。

防犯カメラ！そうだ。もしかしたら防犯カメラに映っているかもしれない。

高木は慌ててパーキングメーターに駆け寄ると、管理会社の電話番号を探す。

電話番号を見つけると、直ぐさま胸ポケットから携帯を取り出し、メーターに記載された番号をダイヤルする。

数回のコール音がして、がちやりと受話器を取る音が電話の向こうから聞こえた。

## 第2章 手掛かり発見（後書き）

第2章に突入です。高木くんは佐藤さんの足取りを追って少しずつ佐藤美和子誘拐の真相に迫ります。佐藤さんの身に何があったのか？高木くんの推理によって次第に明らかになっていく予定です。

## 第2章 確認

高木は電話口の男性に自分の身分を名乗り、行方不明者の搜索をしている旨を手短に説明した。

その上で、行方不明者の運転していた車がこの駐車場に停まっていることや、もしかしたら防犯カメラにその映像が映っているかもしれないことを伝え、カメラの映像を見せて欲しいと申し出た。

管理会社の社員は間もなく深夜の時間帯になるにも関わらず、高木の無理な頼み事を快く引き受けてくれた。

高木は管理会社の住所をメモすると、何度も礼を言つて電話を切る。少しの期待と不安が入り交じった複雑な気持ちで大きく息を吐く。そして、ふと何かを思い出したかのようにもう一度佐藤の車の前に行く。

今度は額を窓に押し当てようにしてじっと中を見る。

そしてほつと安堵の溜め息をつく。

車内に佐藤が今朝羽織っていたコートはなかった。佐藤はコートを着て神崎邸へ向かったのだらう。それが分かれると高木はよかった、と小さな声で呟いた。

高木はひっそりと主の帰りを待ち続けているその車に小さく、しかし力強く語りかける。

佐藤さん。必ずオレがあなたを助け出しますから。だからオレを信じていて下さい。と。

そして、佐藤の車庫ナンバーを確認すると、今度はパーキングメーターへと急ぐ。

さつき管理会社の電話番号を調べていて、高木はあることに気付いたのだ。このパーキングは車庫ナンバーをメーターに入力すると、駐車料金が表示されるシステムになっている。つまり、表示された駐車料金からその車が何時間そこに停まっていたかが判る仕組みになっているのだ。

それならば。

佐藤の車が停まっている車庫ナンバーを入力すれば。

佐藤が何時間前にこのパーキングに来たのかが判るはずだ。

高木は微かに震える指でゆっくりとメーターに車庫ナンバーを入力する。

示された駐車料金から、佐藤が8時間半程前にこのパーキングに車を停めたことが判った。

8時間半前ということは、3時半頃。

千葉が最後に佐藤と別れたのが3時過ぎだったと言っていたからつじつまがあう。

確認を済ませると、高木はきゅっと唇を結び、急いで車に戻る。

シルバーのスカイラインが夜のとばりの中を滑るように横切り消えて行った。

## 第2章 確認（後書き）

高木くんの捜査車両、原作では現在スカイラインを駆ってはいないみたいですが、そのイメージが強かったので、ここではあえてそれにしてみました。作者による妄想です。すみません。

## 第2章 自信と不安

その管理会社はビルの7階にあった。

エレベーターを待つ間も頭の中に今まで組み立ててきた推理が渦を巻く。

もしも自分の予想が外れていたら。

考えると怖くなる。背中に悪寒が走り、高木はひそかにぶるりと身震いした。もし外れていたら、総ては振り出しに戻ってしまう。一から考え、搜索するとなると、果たしてどれだけの時間がかかるだろう。その間、佐藤は無事で居てくれるのだろうか。

何か、確証が欲しい。次に進むための確証が。

自分の推理には自信がある。恐らく間違っではないはずだ。しかし、それはまだ根拠のない偶像に過ぎない。それを実証するには証拠が少なすぎた。ましてや今の状況では不安になるなと言う方が無理だ。その不安を打ち消すように、高木は大きく深呼吸する。

エレベーターの到着を知らせる音が狭いロビーにやけに大きく響き渡る。ぽつかりと口を開けた箱の中に吸い込まれるように乗り込むと、高木は7階のボタンを押した。エレベーター内の限られた狭い空間に溜め息ばかりが漏れる。

深夜という時間帯のせいか、エレベーターは一度も止まる事なく7階へと高木を運ぶ。

広くないフロアはやけにしんとしていた。そのことが、余計に不安を掻き立てる。

高木はぎゅっと爪が食い込むくらい強く掌を握り、小さく息を吐くと、管理会社のドアを開けた。

そこは沢山のモニター画面が列ぶ無機質な空間。数人の男性が声もなく画面を見つめている。

出入口に近い席に陣取っていた細面の男性が高木の来訪に気付き腰を上げた。

高木は警察手帳を取り出して男性に示す。

「先程お電話頂いた刑事さんですね。」

男は画面を見つめていた時とはうって変わって相好を崩す。人の良さそうな笑顔が高木の張り詰めた心をほっと落ち着かせた。

「こんな時間に無理をお願いしてすみません。警視庁捜査1課の高木です。ご協力感謝します。」

高木が頭を下げると、男は微笑みを浮かべたままポケットから名刺を取り出す。

「明石です。刑事さんも大変ですなあ。私どもでよければ何時でも協力しますよ。さあ、こちらへどうぞ。」

通されるままにモニター室の片隅にある部屋に入ると、

「むさくるしい所ですみませんね。今持って来ますんで、ちょっと待って下さいね。」

と明石はにこやかな笑みを残し、姿を消した。

大きなモニターが設置されたその部屋のソファに体を沈め、今日数え切れない程漏らした溜め息を吐く。

映っているという確証はない。しかし、映っているに違いない、いや、映っていて欲しいという思いが頭の中を駆け巡る。

手を組んで額に押し当てると、瞼の裏に柔らかに微笑む佐藤の姿が浮かぶ。高木が一番好きな笑顔。

今はその笑顔が自分の元から消えてしまわないように祈ることしかできない。

強く瞳をつぶり、弱気な自分を消し去るように繰り返し繰り返し、まるで呪文のように呟く。

オレは刑事なんだ。と。

## 第2章 自信と不安（後書き）

今日は本編で高佐ファンにとっては記念すべき展開が！！朝からテンション上がりっぱなしなのですが、こちらは相変わらずローテーションな展開ですみません。でも本編に負けにくいくらいカッコイイ高木ちゃんと可愛い佐藤さんが書けるよう頑張りますので、よろしければお付き合い下さい。

## 第2章 見つけた確証

背後でぱたんとドアが閉まる音がして、高木ははっと顔を上げる。少し心配顔をした明石が、防犯カメラの映像が入ったディスク数枚を片手に、

「お待たせしました。刑事さん、大丈夫ですか？」

と高木の顔を覗き込む。

高木はいつもの穏やかな笑顔を浮かべて、すみません、と頭を掻く。  
「さっきパーキングメーターで大体の入庫時間を確認したんですが、多分昨日の3時半前後だと思われるんです。」

高木が明石にそう伝えると、明石はディスクの入ったプラスチックケースに書かれた日付と場所、ナンバーを確認し、これかな、と一枚のケースを抜き出す。

「うちは大体6時間おきにディスクを交換するんですよ。3時半頃だったら恐らくこのディスクに入ってると思うんですが。」

と高木に差し出す。

ケースの表にはさつき高木が佐藤の車を発見した駐車場の名前と昨日の日付、そして、No.3と書き込まれていた。

「この映像、見れますか？」

高木の問いに、明石は穏やかに微笑むと、

「もちろんです。今そちらのモニターで再生しますから、ちょっと待って下さいね。」

とそのディスクを高木から受け取り再生する。

大きな画面にモノクロの画像が映し出され、明石が高木に説明する。  
「左下に表示されているのが録画された年月日と時間です。今の映像は12時過ぎのものですから、3時半頃の映像でしたらもう少し後になりますけど、早送りしましょうか？」

明石の言葉に高木は少し考え、答える。

「とりあえず、このまま回しというて貰えますか？」

明石は頷くと部屋の隅にある衝立で囲まれた一角を指差して言う。

「何かあれば遠慮なく言って下さい。私はそこで資料の整理でもしてますんで。」

「ありがとうございます。」

高木は明石に礼を言々と、画面に向き直る。

高木は身じろぎひとつせずじつと画面を見つめた。何の変化もないまま映像は流れていく。映像を見始めて3時間以上が経過したが、そこには佐藤のものではない車が数台出入りした様子しか映し出されていなかった。さすがに目がしばしばし始めた頃、画面の左側から1台の車が滑り込んできた。

高木は思わず身を乗り出す。

モノクロではあるけれど、見馴れた車体。それは間違いなく佐藤のアンフィニだった。

運転手の姿ははっきりと見て取れないが、高木は佐藤だと確信していた。運転手は馴れたハンドル捌きで車を駐車スペースにぴたりと停める。

降りてきた運転手の姿が画面に映し出された瞬間、高木の鼓動が一気に跳ね上がる。ひどい動悸に見舞われ、思わず吐きそうになった。見間違いようもなく、それは佐藤美和子その人だった。

高木の目は画面の中の佐藤に釘付けになる。呼吸をすることも忘れて高木の目は佐藤の姿を追う。

佐藤はドアロックをかけ、少し俯くとしばらくの間そこにぼつと立ち尽くしていた。そして、意を決した様に顔を上げ歩き出す。細かい表情までは見て取れない。

高木は佐藤が画面の左端に消えて行くのを見届けると、大きく息を吐いた。

自分の推理が的中したことに、自嘲気味な乾いた笑みを零す。当たっていた事に対する安堵より、戸惑いや不安の方が遥かに大きかった。心の中に暗い闇がたちこめ、飲み込まれそうになる。

高木は思わず目をつぶる。

目の前に広がった闇の中で必死にもがく。

オレがしっかりしないと。

高木は自分を奮い立たせるように何度も呟いて、目を開ける。  
落ち込んでいる場合ではなかった。

## 第2章 大切な人

高木は明石に声をかけ、ぎこちない笑みを作って礼を言う。

「ありがとうございます。おかげで行方不明者の足取りがひとつ確認できました。」

高木の少し上擦った声に、明石は何かを察したのか複雑な笑みを浮かべて、

「いえ、お役に立てたのなら……」  
と言葉を濁した。

ささやかな沈黙の後、

「早く見つかるといいですね。その人。」

明石がぼそりと呟く。

その言葉に高木は無言で頷いた。

「刑事さんなら見つかりますよ。きっと。」

明石は高木を元気づけるようにはっきりと、力強く言葉を紡ぐ。

「大切な人、なんでしょ？」

明石の言葉に、高木はびっくりして顔を上げる。そんなことは一言も漏らした覚えがない。事実、まだ捜査本部も立ち上がっていない状況での単独捜査である以上、詳しい内容は一切話せない。行方不明者の名前はおろか性別すら口にしていない筈なのに。

不思議そうに見つめる高木に、明石は白髪の混じり始めた頭を掻きながら苦笑混じりに答える。

「いや、刑事さんの表情を見ていたら、そうなのかなと思ってすみません、余計なことを……」

俯く明石に高木はゆっくりと表情を和らげ、静かに微笑んだ。

「大切な人なんです。この世で一番。」

高木ははっきりとそう言っ

て、  
「でもこのことはあなたと僕だけの秘密にしておいてください。ばれたら大目玉喰らっちゃうかもしれないんで。」

と笑った。

明石は穏やかな微笑みを浮かべて頷く。それを確認すると、高木は再び刑事の顔に戻る。

「ところでこのディスク、お借りすることって出来ますか？」

まだ途切れることなく映像が映し出されている画面を指差し高木は尋ねた。

「ええ、もちろんです。今すぐ用意しますよ。」

明石はそう言うと、直ぐにディスクの再生を中断して取り出し、プラスチックケースにしまう。

「どうぞ、持ってってください。」

人のいい笑顔で高木に差し出す。

「何から何まですみません。おかげで助かりました。ありがとうございます。」

捜査が終わったからお返ししますんで、と高木は丁寧に礼を言った。管理会社を後にすると、高木は再び表情を引き締める。少しずつではあるが、佐藤の足取りが掴めてきた。その事が高木に希望を与えた。

高木は車に乗り込み考える。一旦本庁へ戻り、目暮にこのディスクを渡して今まで高木が調べてきた事を報告するべきだとは思いつ。しかし、高木の気持ちはそれを拒んだ。上司への報告と先ほど見たばかりの映像を再度検証するのに時間を割く気にはなれなかった。佐藤がいなくなったことでいつも以上にめまぐるしく過ぎた最悪の一日の疲れと、佐藤の居場所を特定するもつと大きな手がかりを探し出し、一刻も早く佐藤を助けたいという焦り。それが高木の本音だった。

これから、どうしようか。

ちらりと時計を見る。まだ5時にもなっていない。ちゃんと朝が来るのだろうかと不安になるくらい真っ暗な空をフロントガラス越しに見上げ、高木は大きく息をついた。

神崎邸に向かうにはまだ早すぎる。高木の推理では、恐らく神崎邸

には佐藤はおるか史乃も居ないであろう。2人とも犯人に拉致された可能性が高いと思う。しかし、家宅搜索の令状がおりていて、被疑者が逃走する恐れがあるなどというのなら話は別だが、他人の家をこんな早朝から訪問することはできない。

ゆっくりと思考を巡らせながら、高木は苦笑する。

刑事としてサイテーだよな、オレ。

上司への報告も無しに単独行動する決意を固めている自分に自嘲気味の笑みが浮かぶ。

佐藤なら、何と言うだろうか。

きっと馬鹿って怒鳴られるんだろうなあ。サイテーって白い目で見られるかもしれない。いや、もしかしたら嫌われるかもな。

高木はふっと息を吐く。

嫌われてもしようがない。今は自分の気持が導くほうへひたすら走り続けるだけだ。

高木はエンジンキーを捻るとゆっくりと車を走らせた。

## 第2章 大切な人（後書き）

高木君に「この世で一番大切な人」という台詞を言わせてみたかったです。はい。自己満足です。すみません。

## 第2章 不在証明

気が付くと、高木は神崎篤の住むマンションへと車を走らせていた。全ての鍵を握っているのは彼しかないという思いがそうさせたのだろう。

佐藤が神崎麻緒の事故の起訴を目前に控えた昨日、神崎史乃の家へ向かい、その直後に失踪した事は、先程神崎邸付近の駐車場で見つけた佐藤の車が物語っている。高木には佐藤の失踪と麻緒の事故は密接に係わり合っているようにしか思えなかった。これは、刑事としての勘だった。

いくら神崎篤が神崎物産の社長で忙しいとは言っても、出張でもない限りさすがにこの時間なら自宅に帰っているだろう。

もし神崎が佐藤を拉致した犯人なら、恐らく自宅に監禁するような事はしないはずだ。都内でも有数の高級住宅街にある高層マンションは管理人が常駐しており、防犯カメラもあちこちに設置され、セキュリティは万全だったはず。そんな所に誰にも怪しまれる事なく成人女性を運び入れるなんて至難の技だ。

もし神崎が不在であったとしたら、彼が佐藤を拉致した犯人である可能性はぐんと高くなるのではないか。

高木の頭の中でぐるぐるとそんな推理が巡る。

まだ夜明けが遠い早朝の街を走り抜け、ようやく神崎のマンションにたどり着く。

高木はとりあえず、神崎の車を確認するため駐車場へとハンドルを切る。このマンションの駐車場は地下にあり、表からは停めてある車が見えない造りになっている。何度も神崎のマンションを訪問し、そのことを知っていた高木は躊躇することなく駐車場に車を乗り入れた。

神崎家の車庫は3台分あり、1つは篤が所持している外車用、1つは麻緒が使っていた国産の軽自動車用、もう1つは来客用であった。

高木が記憶を辿りながら神崎家の車庫の前までゆっくり車を進めると、予想に反して篤の愛車である黒いスポーツカーが目飛び込んできた。

溜め息をつきかけて、高木はあることに気付き、はっとして目を凝らす。

ないのだ。

麻緒が使用していた軽自動車が。

もしかしたら麻緒が亡くなって乗る人が居なくなったから処分したのかもしれない。しかしそれなら車庫も1台分減っていてもいいはずだ。しかし、麻緒の車が停まっていたスペースの隣にも、もう1台分のスペースがあり、そこにも神崎のネームプレートが付けられていた。神崎は相変わらず3台分の車庫を所有しているようだった。高木は鋭い目つきで一点を睨みつけ、考える。

出張に行くのに軽自動車を利用することがないとは言えない。しかし、高木には神崎篤が史乃の家へ行くのに目立ちにくい麻緒の車を利用したと考えた方が自然な気がした。そして、そこで史乃と、偶然彼女の家を訪問した佐藤を拉致したのではないか、とも。

高木はそこまで考えを巡らせると、空いたスペースでUターンし地上に出る。駐車場への出入りが確認できるぎりぎりの所に車を停め、エンジンを切る。ステアリングにもたれ掛かり、じっと目を凝らして様子を伺う。

暦の上では既に春を迎えているこの時期でも、早朝の冷え込みはかなりのものだ。エンジンを切ってしまうと途端に車内の気温も下がりは始める。次第に冷たくなる空気に、高木はぶるりと体を震わせた。ふと頭の中に佐藤の姿が浮かぶ。昨日の佐藤は、彼女にしては珍しい淡い桜色の薄手のセーターにグレーのスーツとかなり春らしい装いだっただ。しかし、分厚い冬物のコートを羽織っていたところがいかに寒がりの佐藤らしかった。

佐藤さんは大丈夫だろうか。寒さに震えているんじゃないだろうか。考えるだけで高木の心はぎゅっと締め付けられ、いてもたってもい

られなくなる。

高木は強く目を閉じふっ切るように首を振ると、駐車場に出入りする車がないかと再び目を凝らす。

空が白み始め、街にいつものざわめきが戻り始めたところで、高木は静かにエンジンをかけた。

結局、神崎篤が帰って来ることはなかった。

## 第2章 不在証明（後書き）

次回でいよいよ第2章完結（予定）です。お楽しみに。

## 第2章 刑事の機転

午前9時半過ぎ。

コンビニ飯で軽く食事を済ませた高木は 一部上場企業の会長の自宅だとは思えないほど簡素な神崎邸の前に立っていた。

庭には史乃が好きだと言っていた花々が美しく咲き誇っている。

高木はふと新聞受けに目をやる。そこには新聞が2つ無造作に突っ込まれていた。

高木の心臓が大きくどくと脈打つ。

1つは今日の朝刊。もう1つは昨日の夕刊か？

だとしたら、史乃は昨日の夕刻から新聞を取ることができない状態であるということだ。

やはり。

高木の脳裏に嫌な予感がよぎる。

慌てて震える指で、ゆっくりと門扉に設置されたインターホンを押す。

1回。2回。3回。

しかし、応答はない。

高木は胸に沸き上がってくる不安をなんとか押さえながら、門扉をくぐる。

玄関の前で立ち止まり、扉をノックしながらこの家の主の名前を呼ぶ。

「神崎さん？神崎さん！」

だが、やはり史乃が出てくる気配はない。

「史乃さん、警視庁の高木です。史乃さん！」

何度となくノックしてみるが、史乃の朗らかな声が聞こえてくることはなかった。

高木は思わず引き戸に手をかける。

からりと音がして、古めかしい扉は何の抵抗もなく開いた。

変だ。

高木は直感した。

以前史乃の家を訪れた時、史乃は鍵を開けて高木達を中に招き入れると再び鍵をかけ、怪訝な顔をする高木達に笑いながらこう言ったのだ。

「最近は何事が多いから、家に居るときでも鍵をかけるようにしているの。なんせ老女の一人暮らしでしょう。でも、人が来てる時も、つい癖で鍵をかけてしまうのよねえ。」

それなのに今家の鍵はこうして開いている。用心深い史乃が鍵をかけずに外出するなんて有り得ないし、仮に史乃が家に居てうっかり鍵をかけ忘れたのだとしても、高木の訪問を無視するような無神経な人間でないことも確かだった。

高木の胸に沸き上がる不安はますます大きく膨れ上がる。

恐る恐る扉を開け、中を覗き込む。

玄関は以前に訪れた時と同じくきちんと片付けられていて、下駄箱の上には史乃が活けた花が飾られていた。室内はしんと静まり返って人の気配すらない。

「史乃さん、勝手に失礼します。」

応答のない主に一応声をかけると、高木は宅内に上がり込んだ。

「史乃さん、どこですか？居たら返事してください。史乃さんっ！」

高木は大声で叫びながら、手前の部屋から順に中を確認していく。しかし、どの部屋にも史乃の姿はなかった。しかも、どの部屋も暖房を使用した形跡がなく、寒々としている。もうすぐ4月になるというのに、この間から寒の戻りともいうのか再び寒い日が続くようになり、昨夜などは暖房無しでは過ごしづらい気候だった。

恐らく史乃も在宅していれば暖房をつけたであろう。

しかし、リビングも寝室も完全に冷え切っていた。

それはつまり、この家の主が長時間留守にしていることを物語っていた。

やはり、史乃さんは昨夜から家に居なかったんだ。

高木は確信した。

佐藤だけでなく恐らく史乃も、何者かに拉致されたに違いない。

そして、その犯人は多分……

高木は頭の中で考えを巡らせながら、手掛かりを求めて宅内を調べ始めた。

そして、客間として使われている和室を見回していた時。

何かが頭の中に引っ掛かった。

あれ？あの座布団、何かおかしくないか？あの座布団だけ妙に分厚いような……

高木は敷いてあった来客用の座布団に駆け寄る。

息を殺してめくってみると、下から見覚えのある鉄の塊が出てきた。これは……

それは佐藤が所持していたはずの拳銃だった。

慌てて手に取り、中を確認する。全部で5弾。すべて装填されていた。

やっぱり佐藤さんはここに來たんだ。

高木は強く唇を噛む。

拳銃が座布団の下にあったということは、佐藤が何らかの事情で隠したということだ。しかもそれがよほど切羽詰まった事情であったことは容易に想像がつく。

恐らく、佐藤さんはここで犯人に襲われたんだ。昨日、史乃さんに事故の真相を明らかにできなかったことを謝るためにここに來て。そして、異変に気付いた。オレと同じく玄関の鍵が開いていたことを不審に思った佐藤さんは、この客間で倒れている史乃さんを発見して、犯人に襲われたんじゃないか。そして、朦朧とする意識の中で、犯人の隙を見てここに拳銃を隠した。

それは、自分がここに來た痕跡を残すためでもあり、犯人の手に拳銃が渡るのを阻止するためでもあったのだろう。

高木は負傷してもなお、刑事としての機転を忘れなかった佐藤に感心すると同時に、確固たる手掛かりを残してくれた事に感謝した。

佐藤さん。あなたは必ずオレが助け出しますから。だから、どうか無事でいて下さい。

高木は再び心の中で強く思った。

## 第2章 刑事の機転（後書き）

ようやく第2章完結です。ここまで高木くんの目線で事件を追って来ましたが、次章では佐藤さんの目線で話を展開していきたいと思っています。高木くんが佐藤さんを大切に想っているように、佐藤さんも高木くんを想い、守ろうとする姿が書ければいいなと思っていますので、よろしければお付き合い下さいませ。

### 第3章 最悪の目覚め

佐藤美和子は頬に当たる冷たい感触で目が覚めた。

エアコンでも付いているのだろうか。

肌寒い風が薄暗い室内で佐藤の頬を撫でる。

ここ、どこ？

佐藤の体は無気質な床の上にごろりと転がされていた。体を起こして周囲を見回そうとするが、自由が効かない。そして、どうやら後ろ手に拘束されているらしいことに気付く。

右側頭部に鈍い痛みを感じて、佐藤は顔をしかめた。ぼんやりする頭で自分の身に何が起きているのかを考える。しばらく考えを巡らせていると、何の前触れもなく突然佐藤の脳裏に意識を失う直前の記憶がフラッシュバックする。

私、史乃さんの家で誰かに襲われたんだ。倒れている史乃さんを見て付けて、駆け寄って。油断していた。気配を感じて振り向こうとした瞬間、何かで頭を殴られて。そのまま意識を失った。多分、私が気を失っている間に犯人はここへ運んだんだ。そして、その犯人は恐らく・・・

結論を導き出そうとしたその時。

がちやりと静かにドアが開く音がした。

佐藤は首を傾けて必然的にそちらを見る。

「よう、ずいぶん遅いお目覚めじゃないか。刑事さん。」

ひよろりと背の高い男が佐藤の前に姿を現した。

「神崎・・・」

佐藤は憎々しげにその男の名前を呟く。

「俺は待ちくたびれたぜ。あんたがなかなか目を覚まさないからなあ。」

男は佐藤の方に歩み寄ると、にやりと不敵な笑いを浮かべて佐藤を見下ろす。

「私をどうしようって言うの？史乃さんを何処にやったの？」

佐藤は毅然とした目で男を睨みつける。

男は佐藤の前に腰を下ろし、唇の端を微かに上げて言った。

「そんな怖い顔するなよ。せっかくの美人が台無しだぜ。」

佐藤は男の目を真っ直ぐ見据えた。

「はぐらかさないで。」

男は佐藤の顎を持ち上げると、

「もったいないねえ。かなりの美人なのにさ。刑事なんかにならないけりゃ、もっと長生きできただろうに。」

と苦笑した。

「手を離して。」

佐藤は強い口調で要求する。

男はくくつと小さく笑うと、手をほどいた。

「さあて。その強気はいつまで続くかな。例えあんたが気の強い優秀な刑事でも、大切な相棒が目の前で殺されりゃ、少しはおとなしくなるだろうよ。」

男の言葉に、佐藤の表情が固くなる。

「どういう、こと。」

佐藤の声が微妙に震えた。

「これから呼び出すのさ。あんたの大切な相棒である、高木っていう刑事をね。」

男は佐藤の前に腰を落ろすと、笑いを噛み殺したように肩を震わせで言う。

「・・・」

佐藤は無言で男を見上げる。

「美人の絶望した顔っていうのもいいもんだな。そんなに相棒が大切か？」

佐藤は男の質問には答えず、眉間に皺を寄せて喉の奥から声を絞りだした。

「どうして高木君なの。」

佐藤の静かな問いかけに、男はふんつと鼻で笑う。

「それはあんたが一番良く解ってる筈だぜ。俺が神崎麻緒を殺した犯人だからだよ。」

やっぱり、と佐藤は唇を噛んだ。

### 第3章 最悪の目覚め（後書き）

いよいよ第3章開始です。ここからは佐藤さんの目線で事件が展開していきます。前章までとは違う切り口で事件の真相に迫ります。お楽しみに。

### 第3章 立証できない殺人

やはりあれはただの事故ではなかった。すべてはこの男によって仕組まれた事故だったのだ。

佐藤と高木が感じた違和感は決して間違いではなかった。そしてそれをこの男はこの期に及んで悪びれもせず認めたのだ。

そのことが、佐藤の怒りをさらに掻き立てた。

「やっぱりあれはただの事故じゃなかったのね。」

佐藤は震える声で呟いた。怒気を含んだ瞳で男を睨みつける。

「ああそうさ。間抜けな警察は俺の思惑通り、あの仲田って奴の前方不注意による事故だと思ってくれたよ。」

あんたと高木って奴を除けばな。

男は苦虫を噛み潰したような歪んだ顔で佐藤を見る。

「俺の計画は完璧だった。お前らが首を突っ込んでくるまでは。せっかく事故で片付けられようとしていたのに、あんたらが妙なことに気付くから・・・」

男は佐藤を睨みつけた。

「まさか、麻緒が右耳のピアスを付けていなかったことぐらいで目をつけられるとは思ってもよらなかったよ。まあ、俺が犯人だっていう証拠も無いし、直接手を下したわけじゃない。あんたらが捜査から外れてくれたおかげで麻緒の死は運転手の過失による事故で片付けられる事になったのに。」

男の言葉を遮るように、佐藤が口を開く。

「あなたは油断したのね。私たちが捜査から外れたから。」

男は佐藤の言葉を引きつった顔で聞いている。

「あの事故が運転手の前方不注意によるものだったと結論づけられ、起訴されることになったと知ったあなたは、次の計画を実行に移すことにした。志乃さんを殺害するという計画を。」

もう何もかもお見通しなんだな、と男は溜息と一緒に言葉を吐き出

す。

「少し焦りすぎたよ。俺には時間がなかったからね。まさかあんたがあの家をやってくるなんて、考えもなかった。」

男は自嘲気味に笑う。

「あんたのおかげで少々計画を変更せざるを得なくなったよ。どこまでも疫病神が付いて回りやがる。」

男は佐藤を見下ろしてにやりと不敵な笑みを漏らす。

「麻緒を殺った時から俺はそいつに気に入られちゃったらしい。まあ、こっちはもう1人殺っちゃってるんだ。何人殺るのも大差はねえからな。」

男は佐藤の前に腰を下ろす。

「恨むんなら自分を恨むんだな。」

男はくつくつと可笑しそうに唇の端で笑う。

佐藤はそんな男を険しい眼で睨みつけた。

「本当に気の強いお嬢さんだ。まあ天下の警視庁捜査1課に在籍するくらいのタマだから気が強くて当然か。」

ふふんと男は鼻で笑って立ち上がる。

「今のうちにせいぜい強がつとくんだな。どうせもうすぐあんたは絶望のどん底で泣き喚く事になるんだから。」

男は澀んだ眼で佐藤を見つめる。その瞳の中に暗い不気味な影がちらりと覗いたような気がした。

佐藤はごくりと息を飲む。握った掌にじんわりと冷たい汗が滲む。

それでも佐藤は目を反らさずに男を睨み続ける。

「どうやって麻緒さんからピアスを奪ったの？」

神崎に対する怒りと先の読めない不安で渴き切った喉の奥からようやく言葉を捻り出す。

「簡単なことさ。髪がピアスに絡まってるって言ったんだ。まさか俺にピアスを奪われるなんて思ってたんだろうな。素直に触れさせてくれたよ。」

神崎はいささか得意げに答えた。

佐藤は大きく息を吐くと、なるほどねと呟く。

「つまりあなたは麻緒さんを実家まで送ってやるとか言って助手席に乗せ、事故のあったあの場所で車を停めた後、その方法で麻緒さんのピアスを奪った訳ね。」

佐藤はちらりと男の表情を覗き見る。男は佐藤の推理を満足げに聞いている。

「そしてそれを車の窓から投げ捨てる振りをした。彼女が慌ててそれを拾いに行くのを見越して。」

佐藤は淡々と推理を続けた。胸の中で膨れ上がる言いようもない不安を押し殺しながら。

「御明察。」

男は手を叩きながら、佐藤の正面に座り込む。

「さすがは敏腕女刑事。素晴らしい推理だ。これが取調室でなかったことに感謝するよ。」

男は小さく苦笑する。

「でも証拠はない。例えば証拠があったとしても、俺はただ麻緒のピアスを投げ捨てる振りをしたただけだ。あいつを殺したわけじゃない。殺人教唆でも共犯者でもない。そもそも殺人自体が立証不可能なんだ。」

男は自信に満ちた目で佐藤を見る。

みるみるうちに男の瞳の中に暗い影が広がっていく。それが悪意に満ちた冷たい憎悪と絶望であることに佐藤は気付く。

男の中で広がり続けるその影を、佐藤はただじっと見つめていた。

### 第3章 立証できない殺人（後書き）

この章に入ってからちよっぴり産みの苦しみ（？）らしきものを味わっています。犯人とのやり取りの緊張感や佐藤さんの心の動きがちゃんと描けてたらいいのですが。

### 第3章 独白1

「どうしてそんな不確かな方法で彼女を殺したの？」

佐藤の問いに、男の眉がぴくりと動く。先ほどまで自信に満ち溢れていた表情が、みるみる険しくなる。

「不確かな方法、だと？」

男は微かに唇を震わせ佐藤を睨みつける。

「ええそうよ。だって、その方法だと麻緒さんが確実に事故に遭って亡くなるとは考えられないわ。たとえ彼女がピアスを探すのに夢中になっていたとしても、走ってくる車に気付いて避ける可能性だってあるし、それ以前に彼女は探すのを諦めてしまいかもしれない。どちらにしても、確実に彼女を死に追いやる事はできないわ。あなた、本当は彼女を殺すつもりなんて無かったんじゃないの。」

佐藤は静かに、しかしきつぱりと言い放った。

男はじつと佐藤の瞳の奥を見据え、低い声で言葉を吐き出す。

「さすがの刑事さんでもその推理は間違ってるぜ。」

男は冷えた手で佐藤の顎を掴む。

ぞくりと背中に電気が走り、冷たい汗が伝い落ちる。

唇を噛み締め、小さく息をのむ。

「完全犯罪ってのはいくら綿密に計算しても現実には些細な偶然に左右されるものなんだ。綱渡りと一緒だよ。計算すればするほど、他愛のない微妙なズレが命取りになる。だから、逆に利用してやったのさ。俺はただ起こりうる事態をあらかじめ予測して、その偶然を引き出すための条件を整えてやったまでだ。」

男の手を振りほどくように佐藤は首を捻る。男の手がほどけたのを見計らって、再びぐいつと顔を上げ、吐き捨てる。

「あなたは必然的に作り出した偶然だって言いたいよね。」

男はふつと口角を引き上げて頷く。

「その通りだよ。やっぱりあんたは頭がいい。あの通りは幹線道路

への抜け道になっているから比較的車の往来が多い上に、人氣が少ないから徐行運転するヤツなんて滅多にいない。あの時間なら車はライトをつけて走行するが、あれだけ雨が降っていればライトの光は拡散して運転手からは歩行者が見えにくくなる。ましてや地味な色の服を着て傘も差さずに地面に這いつくばっていたんじゃ尚更だ。麻緒の実家はあの通りの路地のすぐ奥だ。車で送ってもらうんだから、出掛けに雨がぱらついていたらいいじゃ傘なんて持って出ないことも予測できた。いつもあいつを実家に送っていく時は、路地の前であいつを降ろしていたからあそこに車を停めたところで不審がられることもない。」

男は饒舌に語り続ける。瞳の中の影はどんどん広がり続け、とどまる気配すら見せない。

「それに、あのピアスはいいつが大切な男から貰ったものなんだぜ。探さないはずがないだろう。」

男は憎悪を剥き出しにして佐藤の目の前に突きつける。これでどうだと言わんばかりに佐藤を睨みつける。

圧倒的な威圧感に押し潰されそうになりながら、佐藤は呟く。

「大切な男って・・・」

佐藤の呟きに、男は乱暴に言葉を投げつける。

「ああそうさ、あいつは浮気してたんだよ。俺が会社のために命を削ってあくせく働いてる間に、あいつはどこかの誰かと浮気してたのさ。」

### 第3章 独白2

佐藤は小さく眉を顰めた。やはり神崎篤と麻緒の間には離婚話が持ち上がったのだと瞬時に悟る。

「俺の親は神崎物産のライバル会社を経営していてね。俺は親の反対を押し切って神崎家に婿入りしたんだ。おかげで社内には敵が多くてね。精神的な苦労は相当なものだったよ。ましてや社長になつてからは、一層風当たりが強くてね。それでも、会社のため、いや、神崎家のために必死で頑張ってきたんだ。それなのに、麻緒の奴は、

男はいったん言葉に詰まる。さつきまで真っ直ぐに見据えていた視線を床におとす。握りしめた拳は怒りで震えていた。男は大きく息を吐く。

「あいつは俺を裏切ったんだ。3ヶ月ほど前のあの日、見たこともないピアスを身に付けた麻緒が俺に言ったんだ。離婚しようって。忙しさにかまけてあいつに寂しい思いをさせてたのは認めるよ。だが、あいつはその間に他の男とできてたんだ。しかも、そいつから貰ったピアスをこれ見よがしに俺に見せつけて、離婚を迫ってきた。」

男の語気が次第に強くなる。抑えきれない怒りと憎しみが、男の全身から溢れ出てくるのを佐藤はただ切ない思いで見つめていた。

「愛していたのね。彼女のことを。」

佐藤は伏し目がちに囁いた。

「ああ。愛していたよ。」

男はそれまでとはうってかわって穏やかな口調で素直にそれを認めた。

一瞬の静寂が2人を包む。

男はそれを打ち消すように、再び憎悪に彩られた強い口調で吐き捨てる。

「だが、それもあいつから離婚を切り出される前までの話だ。あいつから真実を聞かされた瞬間、愛情は激しい憎悪に変わったよ。」  
佐藤には男が密かに寂しそうな笑みを浮かべたように見えた。瞳の裏側に、熱い何かが込み上げてくるようで、思わず瞼を閉じる。  
男の愛が、憎しみに変わった瞬間。それを思うといたたまれない気持ちになった。

「しかも、あいつは会社からも俺を追いつけようとした。冗談じゃない。麻緒を失った上に、今まで骨身を削って捧げてきた仕事まで失うなんて、俺には耐えられなかった。何度も話し合ったが、麻緒は一步も譲ろうとはしなかった。そして、俺たちが話し合いを始めて1ヶ月が経った頃、麻緒は俺に最後の通達を突きつけてきた。」  
男は淡々と語り続ける。

「そう、署名済みの離婚届を見た時だったよ。俺の中にどす黒い殺意が芽生えたのはね。」

### 第3章 波紋

男は苛立ちに満ちた眼で佐藤を睨みつける。

一方佐藤は冷ややかな眼で男を見上げた。

2人の視線がぶつかり合った瞬間、男は唇の端を引き攣らせながら吐き捨てた。

「正義の塊みたいなあんたには解らないだろうよ。俺の絶望と憎悪はな。」

佐藤は静かに目を閉じる。

「解らないこともないわ。私にも殺したいくらい人を憎んだ経験があるから。」

伏し目がちに佐藤はぼつりと呟く。

「認めたくないけど、憎しみの余り我を失ったこともあった。だからあなたの気持ち解らないわけじゃない。」

でも、と佐藤は顔を上げ、真っ直ぐに男を見据える。

「それを消し去る方法は、殺めることじゃない。戦うことよ。」

今でもふとした瞬間に佐藤の中にひよっこり顔を出す、あの息苦しいほどの憎悪。そして、絶望。その度に心が揺れ、どうしようもない不安に苛まれる。

でも、あの日。

気が狂いそうになるくらい激しい憎しみと悲しみの底から佐藤を救い出してくれた高木が教えてくれたのだ。逃げずに立ち向かわなければ何も解決しないことも。そして、立ち向かうための勇気も。

高木くんが傍に居てくれるから。耐え切れずに手を伸ばせばいつも彼が捕まえてくれるから。だから、私は戦い続けていられるんだ。今もまだ。

佐藤はいつも自分に向けられる愛しい恋人の笑顔を思い出す。

高木くんがいなければ、私はどうなっていたんだろう。考えるだけで怖くなる。

彼がいなければ、私も神崎みたいになつていたのかもしれない・・・

背中にささやかな悪寒が走り、佐藤の体を小さく震わせた。男の瞳の奥で広がり続ける悪意に引きずり込まれそうで、佐藤は思わず目を反らした。

「優等生、だな。」

男は冷めた眼で佐藤を見下ろす。

「もう一線を越えてしまった俺には何を言っても無駄だぜ、刑事さん。悠長にあんたの説教を聞いているほど時間は残ってないんだ。あんたが随分寝坊してくれたお陰でな。」

男は引き攣った笑みを貼り付けたままポケットから何かを取り出す。

「それは・・・」

見覚えのあるそれを男は佐藤の目の前に突き付ける。

「ちよつと失敬させてもらつたよ。あんたがぐつすり眠ってる間にも随分かかつてきてたぜ。もちろんあんたの相棒からもな。」

佐藤は血が滲むくらい強く唇を噛み、男を睨みつける。神崎の言わんとしていることは、先程までのやり取りで十分予想ができた。

「そんな顔するなよ。安心させてやるだけさ。あんたが無事だつて教えてやれば、あの高木って奴も喜ぶだろうよ。」

男はにやりと笑う。してやったりと言わんばかりのその表情に、佐藤の中に小さな黒い感情が芽生えた。

「まさかその後、自分が殺されることになるなんて、あいつは考えもしないだろうがな。」

佐藤の顔からみるみる血の気が引いていく。大きく見開かれた瞳が一瞬宙をさ迷った。喉の奥で引つ掛かった言葉がもどかしくて、佐藤は目を伏せる。今にも溢れそうなぐると渦巻く激情を、唇を噛んでぐつと堪えた。精一杯の理性で佐藤は何とか自分を保った。沸き上がる感情は、絶望か。それとも解き放たれるのを今か今かと待ち構えている憎悪なのか。呼吸をするのも苦しい程佐藤の胸は締め付けられた。

あの笑顔を失うくらいなら。彼を失うくらいなら。いつそ……そんな思いが一瞬頭の中を駆け抜ける。

佐藤は今にも襲いかからんとする、男に向けられた自らの憎悪を振り払うように強く瞳を閉じた。

高木くん。高木くん！

どろどろとした醜い感情に流されてしまわないように、佐藤は心の中で何度も高木の名前を呼んだ。

ふと、高木の陽だまりのように穏やかな笑顔が瞼の裏に蘇る。とたんに佐藤の心に穏やかな波紋が広がり、じわじわと広がっていく。静かだけれど確かなその波紋は、どんどん大きくなり、やがてすっぽりと佐藤を包み込んだ。

大丈夫。もうあんな歪んだ感情に流されたりはしない。

佐藤は意を決したように目を開けた。

### 第3章 波紋（後書き）

いよいよ第3章もクライマックスに近づいてきました。佐藤さんにとって高木くんがどれほど大切な存在なのかを揺れ動く彼女の心理の中で描いていけたらよいなと思っています。頑張りますのでよろしくお願いします。

### 第3章 守りたい人

「電話したいのならすればいいわ。でも、彼が此処に来るかどうかはわからないわよ。」

佐藤は神崎を真っ直ぐに見上げると、落ち着いた口調で言う。  
神崎はさも可笑しそうに肩を震わせて笑う。

「来るさ。来るに決まってるだろ。あの男があんたを見捨てるなんて有り得ないね。」

そいつはあんたが一番良く分かってるだろう、と男は自信に満ちた表情で答えた。

「ただあいつにご足労願うのはもう少し後になってからだ。」  
男の返事に佐藤は挑発的な笑みを浮かべる。

「あら、時間が無かったんじゃないやなかったの。」

男は冷めた笑いを返す。

「ふん。あいつだって嫌だろうよ。恋人の無事を喜ぶ間もなく殺されたんじゃないや。」

「随分紳士的なのね。」

佐藤の精一杯の皮肉を男はふふんと笑い飛ばす。

「そんなんじゃないさ。ただ、楽しみは後に取っておきたい性分なんだね。」

先程までのほとばしるような激情は影を潜め、落ち着いた口調で男は話す。

「どういうこと?」

佐藤はひそやかに眉をしかめる。

「そのほうが面白いからさ。あんたにも味わわせてやるんだよ。絶望ってやつをね。」

男は口元をねじ曲げて佐藤を見下ろす。さあどうだと言わんばかりの男をちらりと一瞥して、佐藤はぼつりと呟く。

「絶望、ね。」

そんなものは既に何度となく味わってきた。父が殉職した時も、松田が殉職した時も、そして、ついこの間、高木が犯人に撃たれたと聞かされた瞬間も。ついさっきだってこの男の言葉に一瞬絶望を見た。その度に、それこそ身を削る思いで立ち向かってきたのだ。その自信が佐藤を奮立たせる。もう迷いは無かった。

「もう覚悟はできてるわ。でも、ひとつだけ教えてあげる。あなたがどんなに汚い手を使っても、私は彼を守る。彼を死なせるようなことは絶対させないわ。」

佐藤は強い光を宿した瞳で男を見据えきっぱりと言い放つ。

「勇ましいな。その減らず口ももうすぐ叩けなくしてやるよ。」

男の頬が、微かに引き攣る。眉間に皺を寄せ苛立ちを隠さない男に、再び佐藤ははつきりと告げた。

「絶対彼を死なせたりしない。」

男は口元に明らかな苦笑を浮かべると、憐れむような目で佐藤を見る。

「それはどうかな。現実つてやつは残酷だからな。」

佐藤は自分を見下ろす男に強い目線を投げつけると、揺るぎない決意を口にした。

「彼を死なせるくらいなら、私が代わりに。」

何の躊躇も無く口にした佐藤を嘲るように男は笑う。

「とんだ美談だな。だが、そいつは無理な相談だ。殺る時はあんたも一緒だ。ちゃんとあの世へ送ってやるよ。あの男を殺った後でな。」

男の言葉に佐藤はふっと小さく笑む。

「そう。それなら本望だわ。愛する彼と一緒にあの世へ行けるのならね。」

それは本音だった。高木を失ったら、今度こそ自分は壊れてしまうかもしれないと佐藤は感じていた。今までの佐藤なら、自分を何とかこまかしながらやり過ごす事もできたかもしれない。しかし、今の佐藤にとって高木は彼女を形作るひとつの細胞のような存在であ

り、失くなるなんて考えられないのだ。

いつからだろう。高木くんが命を懸けてでも守りたいと思えるほど大切な存在になっていたなんて。

佐藤は小さく苦笑を漏らす。

いつも真っ直ぐに、誠実に佐藤を愛してくれる高木だから。だから佐藤も純粹に、一途に高木を愛してきたのだ。

だから。

彼を亡くすような事はさせないと誓ったのだ。自分の命に代えても守り抜くと決めたのだ。それでもその思いが叶わないのなら。その時は彼を一人にはしない。

佐藤は唇を引き締め、決意を固めた。

### 第3章 守りたい人（後書き）

前回といい、今回といい何か佐藤さんのキャラが微妙に違うような・  
・そこは大目に見ていただければ有り難いです。佐藤さんにとっ  
て高木くんは思わずキャラが変わってしまうくらい大切な人なんだ  
ということに納得してみたり。ダメですか？

### 第3章 電話と畏と・・・

「じゃああんたの望み通りにしてやるよ。」

男は勝ち誇ったような顔で佐藤を見下ろすと、右ポケットからおもむろに何かを取り出した。片手で器用に革のカバーを剥ぎ取ると、鈍く光るその尖端を佐藤の前に翳す。

「こいつは良く切れるって評判なんだ。」

男はにやりと笑って鋭く尖ったそれを佐藤の喉に押し当てる。

ひやりとした感触が佐藤の感覚を麻痺させる。

「分かってると思うが下手なことをしたら容赦しないぜ。恋人をこれ以上悲しませなくなったら大人しくしてるんだな。」

男は押し殺した声で念押しすると、佐藤の首元にそれを突き付けたまま慣れた手つきで携帯のボタンを押す。

スピーカーボタンが押されているのか、呼び出し音が鳴っているのが佐藤の耳にも聞こえてくる。数回鳴った後、ふつりと呼び出し音が途切れ、

「もしもし。」

電話越しに愛しい高木の声のはつきりと聞こえた。

男は無言で唇の端に笑みを浮かべる。

「もしもし、佐藤さん？」

高木は少し焦りの混じった声で佐藤を呼ぶ。そんな高木の声を男は高揚した顔で聞いていた。少しの沈黙の後、先程とはうって変わって全てを悟ったように低い落ち着いた声で高木が問う。

「神崎篤、か？」

男は乾いた笑いを漏らし、高木の問い掛けに答える事なく一方的に話し始める。

「高木さん。あんたの愛しい恋人があんたが来るのを今か今かと待ってるんでね。こうして電話してやったんだ。有り難く思いな。」  
傲慢な男の言い草に、高木は怒るところか落ち着いた口調で答える。

「そうですか。佐藤さんは無事なんですね。」

男は苦々しく唇を歪め、言葉を続ける。

「ああ無事だよ。今のところはな。ただ、この先あんたの出方次第じゃどうなるか分からないがな。」

電話の向こうに一瞬の緊張が走ったのが、佐藤にも分かった。それでも、高木は取り乱す事なくゆっくりと話す。

「それで、あなたの要求は何です？僕に電話してきたって事は、何か要求があるってことですね。」

親切心だけでこんな電話してきた訳じゃないでしょう、と高木は続ける。

「そうだな。この気の強いお嬢さんの相手をするのも大変だね。少々参ってるのさ。そこであんたにご足労願おうって訳だ。」

男は笑みを浮かべ、佐藤が声を出さぬよう首筋にナイフを押し付けながら高木を畏へと誘い込む。

「なるほど。確かにあなたでは佐藤さんの相手は務まりませんね。」

高木が可笑しそうに笑うと、男はみるみる頬を紅潮させ、苦虫を噛み潰したような表情になる。

そんな男の様子をどこかで見ていたかのように、高木は続ける。

「解りました。あなたの望み通り、そちらに伺いますよ。ちなみに僕はこの件に関して単独で動いていますから、本庁への報告は一切していません。だからあなたから電話があったことも報告するつもりはありません。それが佐藤さんの命を守る必要最低条件、でしょう？」

高木の言葉に男は少々落ち着きを取り戻し、ふて腐れたように呟く。

「随分物分かりがいいんだな。」

嫌味の混じった男の言葉に、高木はきっぱりと答える。

「ええ。あなたにとっては手に負えないお嬢さんでも、僕にとっては大切な人なんですね。傷つけたくないんですよ。僕の命に代えてもね。」

佐藤は高木がそんな決意を固めていた事に驚いた。と同時に高木の

気持ちを嬉しくも思った。

男はそんな高木の決意にふっと小さな溜め息を漏らし、苦笑する。

「随分な入れ込みようだな。そんなんじゃあ命がいくらあっても足りないぜ。」

高木も少々苦笑交じりに答える。

「そうかもしれませんがね。まあ、それでも一応刑事なんで、いつ命を落とすことになってもおかしくはないですから。ましてやそれが彼女を助けるためなら本望ですよ。覚悟は出来てますから。」

### 第3章 電話と罫とヒント

余計な事を話し過ぎましたねと高木は言う。

「本題に戻しましょうか。僕はこれからどこに行けばいいんでしょう。」

淡々とした口調で尋ねる。

「そんなに慌てる必要はないさ。今はまだその時じゃない。」

男も事務的な口調で答える。

「まあ、それでは納得できないだろうからヒントをくれてやるよ。

かくれんぼするなら光と影のどちらに隠れるかって事さ。今教えてやれるのはそこまでだ。タイムリミットまでまだ時間はある。気長に楽しもうぜ。」

男の言葉に高木は言葉を失くす。しばらく無言が続いた後、ようやく高木は喉の奥から搾り出すように呟いた。

「あなたにとってはゲームみたいなものなんですね。」

男は不敵な笑みを覗かせて吐き捨てる。

「だったらどうだって言うんだよ。」

高木の返事を期待するような男の言葉に、高木のやるせない表情が見えたような気がした。

「いえ。ただ、哀しいなと思っただけです。あなたに振り回されている僕たちも、憎悪に縛り付けられているあなたも。」

高木は小さく溜め息を吐き出す。

「楽しめと言われても楽しめませんね。ちつとも。ただ哀しいだけです。今のあなたには何を言っても無駄でしょうけど。」

人の命を弄んで愉しむあなたにはね、と高木は続ける。悲しいけれど強い憤りのこもった高木の声に、佐藤は胸が締め付けられるようだった。

重苦しい静寂が辺りを包む。男は何も言い返さない。さっきまで饒舌だった口を閉ざし、ただ一点を見つめている。その顔に表情はな

い。

佐藤は急に怖くなる。男が高木の言葉に何を感じ、何を考えているのかを掴みかねて恐ろしくなる。どくんどくと鼓動が大きく速くなり、背中にじわりと嫌な汗が浮かぶ。

「ところで。」

その静寂を破り高木は男に問い掛ける。

「佐藤さんは今そこにいるんですか？」

高木の問いに男ははっと我に返り、体をびくりと震わせる。

「ああ居るよ。」

男は短く答える。

「じゃあ、少しだけ彼女と話をさせてください。どうせこの電話はスピーカーホンにでもしてあるでしょうから、僕も彼女もあなたにとつて不都合な話は一切できませんしね。構わないでしょう。」

高木はやや強引に男に頼み込む。

「それに、佐藤さんの声を聞くまでは本当に彼女が無事かどうか判りませんからね。彼女が無事だと確認できなければ、僕はあなたの要求を呑む事はできませんから。」

高木のもつともな発言に、男は苦渋の表情を浮かべる。

「いいだろう。ただし、俺を欺くような事をしてみる。女の命はないぜ。」

男は吐き捨てるように答えると佐藤の肩に携帯を挟む。

「もしもし。」

恐る恐る答える佐藤の耳にはつきりと高木の声が飛び込んで来た。

「もしもし、佐藤さん？」

優しく佐藤を呼ぶ声に、思わず泣きそうになる。

「もう大丈夫ですよ。」

小さな子どもに言い含めるようにそつと、包み込むように高木は囁く。

うん、と小さく頷いて、

「ごめんね。」

と呟く。

ごめんね、高木くん。こんなことに巻き込んでごめんね。  
伝えようとしても胸が一杯で声にならない。

「いいんですよ、謝らなくても。あなたは刑事として自分のやるべきことをただけなんですから。」

高木は穏やかな口調で答える。

「高木くん……」

伝えたい事はたくさん有るのに、少しも言葉にならない。そんな自分がもどかしくて歯痒くて佐藤は唇を噛む。

「佐藤さん。あなたが無事でよかった。それだけで僕は救われるんですよ。」

高木の言葉に、佐藤はさっき胸の中で誓った決意を思い出す。

高木くんは私を守る。

佐藤は大きく息を吸い込むと、強い決意を吐き出した。

### 第3章 電話と罫とヒント（後書き）

いよいよ次回で第3章終了です。第2章まで高木くん目線で書いていたため、すっかり高木脳になってしまっていたせいか、佐藤さん目線で書くのはなかなか大変でしたが、何とかこの章のクライマックスを迎えられそうです。どうぞお楽しみに。

### 第3章 命を懸けて

「ねえ高木くん。ひとつだけ。最後のお願い、聞いてくれる?」

佐藤は一語一語ゆっくりと思いを込めて吐き出す。

「佐藤さん?」

佐藤の言葉に高木は怪訝そうに佐藤の名前を呼んだ。

「お願い・・・」

哀願する佐藤に困惑したように高木が言う。

「最後だなんて言わないで下さいよ。僕はあなたが望むなら、いくつだって、どんな願いだって叶えてあげますよ。」

高木の困ったような、それでいて優しい表情が目に見え、佐藤はますます泣きそうになる。

「お願い。私を助けようなんて思わないで。」

自分でもびっくりするほど低い声だった。

「佐藤さん・・・」

高木の声は憂いを含んだ悲しいものになる。

「挑発に乗る必要はないわ。来ちゃだめ。あなたは本庁に戻って目暮警部の指示を仰ぎなさい。」

佐藤は今にも泣きそうなのを悟られないようきっぱりと言う。

「佐藤さんの最後のお願いはよくわかりました。でも、僕はそれに応えることはできません。」

高木は静かに、しかしはつきりと言った。

「高木くん、お願い。来ないで。部下の命を危険にさらす訳にはいかないの。」

佐藤は自分の思いが揺らいでしまわないように、平静を装った。彼を巻き込みたくないという気持ちとその決意を後押しする。

しかし、高木は決して首を縦には振らなかった。

自分の中の正義に反することには絶対に納得しない男だということは、今までの経験から佐藤もよく分かっていた。それが高木の高木

らしいところだと思っていたし、そんな真つ直ぐなところが大好きなのだ。しかし、こうも頑なに反論されると、さすがの佐藤も折れそうになる。匙を投げかけて、再び決意を新たにする。

「いくら佐藤さんの命令でも嫌なものは嫌です。佐藤さん。僕はあなたがなんと言おうと必ずあなたを助けに行きます。」

僕の命に代えてもあなたを守ります。だから・・・」

高木の言葉を遮り、佐藤は落ち着いた声で言い聞かせるように告げる。

「ありがとう。でも駄目よ。あなたを危険な目に合わせる訳にはいかないの。上司としても。そして・・・」

佐藤は一瞬躊躇した。言おうかどうか、迷う。でも、もうこれ以上嫌だと繰り返す高木を説き伏せる言葉が思いつかない。崩れ落ちそうになる決意を何とか保ち、喉の奥から絞り出す。

「あなたの恋人としても。あなたを死なせるようなことはしたくないの。お願いだから、私の言う事を聞いて。」

「嫌です。」

高木は即答した。

佐藤の中に焦りにも似た感情が沸き上がる。

「お願いよ。高木くん。これ以上あなたの言葉を聞いたら、私の決意はきつと揺らいでしまうわ。だから。」

佐藤は泣き出しそうな声で告げる。しかし、高木の決意は固かった。「何度も言いますが、嫌なものは嫌です。佐藤さん。いえ、美和子さん。オレはあの日あなたと約束したんです。どんな時もあなたの傍に居るって。決して居なくならないって。」

高木ははつきりと答える。

「高木、くん？」

佐藤の声が揺れた。佐藤の脳裏にあの日の記憶が蘇る。

あの時と同じだ。東都タワーに爆弾が仕掛けられたあの日と。あの時、彼は今日と同じように、止める私を振り切って、自らの意思で犯人の罠の中へ飛び込んで行ったのだ。

あの時と違うのは、彼があの時以上に私にとってかけがえのない存在であること。失いたくない存在であること。目頭がかあつと熱くなり、目の前の殺風景な世界がゆらゆらと揺れる。

佐藤はぎゅつと瞳を閉じた。

高木は静かに、しかし熱っぽく言葉を紡ぐ。

「オレは何があつてもあなたの傍にいます。それを証明してみせます。あなたを一人ぼっちにさせたりしません。」

高木の言葉が佐藤の胸を締め付ける。

「高木くん。」

佐藤は泣きそうになるのを必死で堪えた。崩れかけた決意が、まだ抵抗を試みる。

「決してあなた一人で死なせたりはしません。」

高木は晴れ晴れとした声で言った。

「命を落とすことになるのなら・・・あなたと一緒に。」

「涉くん・・・」

高木の言葉に、佐藤の中に築かれた壁は脆くも崩壊する。まるで乾いた大地に降る雨のように、剥き出しになった佐藤の心に高木の言葉がじんわりと染み込み、ゆっくりとその強張りをほどこしていく。

「分かってください、美和子さん。あなたが自分の命を犠牲にしてもオレを守りたいと思ってくれるように、オレも、命を懸けてでもあなたを守りたいんです。」

「・・・渉、くん。」

佐藤はただ素直に高木の紡いでくれる言葉を聞いていた。こんな状況でも幸福を与えてくれる愛しい恋人の言葉を。自分を勇気づけてくれる優しい言葉を。

「あなたはオレにとってなくてはならない人なんです。世界で一番守りたい、大切な人なんです。」

高木は一気に言葉を吐き出して、そしてふつと笑う。

「心配しないでください。オレ、くじ運は悪いけど、悪運は強いん

ですよ。何度かそういう経験してますから。」

佐藤もつられて笑った。

「馬鹿ね・・・」

高木は明るい声で照れ臭そうに言う。

「待ってて下さい。アニメのヒーローみたいにかっこよくはいかないけど、必ずあなたを守って見せますから。」

馬鹿ね。どこかのヒーローなんかより、あなたの方がずっとずっとカッコイイのよ。だってあなたはこの世にたった一人の、私にとつて一番大切な人だから。

「ありがとう・・・待ってる。信じてるから。」

佐藤の頬を大粒の涙がひとつ滑り落ちた。希望の光を手放さないように、佐藤は幸福に満ちた微笑で電話の向こうの高木に告げた。

### 第3章 命を懸けて（後書き）

やっと第3章が終わりました。やっぱり高木くんが格好良すぎる気がする。その辺は、佐藤さんにとって高木くんは誰よりも格好良くて愛おしい存在だから、ということでご納得頂ければ幸いです。次章はまたまた高木くん目線に戻ります。お楽しみに。

## 第4章 混濁

電話を切った高木はまだ神崎邸にいた。佐藤の拳銃を発見した和室で一人溜め息をつく。

心臓は自分のものではないくらい激しく脈打っているのに、気持ちには妙に落ち着いていた。

1日ぶりに聞く佐藤の声で彼女の無事を確認できたことが、高木の強張った心を少しだけ緩めたのは事実だ。しかし。

奇妙な後味の悪さと少しの後悔が残ったのもまた事実だった。

それらの感情がどこから湧いてくるのかを高木は十分理解していた。神崎篤が自分たちに向けて放った悪意と、失意の中でも気丈に振る舞う佐藤をもっと安心させてやれるような言葉はなかったのかという疑問。それらが複雑に入り混じり、高木の頭の中をぐるぐると駆け回る。その何とも言えない気持ち悪さに思わず吐き気を覚える。それらを何とか飲み込んで、高木は代わりにまたしても溜め息を吐き出した。軽い目眩を引きずりながら、佐藤の溢れんばかりの想いが籠った最後の言葉を思い出す。

信じてるから。

夜空に輝く月の光のように穏やかで、それでいて凜とした佐藤の声が頭の中に響く。

その声が大丈夫よ、と戸惑う高木の背中をそっと押してくれる。

そうだ。ここで立ち止まっている訳にはいかないのだ。佐藤から託された想いを無駄にする訳にはいかない。高木は酸欠の頭を必死に回転させる。

「かくれんぼするなら光と影、どちらに隠れるか。」

高木は神崎が口にしたヒントを確認するかのように呟きながら胸ポケットから取り出した手帳に書き付ける。

「かくれんぼ。光と影。どちらに隠れるか。」

もう一度繰り返し、首を捻る。常識的に考えるならばその答えは影

だ。しかし、あの神崎がそんな簡単なヒントを出すだろうか？

高木は神崎の解けるものなら解いてみると言わんばかりの自信に満ち溢れた声を思い出す。あれだけの自信を持って言うのだから、そう簡単に解けるものではないのだろう。いや、そう見せかけて案外簡単に解けるのかもしれない。考えれば考えるほど疑心暗鬼になっていく。

例えば神崎のヒントの答えが影だったとして、それが佐藤の監禁場所とどう結び付くのか。どちらにしても一筋縄ではいかない事は確かだった。

高木は小さく頭を振って肩を落とす。昨日から口について出るのは溜め息ばかりだ。考え込んでいても気が滅入るばかりで何も閃かない。それに、人並みに常識を持ち合わせている高木には、もうひとつ気掛かりな事があった。いくら非常事態とはいえ、他人の家に家主や親族の了解もなく勝手に上がり込んでいるのだ。いや、現状では家主である史乃も拉致された可能性が高いのだが、まだその確証は無い。高木ははたとこのまま此処に居るのはまずいよなあなどと考える。考え出すと、ますます決まりが悪くなる。

そうなるとしてもたつてもいられず、とりあえず神崎邸を後にしよう。高木は胸ポケットに手帳を突っ込み、先程見つけた佐藤の拳銃を大切に内ポケットにしまう。

和室の入口で忘れ物はないかと振り返り、高木はふとあるものに目を奪われた。

それは、仏壇だった。高木の実家の和室に設えられていた黒の漆塗りに金箔を貼ったオーソドックスなものとは違い、家具調とでもいうのか、シンプルだが上品な作りの仏壇だった。そのせいで、今までそれが仏壇だとは気付かなかったのだが、良く見ればそこにはちゃんと仏様が鎮座し、ふたつの位牌が並べられている。ひとつは麻緒のもので、もうひとつは史乃の夫のものである。

その位牌を見つめながら、高木は愛する家族を見送り、この家に一人で暮らす史乃の心情を思わずにはいられなかった。

長年連れ添ってきた人生の伴侶を亡くし、そのうえ大切に育ててきたただ一人の娘までも失ったのだ。歳の順からいけば確実に自分より後に逝くであろう娘をあのような形で先に亡くした史乃は、身を裂かれんばかりの絶望を味わったに違いない。自分には経験の無い事だが、その辛さがいかほどであるかは何となく想像がつく。いつも高木達を朗らかな笑顔で迎えてくれた史乃が、その微笑みの裏に隠していた悲哀を思うと胸が苦しくなる。

高木はふと身を翻すと、無意識の内にその仏壇の前に立った。そして、神聖な気持ちで手を合わせ、若くして天に昇った魂の冥福を一心に祈った。

## 第4章 混濁（後書き）

第4章スタートです。光と影のヒントの解読に高木くんが挑みます。彼はヒントを解読し、佐藤さんを助け出す事ができるのでしょうか？なかなか時間がなくて更新が追いつくかどうかあやしいですが、頑張ってくださいますのでよろしくお願いします。

## 第4章 不器用な男

麻緒の安らかな冥福を祈った後で、高木はふと考える。

あのような亡くなり方をして、麻緒は果たして何の未練もなく旅立っていったのだろうか。もしも死後の世界があったとして、彼女は無事に天国まで辿り着いたのだろうか。何となくまだ麻緒の魂がさ迷っているような気がして、高木はいたたまれない気持ちになる。もう一度手を合わせて祈りを捧げ、高木は麻緒の物言わぬ位牌に静かに語りかける。

「麻緒さん。僕達は必ずあなたの死の真相を明らかにします。それが誰かを、いえ、あなたを傷付ける事になったとしても。」

すみません、と呟いて、高木は視線を落とす。

佐藤があの日口にしたように、もっと早い段階で高木達がこの事故の真相究明を断念していたら、ここまで傷は広がらずに済んだのかもしれない。

しかし、それだけではどうしても出来なかった。自分達が刑事という職務に忠実であつたからなのか。それとも己の中にある正義に突き動かされたからなのか。どちらにしても今はただ、閉ざされた扉の向こうにある真実を明らかにする事で救われる何かがあると信じて突き進む事しかできない。それはとても苦しく、勇気のいる事だけれど。

高木は強く拳を握り、唇を噛む。まだ少し躊躇う心に頑なな決意を刻み込む。

高木は信じていた。真実が明らかにされず闇に葬り去られてしまうこと、歪められてしまう事の方がよっぽど辛く、苦しい事なのだと。どんなに心が痛くても真実から目を逸らしてはならないのだと。たとえ不器用だと笑われても高木にはそうやって進んで行く事しかできない。そうすることではか前に進んで行けない。

ゆっくりと視線を上げ、再び麻緒の位牌を見つめる。

それは静かに吐き出された高木の思いを受け止め、ただそこに佇んでいた。

高木は微かに苦笑する。そんな生き方しか出来ない自分が何となく可笑しくて、愛おしくなる。

そんな風に思えるようになったのも、すべて佐藤が傍に居てくれるからなのだ。情けなくて、頼りない自分。不器用で格好悪い自分。そんな自分が嫌で嫌で仕方なかったのに。佐藤はそんな高木をまるごと全部受け入れて、静かに微笑んで、それがあなたのいいところよと言ってくれる。時には怒ったり呆れたりしながら、それでもいつも傍に居て、その真っ直ぐな眼差しで高木を導いてくれる。そんな佐藤の想いに応えたくて、高木はただ走り続けているのだ。どんなに格好悪くても、どんなに情けなくても、佐藤は必ず待っていてくれる。高木が一番好きな包み込むような笑顔でいつも高木を受け入れてくれるのだ。だからこそその笑顔を守りたいと心から思う。そのためなら自分の命なんてどうなってもいいと思えるくらいに。それは正義なんかじゃない。佐藤が大切だから。佐藤を愛しているから。ただそれだけのことなのだ。

高木はそこにある位牌に向かい、ふっと笑みを浮かべる。

「すみません、麻緒さん。僕は守らなくちゃいけないんですよ。この世でたった一人の大切な人を。」

その笑みは悲しいものだった。高木はそっと目を伏せ、それに向かって静かに、深々と頭を下げた。

その時、高木の視界の端にある物が映る。果物やお菓子に埋もれるようにひっそりと仏前に供えられたそれは、高木の目を惹きつけた。淡いラベンダー色のカバーがかけられたそれを手に取ると、必然的にぱらぱらと捲りかけ、高木ははたと手を止める。このまま表紙を捲ってしまえば何かが解るのかもしれない。しかし、その先に知らなくてもいい真実が待ち受けているようで、高木の心は揺れた。それでも知りたいという欲求と、常識的な良心。その狭間で高木は揺れ動く。少しの葛藤の後、高木はそれを元あった場所にそっとおさ

める。史乃の許可なく勝手にそれを捲ってしまうのは良心が咎め  
し、これを読むのは神崎の口から事の真相を聞いてからでも良いよ  
うに思えた。

高木は再び麻緒の位牌に向かって頭を下げると、くるりと踵を返し  
神崎邸を後にした。

## 第4章 刑事の職務

神崎邸を出たのはいいものの、これからどこへ向かうかと考えながら高木は車を走らせる。

今更本庁には戻れないし、戻るつもりもない。何処か静かで落ち着いて考えられる場所。頭の中に叩き込まれた地図を引っ張り出しながら考えあぐねていたその時、再びポケットの中の携帯が着信を告げた。慌てて車を端に寄せて停め、ディスプレイを確認する。そこには見知った上司の名前。高木は大きくひとつ深呼吸すると、通話ボタンを押す。

「高木くん、ワシだ。目暮だ。」

聞き慣れた上司の声に、高木の背筋がぴんと延びる。

「警部。すみません。今まで何の連絡もせずに。」

高木は胸の内を気どられまいと短かく答えた。

「いや、構わんよ。」

怒られるかと思っただが、以外にも目暮は穏やかな口調で続ける。

「佐藤君の事は君が一番心配だろうからな。ところでどうだ。何か分かったかね？」

目暮は高木や佐藤に問いただしたりはしないが、恐らく2人の関係に気付いているのだろう。高木が佐藤の身を案じ、その行方を独りで調べ回っていることを咎めるでもなく、目暮はさも当たり前のことのように聞いてくる。その言葉の端々に目暮の心遣いを感じて高木は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。それでも平静を装って少し低い声で答える。

「いえ、まだ何も。」

電話の向こうで深い溜め息が漏れる。

「そうか。こちらも全くもって進展無しだ。佐藤君からはもちろん、彼女を拉致したであろう犯人からも何の音沙汰もない。」

目暮は齒痒そうに唸った。

「そうですか。」

高木は小さな声で呟く。

尊敬して止まない上司を欺いていることに、胸の辺りがずきずきと音をたてて痛む。

「もし佐藤君が拉致されたのなら彼女に対する怨恨によるものかもしれないからな。我々は佐藤君が過去に検挙した犯人で彼女を逆恨みしている奴はいないか探しているところだよ。」

目暮は淡々と続ける。しかし、いくら警視庁が全力を挙げて過去の被疑者を洗ってみたところで佐藤を拉致した犯人が上がってくることは無い。何故ならその犯人は交通事故で死亡した被害者の遺族なのだから。

高木はただ無言で目暮の話を聞いていた。

「ところで高木君。」

不意に名前を呼ばれ、高木ははつと我に帰る。高木の中に突然大きな不安が沸き起こった。本庁に戻れと言われるのか。あるいは私情を挟まないようこの件から外されるのか。基本的に刑事は単独で捜査することは滅多に無い。それは身の危険を回避する為であり、捜査の信頼性を高める為でもある。しかし、今は佐藤の命が懸かっているのだ。佐藤の居場所を示す鍵を握っているのは他ならぬ高木なのだ。高木しか佐藤を救う事は出来ないのだ。しかし、恐らくそれは単独捜査を続行する正当な理由にはならないだろう。高木の個人的感情からくる穿った理由だと言われてしまえばそれまでだ。高木は警視庁という組織に属する一警察官である。もし目暮の口から撤退命令が下されたとしたら、高木は立場上それに従わざるを得ない。それに従えないのなら、刑事という立場を捨てるしかない。高木は静かに決意を固めた。迷いなど微塵もなかった。

高木は固唾を飲んで目暮の次の言葉を待つ。

「すまんが君は引き続きこの件の捜査に当たってくれ。生憎みんな他の事件で手一杯だな。」

予想外の目暮の言葉に、すぐにはその意味が理解出来ず、高木は呆

然とした。

「おい、高木！聞いているのか？」

目暮の怒鳴り声でその意味を理解する。高木は敬礼でもせんばかりの勢いで慌てて返事を返す。

「はいっ。任せて下さい。」

目暮は電話の向こうで苦笑する。

「気合いを入れるのはいいが、無理はするなよ。ワシも可愛い部下を2人も失いたくはないからな。」

皮肉の混じった言い草だが、そこには目暮の部下に対する思いやりが溢れていた。高木は少し苦笑しながら答える。

「大丈夫です、警部。僕が必ず佐藤さんを見つけだします。」

力強く答えた高木の言葉に目暮は静かに短く答える。

「頼んだぞ。」

目暮に託された思いを胸にしっかりと刻み付け、高木はその言葉を噛み締めた。

#### 第4章 刑事の職務（後書き）

しばらく更新ストップしてまして申し訳ありません。できるだけ早く更新できるよう頑張りますので、おつきあいの程よろしくお願いいたします。

## 第4章 解読開始

米花中央図書館の駐車場で、一人の男が車を停めて何やらじっと考え込んでいた。

結局、考えることに集中できそうな適当な場所が他には思いつかず、高木はこうして車の中で先ほど神崎のヒントを書き付けた手帳とにらめっこすることにしたのだ。米花中央図書館の駐車場にしたのは、何かあった時すぐに調べ物ができるという利便性と、車の往来が少ない静かな通りに面した場所に位置しており神崎邸からも比較的近い所にあるという立地上の理由からだった。

高木はじつと己の手帳を睨みつける。

ヒントというくらいだから、言葉通り単純に考えてみたところで探し求めている答えには辿り着かないであろうことは、高木にも容易に想像できた。やはりここから何かを捻り出せということか。高木は顎に手をやり考える。

一般的にこの手の暗号めいた物は、その文章の中にあるキーワードを何かに変換する事で答えを導き出せる場合が多い。今まで血生臭い数々の事件を捜査してきた高木の経験上、神崎から与えられたヒントもそれらと同種の物ではないかと思われた。神崎のヒントの中に存在するキーワードは、恐らく光と影。これを何かに変換しろということなのだろう。

一体何に？

高木は首を捻る。そして、ふと思いつく。

そうだ。よく推理ものの小説やドラマでキーワードをローマ字や数字に変換して、組み合わせたり並べ替えたりすることで別の言葉を作り出すようなものがあるじゃないか。これもそういった類のものなのかもしれない。

高木は早速解読を試みる。

先ほど思いついた方法で光と影をローマ字に変換し、手帳に書き付

ける。高木はその『HIKARITOKAGE』という12の文字をできうる限り並べ替えてみる。しかし、どうあがいてもいつこうにそれらしい言葉には辿り着かない。うーん、と小首を傾げて高木は唸る。

それならば、とこのローマ字をアルファベットの並び順に数字に変換してみる。

「Hは8番目で、Iは9番目、と。」

指折り数えながら、一文字ずつ数字に変換する。

『8・9・11・1・18・9・20・15・11・1・7・5』

手帳には数字がずらりと列挙された。

「これをひらがなに変換すると・・・」

またしても指折り数えて変換する。

『くけさあつけとそさあきお』

これを並べ替えて、と頭を捻って格闘してみるものの明らかに意味のある言葉になりそうな気配はない。もしかしたら、数字2文字を組み合わせてひらがなに変換するのだろうか？それならこれらの数字を2つずつ区切って、それぞれの組の先の数字がひらがなの行を、後の数字が段を表していることになる。だとすれば、ひらがなは、『あ』から『ん』まで11の行があり、5の段からなっている訳だから、8行目にあたる文字はあっても9段目にあたる文字が存在しない。

これも違うか。

それならば、と高木は光と影をひらがなにして数字に直してみる。

『37・6・42・16・6・9』

手帳に書き込んだ数字を今度はアルファベットに変換しようとして高木ははたと気付く。アルファベットは全部で26文字。当然37番目や42番目にあたる文字などない。これも違うか。

高木はがつくりと肩を落とし、落胆の溜め息を盛大に吐き出した。

#### 第4章 解読開始（後書き）

いよいよ高木君が神崎の出したヒントの解読に挑みます。高木君は神崎が出したヒントを読み解き、佐藤さんの監禁場所を特定することができのでしょうか？一筋縄ではいかないこのヒントを読み解く鍵は、変換・置換・連想です。ちょっとこじつけも入っていますが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

## 第4章 謎だらけの暗号

そつだ。もつと単純に英語に変換してみたらどうだろう。

高木は手帳のページを捲り、真つ白なページにそれを書き込んでみる。光と影は直訳すると、『Light and shadow』だ。これを並べ替えると・・・

むうつと小さく口を尖らせ唸ってはみるものの、ちつとも正解にはたどり着かない。変換する、という発想はあっているのだろうが、それを並べ替えるとなると、どの方法も全く上手くいかないのだ。

高木は頭を抱えた。

並べ替えるのが無理なら、置き換えるのはどうだ？

ふと思い付いて、手帳の文字を睨みつける。しかしそれをどう置き換えたら良いのかまったく解らない。もしかしたら、文字で考えるのではないのかもしれない。だとしたら一体何に着目すればいいんだ。

何度もその英単語を繰り返して呟きながら、高木はじつと考える。そして、はつと閃いて顔を上げる。

そつだ、音だ。音、つまり英単語の発音に着目するんだ。

頭の中にもやもやと立ち込めていた霧が晴れ、ぱあっと一筋の光が差した。確信は無かったが、少し正解に近づいたような気がした。

この英単語の読みを同じ発音を持つ日本語の単語に置き換えてみたらどうだ。

高木は再び手帳に書き込んだ文字を見つめる。

Lightの発音と同じ音を持つ日本語の単語はすぐに思いつかないが、shadowの方なら容易に思い付く。シャドウ。これと同じ読みをする日本語。車道だ。

意味のある単語がひとつ見つかったことで、高木は嬉しくなった。しかし。

Lightがどうにも置き換えられない。

この方法も間違いだったか。

諦めかけた高木の脳裏にあることが思い浮かぶ。

そうだ。Lightの読みはライト。同じライトという日本語読みで表現される英単語があるじゃないか。そう、Rightつまり右だ。

ということとは、『光と影』は『右と車道』と変換できる。

つまり、佐藤の監禁場所が車道の右側にあるという事を示しているのではないか。

そこまで考え至ったところで、高木は再び表情を曇らせる。

車道の右側と言ってもその肝心の車道がどこかわからない。しかも、車道の右側というのは、その道走る車の向きによって変わってしまう。例えば、北から南に向けて車が走っている時には西が右側になり、南から北に向かって走っている時には東が右側になる。これらの疑問を解き明かす鍵が、このヒントのどこかにまだ隠されているというのだろうか。このままでは監禁場所を特定するところかその手がかりにもならない。

高木はもう一度神崎の言葉を思い出す。

「かくれんぼするなら光と影のどちらに隠れるかって事だよ。」  
神崎は確かそう言ったはずだ。思い出して高木は先ほど出した自分の答えが間違っていることを悟る。神崎は光と影のどちらが正解かを答えろと言ったはずだ。つまり、どちらかひとつを選べということだ。

それならば、さっき自分が導き出した『車道の右側』という答えはそのヒントに矛盾してしまう。例え『光と影』の示す答えが『右と車道』であっていたとしても、正解を選べという神崎のヒントを考慮すれば、その答え『影』が指すのは『車道』ということになる。

車道の右側というだけでも手がかりになり得ないのに、ヒントの答えが車道では、全くもって話にならない。

高木は悔しそうに奥歯を噛み締めると、ぎゅっと瞳を閉じた。

#### 第4章 謎だらけの暗号（後書き）

次回はとうとう彼らが登場します。お楽しみに。

## 第4章 解き明かされた暗号??

きつく閉じた高木の瞼の裏には暗闇が広がる。

そして、高木はふと考えた。

なぜ神崎は光と闇ではなく、光と影と言ったのだろうか。

高木には光に対する言葉として闇という言葉を使ったとしても何の支障もないように思える。しかし、神崎にとっては何か大きな意味があったのではないだろうか。闇と影の違い。それこそが、このヒントを解読するための重要な手がかりになるのではないか。その閃きに高木は軽い興奮を覚える。闇と影の違い。それは一体何だ。高木は高揚する自分を抑えつつ、考えを巡らせる。そして、それぞれの言葉の意味に思い至った時、頭の中で閃光が走った。

闇は全く光が無い状態のことだが、影は光がないと存在し得ない。影は光が差すと光源とは反対側にできる。そして、光と影は相対する言葉でもある。

そこまで考えて、高木はこのヒントの答えを一気に手繰り寄せる。

そう、神崎が光に対して影という言葉を使ったのは、影の示す言葉が光の示す言葉の対義語であるということを示唆するため。つまり、影は光が示す言葉『Right』とは逆の言葉を指しているのだ。

だとすると、『影』イコール『Left』すなわち『左』ということになる。そして、次のヒント。どちらに隠れるか、の答えは影だから、イコール左。

ここまで思い至って。そして高木はあることに気付く。そう、神崎のヒントにはもうひとつのキーワードがあったのだ。

神崎は、かくれんぼするなら光と影どちらに隠れるか、と高木に問うた。

今まで『光と影』というキーワードにはかり着目していたが、実はキーワードは2つあったのだ。最初に神崎のヒントを手帳に書き写した時、確かにそのキーワードを口にしていたはずなのに、今まで

全く気付いていなかった。そんな自分に苦笑しながら高木は最後の壁を崩しにかかる。

神崎のヒントの中には『光と影』と同じように英訳すると真ん中が『and』で繋がれている言葉がもうひとつあるのだ。

そう、それは『かくれんぼ』

このかくれんぼこそ、このヒントの謎を解くもうひとつのキーワードだったのだ。これを『光と影』と同じように英訳すると、『hide and seek』ここから、先ほどの答え、左にある単語を日本語の音に置き換えてみる。『hide』の読みはハイド、つまり、『杯戸』

そうだ、杯戸町だ。佐藤さんは杯戸町のどこかに監禁されているんだ。

高木は顔を上げ、表情を引き締める。

どこだ？杯戸町のどこに監禁されているというんだ。

ヒントの答えにたどり着きはしたが、あまりにも漠然としすぎて監禁場所を特定することは困難だ。

他に何か手掛かりは無いのか？

高木は再び頭を抱え込んだ。

コンコン。

小さくはあるが、確かに耳の傍で何かがぶつかる音がした。はっと顔を上げて音のした方に首を捻り、高木はあつ、と小さく声を上げる。窓越しに見知った顔が並んでこちらを覗き込んでいるのを見て、先ほどの音の正体が窓をノックする音だったのだと気付く。慌てて手帳を閉じ、車を降りると、高木は腰をかがめて無邪気な笑顔にさやかな微笑を返した。

#### 第4章 解き明かされた暗号?? (後書き)

高木君のヒントの解読、いかがでしたか? 多少こじつけもあります  
が、楽しんでいただけたら嬉しいです。さて次回から本格的に(?)  
彼らが登場します。少し違った角度からストーリーを展開してみる  
つもりです。実はまだこのヒントは完全に解読されていません。そ  
の解読に彼らが大きな役割を果たすことになると思います。よろし  
ければお付き合い下さい。

## 第4章 束の間の安息

「やあ。みんな揃ってどうしたんだい？こんなところで。」

高木の問いに大きな瞳を輝かせて一人の少女が答える。

「今日はみなで図書館に地図を借りに来たんだよ。」

「学校の宿題で、地図を作ることになったんですよ。米花町の。」  
利発そうな顔をした少年も楽しそうに答える。

「みんなの前で発表しなきゃなんねえから、どうせならみんながピツクリするくらいすげーの作ろうぜってことになってさあ。」

もう一人の少年が大きな体を弾ませて元気良く続ける。

「それで地図を借りに来たのかい？」

先ほどのまでの険しい表情を崩し、高木も穏やかな笑みで聞く。

「うん。学校の図書室にある地図は種類が少ないけど、ここならいっぱいあるよってコナン君が。」

先ほどの少女が嬉しそうに振り返り、ねっ、と少し後ろで様子を伺っていた少年に言う。

「お、おう。」

眼鏡の奥に大人顔負けの観察眼を押し隠した少年は、少し戸惑ったように相槌を打つ。

「それにここなら地図以外にもいろんな資料が揃ってるしね。」

大人びた表情の少女がクールな目で少年を一瞥し、続けて高木の顔を見上げる。

「そうだね、と高木は頷く。」

「だから今日は哀ちゃんも一緒なんだね。」

高木は少女に笑いかける。

「あら、何だかいつも私だけ仲間外れみたいな言い方ね。」

哀はちらりと横目で高木を見やる。

「い、いや、そういう意味じゃないよ。」

高木は目の前で慌てて両手を振り否定する。普段あまり団体行動を

好まない性格の哀の姿が見えたものだから、ついそう言ってしまっただけでもちろん深い意味は無い。しかし、自分の不用意な発言が哀を傷つけてしまったと思い、高木は酷く動揺する。

そんな高木にくすりと笑みを漏らすと、

「分かってるわよ。あなたがそういう嫌味を言う人じゃないって事はね。」

ちよつとからかってみただけよ、と哀は可笑しそうに答える。

「大人をからかうもんじゃねーよ、灰原。高木刑事、困ってるだろ。」

もつとも頭の切れるコナンが呆れ顔で哀をたしなめる。

「あら、いいじゃない。彼、人がいいからつかいかなくなるのよ。誰かさんと違ってね。」

哀はしれつとした顔でコナンの言葉を受け流す。

「誰かって、俺か？」

一方のコナンは少しむっとした顔で聞き返す。

「まあ誰だっていいじゃない。あなたがそう思うのならそうなのかもね。」

哀はふいつとコナンから視線を外すと意味深な顔で笑った。

「まあまあ、コナン君も哀ちゃんも、ここは穏便に、ね。」

高木は苦笑を浮かべながら、小学1年生にしては妙に大人びた2人の会話に割って入る。普通の小学1年生に穏便なんて言葉を使っても意味が分からないだろうが、この2人にはそれで十分通じてしまう。彼らがいつも大人顔負けの言い方をするものだから、高木もつい子どもなのだという事を忘れて接してしまうことがある。現に今だってそうだ。しかし、彼らはちゃんと高木の言葉を理解し、口をつぐむ。自分より随分年下の筈なのに、下手をすると自分なんかよりよっぽど大人なんじゃないかとさえ思ってしまうって高木はただ苦笑するしかなかった。

## 第4章 小さな追求者

コナンと哀の冷戦が終わるのを見届けると、

「ねえ、高木刑事はここで何してるの？」

くりくりと瞳を動かしながら、歩美が無邪気な顔で尋ねる。

「事件の捜査ですよ。」

光彦が好奇心いっぱい顔で高木を見上げる。

「何の事件だ？困ってんならオレたち少年探偵団が力を貸してやってもいいぜ？」

得意げな顔で元太が言う。

事件の話を聞きたくてうずうずしている小さな3人の探偵を前に高木はいつもの愛想笑いを浮かべて曖昧な返事をする。

「いや、事件というか、その……」

言いよどむ高木にいらついた元太がぐいつと身を乗り出し、掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。

「何だよ。はつきり言えよ。」

元太の勢いに少々押されながらも、高木は何とか踏みとどまった。そして、きつぱりと告げる。

「今僕が調べている事件のことは君たちにも教えられないんだ。ごめんよ。」

高木の答えを聞いて、3人は揃いも揃ってぶうつと頬を膨らませる。「どうして教えられないの？」

「そうですよ。いつもの高木刑事ならいろいろ教えてくれるじゃないですか。」

「そーだよ。ケチケチするなよ。」

3人は口々に高木を問い詰める。

それでも高木は強張った笑みを浮かべながら、「ごめんよ、と繰り返す。」

「なーんだ、つまんない。高木刑事なら教えてくれると思ったのに」

な。」

歩美が少し悲しそうな口調で呟く。

「あーあ。がっかりだぜ。」

元太はおもしろくないと言わんばかりの顔で溜め息をつく。

「千葉刑事も何も教えてくれませんでしたし。」

光彦も大きな溜め息を吐きながら肩を落とす。

「君たち、千葉にも会ったのかい？」

今度は高木が不思議そうな顔で3人に問う。

「そうだよ。千葉だけじゃなくて、白鳥や目暮警部にも会ったぜ。」

「ここに来る前に偶然会ったの。」

「昨日からやたらと警察の人がパトロールしてるから、何があったのか聞いたんですけど。」

「何もない、教えられないの一点張りでさあ。話になんねーんだよ。」

「千葉刑事も白鳥警部も目暮警部もみんなすっごい暗い顔してたよね。」

「あれは絶対何かあったんですよ。」

3人が興奮した様子で交互に高木の質問に答える。

「おい、おめーら。余計なおしゃべりばかりしてつと置いてつちまうぞ。」

後ろでその様子を黙って見つめていたコナンが、いつまでもおしゃべりの尽きない3人に呆れたような目を向け促す。

「高木刑事だってあなたたちのおしゃべりに付き合ってる程暇じゃないのよ。」

哀もくるりと踵を返すと振り返ることも無く歩き出す。

「コナン君、哀ちゃん、待ってよう。」

「あ、ちよつと、待ってくださいよー。」

「あつ、おい、何だよおめーら。ちよつと待てよ。」

さつきまで高木との話しに夢中になっていた3人も慌てて2人の後を追う。

「バイバーイ、高木刑事。」

歩美がくると振り返り、愛らしい笑顔で手を振った。

高木は微笑ましい気持ちで手を振り返し、小さくなっていく5人を見送った。

## 第4章 コナンと哀の推理

「わあすごい。いろんな種類の地図があるよ。」

図書館の一角で少年探偵団の5人は地図を探していた。誰よりも早くそのコーナーを見つけた歩美が嬉しそうにそちらを指差す。

「わあ、すっげー。何だこれ？」

その内の1冊を手に取りぱらぱら擦っていた元太が不思議そうに首を傾げる。その横から光彦が首を伸ばして覗き込み、ああこれはですなえ、と解説を始める。

「これは地図記号といって、いろんな建物を記号にして表しているんですよ。例えば、この×を で囲んでいるのが警察署。こっこの+をホームベースで囲んでいるのが病院です。」

博識な光彦の解説に聞き入る歩美と元太を遠巻きに見つめていたコナンの背後から、哀がちよつと、と押し殺した声で呼びかける。

「何だ？灰原。」

コナンも必然的にひそひそと囁き声で聞き返す。

「あなたらしくないんじゃない？いつもなら誰よりも事件の事、聞きたがるくせに。」

哀は疑りの目でコナンを見る。

「あなた、何かに気付いてるんじゃないの？」

答えを求められ、コナンは浅い溜め息をつく。

「これはあくまでもオレの推理だけど。」

と前置きをしてコナンは呟く。

「高木刑事が捜査してる事件は恐らく誘拐事件じゃないかと思う。」  
しかも、とコナンは俯きがちに答える。

「誘拐されたのは、多分佐藤刑事だ。」

「どうしてそんなことが言えるの？」

哀が眉をしかめ、怪訝な顔で問う。

「さっき光彦が言ってたろ。昨日から警察がやたらと巡回してるっ

て。」

コナンは鋭い視線を床に落とすと、噛み締めるように自分の推理を話す。

「あれは単なる犯罪抑止のための巡回じゃない。捜査1課の刑事が一緒に動いてるんだ。何か事件があったと考える方が妥当だろう。しかも、あれだけの数の刑事が動いているところを見ると、かなりの凶悪事件であることは容易に推測できる。でも、それほど大きな事件なら新聞やテレビで大々的に報じられていてもいいはずだろ？　ところがここ数日それらしい報道はなかった。どうしてだと思う？」

コナンは哀に問いかける。

「そうね。恐らくその事件が報道されるとまずいからじゃないかしら。」

哀の言葉にコナンは頷く。

「報道されるとまずい事件として最も代表的なものは誘拐だ。犯人を刺激して、人質に危害を加えられる可能性が高いからな。」

コナンの言葉になるほどね、と小さく哀が頷く。

「つまり、警察が追っている事件は誘拐事件の可能性が高いって訳ね。」

「ああ。しかも、これだけの刑事を動員してチドリ捜査をしているところを見ると、まだ犯人からの接触がないんだろう。ただ一人、あの人を除いては、な。」

コナンは眼鏡を押し上げながら呟く。

「高木刑事ね。」

すかさず哀がぼそりと呟く。

コナンはそれには答えず、淡々と自らの頭の中を整理するかのよう

に話を続ける。

「あの様子からすると、恐らく高木刑事は犯人と接触して何らかのヒントを掴んでいるはずだ。なぜ犯人は高木刑事と接触したのか。」

コナンの問いに哀がはつきりとした声で導き出された結論を告げる。

「誘拐されたのが佐藤刑事だから。」

「そう考えるのがもつとも自然だ。それなら全て説明がつく。誘拐事件の場合、金や犯罪の隠蔽などといった目的が考えられるが、いずれにしても犯人はターゲットの情報を十分把握している筈だ。この事件の犯人も高木刑事が佐藤刑事の恋人だって事くらいは知っていただろうな。」

コナンは不快そうに顔をしかめる。

「じゃあ尚更あなたが協力してあげたほうがいいんじゃないの？名探偵さん。」

哀が唇の端に不敵な笑みを浮かべる。

「それはできねーよ。」

コナンは小さく苦笑を返す。

「あら、随分冷たいのね。2人の刑事の命が懸かってるっていうのに。」

哀が以外そうな顔で問う。

「今オレに言えるのは、高木刑事が佐藤刑事を想う気持ちは犯人が思ってるほど安いもんじゃないって事さ。いくら頭のいい犯人でも人が人を想う気持ちが何よりも強いんだって事までは見抜けなかったみてーだな。」

哀は不思議そうに首を傾げる。

コナンは微かに微笑むと心の中で哀が求めているであろう答えを告げる。

高木刑事は誰にも譲りたくねーと思うぜ。愛する人を守る役目はよ。それに、恐らくあともう一步のところまで事件の謎に迫ってるんだ。今更オレがしゃしゃり出て美味しい所だけ持ってくよーな真似はできねーよ。

## 第4章 コナンと哀の推理（後書き）

いよいよ次回で第4章も終わりを迎えます。次回、少年探偵団によって高木君にヒント解読の最後の手がかかります。お楽しみに。

## 第4章 最後の手がかり

本の貸し出し手続きを済ませた5人は図書館を後にした。これから作る自分達の地図の青写真を思い描きながら、ああだこうだと楽しそうに歩く3人とは対照的に、高木が今置かれている状況を悟ってしまったコナンと哀は無言でその後が続く。

エントランスを抜け表に出た所で、さっきまで仔犬のようにはいでいた歩美が何かに気付いたように突然怪訝な顔をして立ち止まった。

「あれ？どうしたんですか、歩美ちゃん。」

それに気付いた光彦が心配そうに声をかける。

うん、と歩美は一瞬困ったような顔で足元に視線を落とした後、あの方向を指差した。

「あれって、高木刑事の車だね？」

皆が歩美の指差す方を凝視する。その視線の先には銀色に輝く見覚えのある車が停車していた。

「確かにそうですね。」

光彦が降り注ぐ夕陽を遮るように手を翳し、目を細める。

「あいつ、一体何してんだ？オレ達がここに来てからもう随分経つぜ。」

元太は訝し気に呟く。

「そういうえば高木刑事、歩美たちがここに来た時怖い顔して何か考え込んでたよね。」

歩美が同意を求めるように他の4人を見る。

コナンがどうにか3人の注意を逸らそうと口を開くよりも早く、

「そうか。分かりましたよ。」

先程まで首を捻って考え込んでいた光彦が、閃いたと言わんばかりに手を打ち、顔を上げる。

「高木刑事は事件の捜査に行き詰まってるんですよ。だからあそこ

です。」「  
でずっと考え込んでいます。」

「あなたが間違っているのではない光彦の推理に、歩美と元太もそっかあ、と頷く。」

「それなら私達が助けてあげようよ。」

歩美が無邪気に提案し、

「そうだな。少年探偵団の力で事件を解決してやろうぜ。」

元太が同意するが早いか3人は高木の車めがけて一直線に走りだした。

「お、おい、オメーらっ。ちょっと待てよ。」

コナンと哀も慌ててそれに続く。

「さっき高木刑事が言ってたろ。事件の事は話せないって。オメーらが行っても足手まといになるだけだよ。」

走りながらコナンが叫ぶ。

「そんなことないもんっ。高木刑事が困ってるのにほっとくなんてできないよ。」

歩美が走りながら振り返り、憤慨した様子で頬を膨らませると、

「そうですよっ。それに僕達はいくつも事件を解決している少年探偵団なんですからっ。」

と光彦も語気を荒げる。

「絶対、役に立つに、決まってるんだろっ。」

元太はふうふうと息を切らしながらコナンを睨みつける。

そうこうしているうちに、真っ先に駆け出した歩美と光彦が高木の車にたどり着く。

「歩美っ、光彦っ。止めろって言うてんだろ。」

コナンの忠告を無視して歩美が再び高木の車の窓をノックする。

真剣な顔をして何かを睨みつけていた高木がはっと顔を上げ、やがてにつこりと相好を崩す。人のいい笑みを覗かせ、少年探偵団の5人を疎ましがるでもなく急いでドアを開ける。

「もう帰るのかい？」

先に口を開いたのは高木だった。視線を合わせるように腰を屈め、

屈託のない笑顔で交互に5人を見る。さっきまでのぴりぴりした刑事の顔は影を潜め、温和ないつもの高木がそこにいた。

「あ、あのねっ高木刑事・・・」

歩美が堰を切ったように勢い良く切り出す。

「ん？」

高木は優しい瞳で歩美の顔を覗き込む。

「あのねっ。」

言いよどむ歩美の言葉を遮るようにコナンがあっけらかんとした口調で口を挟む。

「すっごく面白かったよ！いろんな本がいっぱいあって。」

高木はさも楽しそうにはしゃぐコナンに笑顔を向けると、

「そっかぁ。」

とにこやかに答える。

「学校の図書館には無いような面白い地図もいっぱいあったし。」

コナンは不満げな顔を向ける歩美や元太や光彦にはお構いなしに無邪気な笑顔で続ける。

「へえ。それってどんな地図だい？」

興味深々な様子で、高木はコナンの話に聴き入る。

「うんとね、等高線つてのが引いてあつて高さが分かるようになってる地図とかね。あと昔の偉い人が書いた地図とか。」

「地名の由来が書いてある地図もあったよ。」

先程まで不満げにコナンを見ていた歩美が会話に割り込む。

「そうそう。それに、変な記号がいっぱい書いてある地図もあったよな。」

元太が光彦の方を振り返りながら言う。

「変な記号？」

高木が不思議そうな顔で問い掛ける。

「地図記号ですよ。×とで警察を表したり、で市役所を表したりする。」

光彦が得意げに高木に説明する。

ああ、なるほど、と高木はにこりと笑って頷く。

「他にもいろんな記号があるんだぜ。お日様みたいなやつとかよー。」

元太が何気なく口にした一言が高木の表情を一瞬にして刑事の顔に変える。

「元太君、ありがとう。ちょっとごめんよ。」

呆気にとられる5人をよそに、高木はポケットから携帯を取り出し慌てた様子でどこかに電話する。

「何か解ったみたいね。」

哀がそつとコナンに囁く。

「だな。」

コナンはにやりと唇の端を引き締める。

「あの子たち、足手まといになるどころか随分役に立ったんじゃない？」

哀が皮肉めいた笑みを浮かべてコナンを見る。

「そうだな。」

コナンは苦笑しながら呟く。

しばらく何やらやり取りを交わした後、高木は真剣な顔で電話を切った。そこにはさっきまでの温和な高木の顔は無かった。

「僕は今から行かなきゃいけないところができたから、君たちは気をつけて帰るんだよ。いいね。」

そう言い残すと高木は急いで車に乗り込みアクセルを踏み込む。

後には何かなんだかさっぱり分からないといった表情の3人と先程より少し穏やかな表情をした2人の子どもたちが残された。

#### 第4章 最後の手がかり（後書き）

やっと第4章が終わりました。神崎のヒントの答えは解りましたか？答えは『杯戸町にある・・・』です。高木君は少年探偵団に最後の手がかりをもらい無事ヒントの解読ができたようです。いよいよ次章、高木君と神崎が対面します。果たして高木君は佐藤さん無し事に助け出す事ができるのでしょうか？

## 第5章 最後のピース

先ほど電話で聞いたその場所に向かって車を走らせながら、高木は神崎がよこしたヒントを思い出し出していた。

その答えは予期せぬところからもたらされた。

少年探偵団の子ども達との会話の中で元太から太陽によく似た形の地図記号があると聞かされた時、高木の頭の中で欠けていたパズルの最後のピースがぱちりと音をたててはまった。

そうか、そうだったんだ。

高木は神崎のヒントにあった『光と影』にはもうひとつの意味があったのだと気付く。それは高木が『光と影』を『右と左』と変換するきっかけとなった疑問、なぜ『光と闇』ではなく、『光と影』でなければならなかったのかということが大きく関係していた。その理由にはもうひとつの手がかりが隠されていたのだ。光が無ければ影が存在しないのと同様にこのヒントの答えは影が示す答えだけでは成立しない仕組みになっていたのだ。つまり、光が示す答えがあつて初めて影が示す答えが成立するように作られているのということ。そう、光にもこのヒントを解読するための答えが用意されているのだ。影を作り出す光が示す物。それを考えれば自ずとその答えは導き出される。

影を作り出す光といって真つ先に思いつくもの。それは太陽だ。そして、この太陽が示しているものこそ光が示す答えなのだ。そう、先ほど元太が言っていた太陽のような形の地図記号。それが、このヒントを解読する最後のピースだった。その地図記号が表しているもの。それは工場。

つまり、これらの答えを組み合わせると神崎のヒントの答えは『杯戸町にある工場』ということになる。

杯戸町にはいくつか工場がある。しかし、その中でも監禁場合に適した工場となればかなり数は限られる。まず、一番重要なのは人の

出入りが無いという事だ。つまり、既に稼働していない工場ということになる。しかも、神崎がその事を知っていて、万一出入りしているところを誰かに見られたとしても怪しまれないような場所であればならない。そうなると条件に合う工場はかなり絞られる。

高木はふと以前事情聴取で訪れた神崎物産のロビーで何気なく手に取った会社案内のとおるページを思い出す。

そして、急いで確認の電話をかける。

2回ほど呼び出し音が鳴った後、穏やかな声の女性が応答する。

「お電話有難うございます。神崎物産、天辻でございます。」

高木が手短に自分の身分と用件を伝え、女性は直ぐに担当者に電話を取り次いだ。

「御社は杯戸町に工場をお持ちでしたよね？」

高木の問いに、電話口の男性社員は質問の意図が解らないといった様子で戸惑いがちにこう答えた。

「はい、3ヵ月ほど前までは在ったんですが、事業拡大に伴い移転しまして。現在は稼働しておりませんが。」

高木は自分の勘が正しかった事を悟る。

「そうですか。今は稼働して無いんですね？」

念を押すように高木が尋ねる。

「え、ええ。それにあそこは来月取り壊す予定になっておりまして。」

何故そんな事を聞くのかと不思議そうに答える男性にその工場の住所を尋ね、丁寧な礼を言うと高木は静かに電話を切った。

間違いない。佐藤さんはそこに監禁されているんだ。

高木は確信した。神崎のヒントの答えに合致し、更に現在は廃工場になっていて、しかも自分の会社の持ち物だから出入りしていても怪しまれない。こんなに監禁場所に適した場所が他にあるだろうかそれに神崎はこうも言っていた。タイムリミットまでまだ時間はあ、と。高木はその時単純にタイムリミット＝夕暮れだと思っていた。いくら監禁するのに都合のいい場所でも、明るいうちから人を

呼び付けたり運び出したりしたのではさすがに目立つ。それを避けるには辺りが暗くなつてからの方が都合がいい。だから高木は神崎が夕暮れを指してタイムリミットと言つたのだらうと解釈した。しかし、今ならそれは工場の取り壊し期日が迫っている事を知っている神崎が、高木に示したささやかなヒントだったのではないかとさえ思える。

だとしたら、何故神崎はわざわざヒントなどよこしたのだろうか？もしかすれば神崎の予想以上に早く高木が佐藤の監禁場所に辿り着いてしまつかもしれないというのに。

高木を試しているのか。それとも自分の作つた暗号によほどの自信があるのか。あるいは……

高木はじつと前を見据えて考える。そして、希望的回答を導き出す。神崎篤は実は繊細な人間なのかもしれない。憎悪で汚れていく自分を誰かに止めてもらいたいのかもしれない。そして、その役目を高木と佐藤に託したのかもしれない。

そうであつて欲しい。高木は強く願つた。

## 第5章 最後のピース（後書き）

いよいよ第5章に突入です。前章で持ち越していたヒントの解説、いかがでしたか？ここからはゴール目指して今まで以上に突っ走っていくつもりです。応援よろしく願います。

## 第5章 廃工場とピアス

その工場は杯戸町の郊外にある工業地帯の一画にあった。かなり大きな建物だがすでに閉鎖しているためか工場名も外されてしまっている。恐らく電気や水道も止まっているだろう。当然ながら人の出入りは無く閑散としている。

高木はゆつくりとその外観を観察しながら車を裏手へと回す。がらんと広い社員駐車場に行き当たった所で片隅に紺色の軽自動車があり捨てられているのが見えた。神崎篤の自宅駐車場で何度となく見かけた麻緒の車と同じ車種、同じカラーリングの車。高木はその隣に自分の車を止め、エンジンを切った。暖房の効いた車内から一歩外へ出ると、一時より少し日が長くなってきたとはいえ確実に日が沈みつつあるせいか、外気が一段と冷たく感じられる。吐く息が白くなるほどではないが、風が頬を撫でると背筋が縮こまる思いがする。

恐らく神崎が乗って来た麻緒の車に違いないだろう。高木は随分前に停められたであろうその車の前に回り込み中を覗き込む。車内にはこれといった目に付く物は無い。もちろん神崎がここに居ることを示すような証拠も。

仕方ない。由美さんにナンバー照会して貰うか。

高木は携帯を取り出すとリダイヤルボタンを数回押し、交通課に在籍している宮本由美の番号を探す。発信ボタンを押そうとして、ふと指が止まった。由美は恐らく佐藤が行方を眩ませた事を知らないだろう。いや、もしかしたら昨日から連絡が着かないのを不審に思っただけで千葉辺りから何か聞き出しているかもしれない。だが、どちらにしても今高木が不用意に電話をすれば、勘のいい由美に事件のあらましを説明しない訳にはいかなくなるだろう。

高木はぱたんと携帯を閉じる。由美に頼るのはもう少し後だ。

良く見る。何か無いか？この車が神崎が乗って来た物だという痕跡

がどこかにあるはずだ。

高木は車の周辺をぐるりと回りながら何か決め手になりそうな物はないか観察する。じっと目を凝らして助手席を覗き込んだ時、高木は遠慮がちに輝きを放つ何かシートに残されているのを発見する。先ほど正面から覗き込んでいた時にはシートのデザインに紛れて気付かなかったが、助手席側から覗き込んでみてその存在に初めて気付く。

あれは……

その小さな物体の正体は直ぐに判った。  
ピースだ。

しかも、あのデザインは捜査中何度も目にした。忘れるはずなどない。そう、麻緒の左耳に残されていたものと全く同じ物だ。小指の先よりも小さなシルバーの十字架に一粒のダイヤをあしらったピース。それがこの車のシートに残されている。多分この車を運転してきた神崎のコートが何かのポケットから落ちたに違いない。一般的に世間に流通している紺色の軽自動車の数なんかより、このデザインのピースの数の方が相対的に少ない事は明らかだ。しかも、その両方を所持している人間なんて一体何人いるだろう。

高木は人気の無い工場を振り返る。

間違いない。佐藤さんはここに監禁されている。

高木はくるりと踵を返し、工場に向かって歩き出す。どこかに入口はないかと首を捻り、見つけた従業員通用口らしき鉄の扉に駆け寄る。試しに取っ手を引いてみる。ぎいと重たい音がして扉はなんの抵抗もなく開いた。高木はごくりと息を飲んだ。

## 第5章 廃工場とピアス（後書き）

もっと早く更新するつもりだったのに遅くなってしまいました。すみません。次話はすぐに更新するつもりですのでよろしく願います。

## 第5章 手探りの搜索

開いた扉の隙間から、高木はそうつと中を覗き込む。打ちっぱなしのコンクリート壁が剥き出しになっているせいか、中はひんやりと冷たい。電気も無く薄暗い廊下はひっそりと静まり返っていた。

高木はその隙間から中に滑り込む。音を立てぬようゆっくりと扉を閉めると、辺りはたちまち暗闇に包まれた。明かりを点ける訳にもいかず、ただひたすら目を凝らし暗闇に慣れるのを待つ。その時間でさえもどかしく、ややもすると苛立ちそうになる心を必死に静める。

少しの焦りと抑えきれないささやかな苛立ちを抱えたまま、歩を進める足音でさえも響き渡りそうな工場の中を、そろりそろりと細心の注意を払いながら高木は少しずつ前進し始める。どこに何があるのかも分からない文字通り手探り状態の中で、部屋という部屋を片っ端から確認していく。

扉を入つてすぐ脇にはガラス張りの部屋があつた。中を覗いてみたが何も無い。高木にはここが何の部屋だつたかすら分からない。もう少し明かるければ、ここが管理室であつたことにも気付いたのだろうが、情けないことに暗闇が支配する今の状況では想像力や推理力など全くといっていいほど働かない。ただ目の前に突きつけられた現状を理解するだけで精一杯だつた。

躊躇すること無く奥に進んで行くと、トイレや更衣室、機械室らしき部屋などがあつたが、どこも荷物を運び出した後らしくがらんとしている。もちろん人っ子一人いない。

この工場の配置など全く知る由も無い高木にとって、暗闇の中で自分の五感だけを頼りに佐藤を探し出すのは気が遠くなるような骨の折れる作業だつた。それでも自分の推理を信じて、刑事としての勘を信じてひたすら目の前に現れる部屋をひとつひとつ確認していく。ただ、佐藤の無事を祈りながら。

倉庫らしき部屋を確認し、広々とした作業場を抜けたところで高木は1階にある全ての部屋を確認したことに気付く。

あとは2階か。

作業場の奥にエレベーターが設置されてはいるがもちろん動くはずもない。高木はその脇に設置された階段を手すりにつかまりながら一歩一歩踏みしめるようにして上った。

1階に比べて2階は一部に窓が設けてある為かまだ仄明るい。ほぼ日が落ちてしまった今の時間ではそれほど視界が開ける訳でもないのだが、それでも窓の無い1階に比べると格段に明るくなったような気がした。高木は無意識の内に安堵の溜息をつく。

階段を上がってすぐのところにある倉庫を調べ、食堂を抜けると奥にある部屋はあと2つ。

どっちだ。どっちの部屋に監禁されているんだ。

しばらくの間2つの部屋を交互に見比べていた高木はやがて確信に満ちた目で一方の部屋を見据える。静かにドアの前まで進み、そこに設けられた細い刷り硝子から微かな光が漏れているのを確認すると、ごくりと息を飲む。

間違いない。この部屋だ。

高木は鋭い眼でそのドアを睨みつけ、強く唇を噛み締めた。

## 第5章 手探りの搜索（後書き）

次回、とうとう高木君と神崎が対決の時を迎えます。お楽しみに。

## 第5章 対峙の時

高木は上着をめくり、ホルダーに納められている拳銃を引き抜く。全弾装填されていることを確認し、右手で構える。扉の向かって左側に立ち取っ手に手をかけると、高木は痛いくらい激しく暴れ回る心臓を鎮めるように大きく深呼吸する。ひんやりとした冷たい空気が肺に流れ込み、少しではあるが鼓動が鎮まる。それでもじつとりと嫌な汗が滲み、嫌が応にも緊張感を高める。湿った掌に力を込め、高木は意を決したようにその扉を押し開けた。

まず目に入っしたのは、がらんと広い室内にぼつりと佇む人影。そしてその横にうずくまるようにして床に座り込む佐藤の姿があった。

「高木、くん？」

俯いていた佐藤がはつと顔を上げ、か細い声で高木を呼ぶ。薄暗い室内でも高木の目には佐藤の姿がはつきりと確認できた。かなり疲れた様子ではあるが、目立った外傷はない。その心につけた傷は、今は図り知れないけれど。

高木はひとまず安堵した。佐藤が無事だった事で、高鳴っていた鼓動は随分落ち着きを取り戻す。

「佐藤さんを返してもらいに来ましたよ。神崎篤さん。」

高木は無言で佇む人影にはつきりとした口調で宣戦布告する。

「随分早かったじゃないか。警視庁捜査1課の高木涉さん。」

床に置かれたささやかな明かりに照らし出された男はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「俺は少しあんたを甘く見ていたようだな。まさかあれだけのヒントでここを突き止めるとは。なかなか優秀だよ。」

やや自嘲気味に男は高木に告げる。

「それはどうも。」

高木は小さく苦笑を漏らし、

「佐藤さんには手を出してないでしょうね。」

念を押すように問いかける。

「ああ、大切な人質だからね。ここに連れて来る前には少々手荒な真似をしちまったが。」

男はちらりと足元の佐藤に目をやる。佐藤が鋭い眼で睨みつけるのにも構わず、男は揚々と続ける。

「こんな美人と付き合ってるなんて、あんたが羨ましいぜ。まあ、少々気が強くて扱い辛い女だけどな。」

「無理も無いですよ。彼女は人一倍正義感の強い人ですからね。」

さらりと神崎の言葉を受け流し、高木は続ける。

「無駄なおしゃべりはやめにしてそろそろ本題に入りましょうか。」

高木の言葉に神崎はふっとひとつ息を吐く。

「まあそう急がなくても時間はまだまだたっぷりあるさ。急げばその分寿命が縮まるだけだぜ。高木さん。」

高木は眉ひとつ動かさず、落ち着いた声で答える。

「急いでいるのはあなたなんじゃないですか？」

ぴくりと男の肩が震える。高木はそれを見逃さなかった。

「焦っているのはあなたの方ですよ、神崎さん。」

男は唇を噛み締め、憎々しげに高木を睨みつける。高木は平然とした顔で真っ直ぐに男を捉えた。

## 第5章 対峙の時（後書き）

高木君と神崎の攻防戦が始まりました。高木君はやつとの思いで見つけ出した佐藤さんを守り抜く事が出来るのでしょうか？

## 第5章 高木の推理

「あなたは事故の真相を明らかにされなくなかった。だからあなたは事故の真相を知ってしまった史乃さんの口を封じ、あの事故に疑問を持っていろいろと調べ回っていた僕と佐藤さんを消し去ろうと考えた。」

高木が澀み無く自らの推理を話すのを、男は黙って聞いていた。

「昨日あなたが史乃さんを訪ねたのは、彼女に呼び出されたからです。ね？大事な話があると言っても言われて、あなたは史乃さんが事故の真相を知ってしまったんだと思った。きっと前から計画していたんでしょ？バレてしまったら殺すしかない。」

「ああ、あんたの言う通りだよ。」

神崎はあっさりと肯定した。しかし、その表情はぼんやりと影になり窺い知ることができない。それでも高木は迷うことなく自分の推理を話し続ける。

「ところが、それを実行に移そうとした時、ちょっとしたアクシデントが起こったんです。あなたは史乃さんを薬が何かで眠らせ、病気があるいは自殺に見せかけて殺そうと考えていた。しかし、あなたが来客の痕跡を消そうと躍起になって油断しているうちに、佐藤さんがやってきて異変に気づき、気絶している史乃さんを発見してしまっただけ。」

「まるで見てきたみたいない方だな。」

男は呆れたように吐き捨てる。それでも高木は推理を止めない。男の顔をじっと見据えたまま淡々と話し続ける。

「あなたは焦った筈だ。何とかしなければと思ったあなたは咄嗟に近くにあった鈍器で佐藤さんを殴り気絶させた。だから、あなたは計画を変更せざるを得なくなってしまったんです。以前から僕たちを疎ましく思っていたあなたはこの非常事態を利用して、佐藤さんと僕も消してしまおうと考えた。このまま気絶している佐藤さんを

ここに監禁し、僕を呼び出せば二人同時に始末できるとふんだんですよ。違いますか？」

「その通りだよ。あんたは思った以上に勘がいい。あんたとこの女が恋人同士だつてことは既に知っていたんでね。悪いが利用させてもらったよ。」

男は唇の端に乾いた笑みを浮かべると、隠し持っていた鋭い刃を高木の前にちらつかせる。それは鈍い光を放ち、高木の言葉を制した。男はしゃがみ込み、佐藤の喉にその尖った刃を押し付ける。高木は銃を構える手で照準を絞った。

「この女を殺されたくなければ銃を棄てろ。」

神崎は片方の手で佐藤の腕を掴み、引きずり上げるようにして立たせると、その後ろに回り込む。

「下手な真似をすると、あんたの手でこの女をあの世へ送る羽目になるぜ。」

勝ち誇つたような顔で男は高木を見据える。

「あんたらは知りすぎたんだよ。世の中には知らない方がいいことも沢山あるって事さ。」

男の戯れ事を高木は無言で聞いていた。

「あんたらが首を突っ込んでこなければこんなことにはならなかったんだ。恨むんなら俺じゃなく、好奇心旺盛な自分達を恨むんだな。」

吐き捨てるような男の言葉に、さっきまで無言で立ち尽くしていた

高木がぼそりと口を開く。

「好奇心なんかじゃありませんよ。」

不満げな表情で男が問い返す。

「それじゃあ正義か？」

高木はやるせない顔で首を横に振る。

「そんなかつこいいもんでもないです。」

ただ、と高木はささやかな笑みを浮かべて迷い無く答える。

「真実を明らかにしなければそこに希望は生まれないんですよ。人

間は希望が無いと生きていけない弱い生き物ですから。だから求め続けるんですよ。僕の中にある本能がね。」

「本能、か。あんた、根っからの刑事だな。」

嘲るように男が笑う。

「だが、それが命取りになることもあるって知っておいた方がいいぜ。真実を追い求めるのもいいが、人間には妥協してもんも必要なんだよ。」

高木は真っ直ぐな目で男を見る。

「神崎さん。あなたこそ妥協した方がいいですよ。完璧を追い求めてもすべてを手に入れる事は不可能なんですから。」

高木の言葉に男の表情が一変する。剥き出しになった傷口をえぐりとられたような苦々しい顔で高木を睨みつける。

「あんたなんか何が解る。」

男は低い声で唸る。

「教えてやろうか？愛する女を失う絶望ってやつを。」

男はにやりと冷酷な悪魔の笑みで高木を見据えた。

## 第5章 攻防の果て

「この女の死に様を見たくないなら銃を棄てるんだな。」

高木は男をじつと睨みつける。

「棄てろって言うてんだよ。この女がどうなってもいいのか？」

男が声を荒げる。高木は先ほどまでじつと見据えていた男の顔から視線を外し、佐藤の方を見遣る。

「高木くんつ。私はどうなっても構わないから撃ちなさい。」

佐藤は毅然とした表情できっぱりと叫ぶ。

高木はふつと穏やかな笑みを浮かべると静かに首を横に振った。

「それは、できませんよ。」

高木はぼつりと答えると、構えていた銃を下ろし足元に投げ棄てる。

「よし、じゃあその銃をこちらへ寄越せ。」

男は狂喜に満ちた瞳で高木に要求する。

「駄目よ、高木君。絶対に渡しちゃ駄目。」

佐藤が涙目でそれを制する。しかし。

高木は足元の銃に目をくると、無言でそれを男の方へ蹴り渡す。それは男の足元からやや右に逸れ、数回円を描き、ぴたりと止まった。

「ふん。賢い選択だ。まあ安心しな。こいつであんたを殺したらこの女もちゃんと送ってやるからよ。あんたの待つあの世へな。明日の朝刊はあんたらの話題で持ち切りだろうぜ。恋人を誤って射殺した女刑事、自責の念に駆られ自殺ってな。」

男は笑いを噛み殺しながら、ナイフを左手に持ち替え、ゆっくりと銃に手を伸ばす。

「おっと、先に言つとくぜ。下手な真似しやがったら直ぐさまこの女を殺るからな。」

念を押しながら用心深い目で高木を見据え、佐藤の体を盾にしながら男はそろそろと手を伸ばす。

高木は微動だにしない。

佐藤は息を飲んだ。

それはかなり長い時間のように感じられた。張り詰めた空気を静寂が支配する。

しかし、その緊迫は一瞬にして破られた。

足元からやや逸れた位置で止まった銃を拾い上げようと男が佐藤の背後から先程よりも少し大きく手を伸ばし、視線を外した瞬間、その時を待っていた高木が上着の内ポケットから佐藤の拳銃を取り出し、構える。何の躊躇も無く放たれた弾丸は、静寂を切り裂き男の肩を捉えた。すかさず佐藤の右足が高木の拳銃を弾き飛ばす。男は驚愕の表情を浮かべナイフを床に落とすと、貫かれた肩口を押さえがつくりとひざまずいた。高木は内ポケットに銃をしまいながら男に駆け寄る。男が落としたナイフを拾い上げ手の届かない場所に置くと、右ポケットを探り手錠を取り出す。

「18時32分、被疑者確保。」

高木は男の両手を拘束するとハンカチを取り出し、手早く肩の傷を止血してやる。

一通り刑事としての職務をこなすと、高木は佐藤の方に向き直り、佐藤を拘束していた手錠を外す。

「佐藤さん、大丈夫ですか？」

高木は優しく微笑みかける。

「高木くん。」

佐藤が震える声で高木を呼ぶ。

高木はぽんぽんと安心させるように佐藤の頭を撫でる。

佐藤は俯きがちに消え入りそうな声で、ごめんねと呟いた。

「いいんですよ。佐藤さんが無事でさえいてくれれば。」

高木は佐藤の顔を覗き込み、にこりと笑む。

その言葉に佐藤も静かに微笑む。

「気付いてくれたのね、あれ。」

佐藤が高木の左胸を指先でつつく。

「ああ、拳銃ですね。佐藤さんなら史乃さんの家に自分が立ち寄った痕跡を残してるんじゃないかと思って調べていたら偶然見つけたんです。」

高木は照れ笑いを浮かべ頬を掻きながら答える。

「神崎の暗号を解読した事といい、なかなかやるじゃない。見直したわ。」

佐藤は先程ちらりと覗かせた恐怖と緊張で強張っている心を刑事の顔で覆い隠し、さらりと台詞を吐く。高木にはそれが切なくてたまらなかった。

そんな高木の心を知ってか知らずか、佐藤はきりりと表情を引き締めて言う。

「一刻も早く目暮警部に連絡しなきゃね。私が無事だった事と、被疑者を確保した事、そしてもう一人の人質がまだ行方不明だったこともね。」

## 第5章 攻防の果て（後書き）

原作ではほとんど登場しない高木君の発砲シーンを書いてみたのですがいかがでしたか？作者の中では佐藤さんほどではないけれど、拳銃の腕前はなかなかのものという設定なのですが・・・

## 第5章 ジレンマ

先ほどまで人質にとられ、命を危険にさらされていたことなど微塵も感じさせない毅然とした態度で平然と言い放つ佐藤に対し刑事として尊敬の念を抱く一方で、本当の気持ち吐露させてやれない歯痒さを胸の中に押し隠しながら、高木は刑事として職務を全うすることを望んだ佐藤の意思を尊重し、自らも刑事の職務に徹しようと思心に決める。とにかく今、真っ先にしなければならぬのは史乃の安否とその行方を確認することだ。そう判断した佐藤に、高木はすぐさま先ほどまでの安堵の笑みを引っ込めると、真剣な眼差しで自らの疑問をぶつける。

「佐藤さん、史乃さんは一緒じゃなかったんですか？」

佐藤は力なく首を左右に振る。

「私が史乃さんの家を訪ねた時、史乃さんは確かにうつ伏せに倒れて意識を失っていたわ。だけどここに連れて来られたのは私だけみたいね。私が目を覚ましてからは神崎以外誰も目にしていないし、それらしい物音もしなかったもの。」

佐藤は自らの記憶を辿るように俯きがちに、しかしきっぱりと答えた。

「そうですか。僕も史乃さんの家へ行きましたけど、史乃さんは居ませんでしたね。ここも一番奥の部屋を除いて全部の部屋を探しましたけど。」

高木も先ほどまでの記憶を辿りながら佐藤に報告する。佐藤は顎に手をやり、険しい表情で唸った。

「史乃さんが拉致されたのは昨日の3時半頃だから、もう丸1日以上経つことになるわね。早く史乃さんを見つけ出さないと。」

その先を佐藤は口にしなかった。ただ少し、ほんの一瞬その唇の端に焦りの色が浮かんだのを高木は見逃さなかった。それは史乃の命が危険にさらされていることを意味していた。桜の蕾が随分綻んで

きているとはいえまだ朝晩は吐く息が白く染まるくらい寒い季節だ。長時間劣悪な環境下で放置されていたとしたら、それは最悪の結果を招いたとしてもおかしくはない。

「何か手がかりがあれば・・・」

佐藤が床に視線を落としたまま呟くのを神妙な顔で聞いていた高木は、はたとその鍵を握る人物が自分の背後に座り込んでいることを思い出す。慌てて振り返るとしゃがみこみ、魂が抜けてしまったようにぼんやりと宙を見上げている男に穏やかだがはつきりした口調で尋ねる。

「神崎さん。史乃さんはどこですか？」

しかし、男は一点を見つめたままぴくりとも動かない。高木の声などまるで聞こえていないようだ。高木は小さく溜め息を吐くと、気を取り直してもう一度、室内に響くほど大きな声で尋ねる。

「神崎さん。史乃さんをどこに監禁したんですか？」

語気を強めて話し掛けるも、男は相変わらず呆然と宙を見上げ答えることはなかった。高木が困ったような顔で佐藤を振り仰ぐ。佐藤は小さく溜め息をつくと、お手上げだといわんばかりにふるふると首を横に振った。

「放心状態ね。高木くんに撃たれたのがよっぽどこたえたのかしら。」

呆れ顔で男を見下ろすと、とりあえず、と佐藤は高木の前に手を差し出す。

「はい？」

素っ頓狂な声を上げた高木にやや苦笑しながら佐藤は差し出した手をひらひらさせて言う。

「携帯、貸してくれる？私の携帯この人に奪られちゃったのよね。」  
ほら早く、と佐藤は呆然と見上げている高木を急かす。

「ああ、はい、どうぞ。」

慌ててポケットから携帯を取り出して手渡すと、佐藤は神妙な顔つきでボタンを押した。床に視線を落とし不快な顔で一点を睨みつけ

ながら、相手が出るのを待つ。ややあつて、佐藤がいつもの凜とした声で話し始める。

「目暮警部、佐藤です。いろいろとご心配をおかけしてしまってますみませんでした。」

佐藤は淡々とした口調で上司に自らの無事を報告し、詳しいことは後程お話しますが、と前置きした後で被疑者を確保したことや確保の際に被疑者を負傷させてしまったこと、そして自分の他にももう一人拉致されたであろう人間がいることなどを簡潔に説明する。

「そういう訳ですので、至急応援をお願いしたいのですが。」

佐藤がてきぱきと話す姿を高木はただ黙って見ていた。そうしていなければ不安と恐怖で押し潰されてしまいそうになる心をひたすら隠そうとする佐藤の横顔を、ただぼんやりと。

## 第5章 ジレンマ（後書き）

あけましておめでとうございます。今年もお付き合いの程よろしく  
お願い致します。

## 第5章 崩落

高木はただ呆然とその場に突っ立っていた。

その横で佐藤が何度も男に志乃の居場所を尋ねる。しかし、先ほど高木に撃たれるまで饒舌に喋り続けていた男の口からその場所を聞くことは出来なかった。それどころか、男は虚ろな目で薄暗い部屋の一点を見つめたまま身じろぎひとつすることはなかった。

しばらくして数台のパトカーがけたたましいサイレンの音を響かせながら到着すると、それまで静寂と暗闇が支配していた空間が一気に騒々しくなる。その中には目暮や千葉、白鳥の姿もあった。佐藤の姿を見て安心したのか、皆一様に表情を綻ばせる。

「佐藤君、心配したぞ。無事でなによりだ。」

目暮が安堵の笑みを浮かべて佐藤の無事を喜ぶ。

「警部。ご心配をおかけして申し訳ありません。」

佐藤も口元に小さな笑みを浮かべる。しかし、その笑みはすぐに消え去りいつもの冷静沈着な佐藤が後を続けた。

「警部。被疑者は右肩を被弾しています。応急処置はしていますが、念のため病院へ。」

先刻の電話で簡単に事情を説明していたためか、目暮は被疑者が被弾した理由を尋ねる事も咎める事も無く力強く頷く。

先ほど佐藤は電話口で神崎が被弾した理由を自分が神崎を狙撃するよう高木に命じたためだと報告していた。万が一今回の狙撃について何らかの問題が起った場合、佐藤は全ての責任を自分一人で背負う覚悟のようだった。高木はそんな佐藤の言葉に口を挟む事も出来ず、ただ複雑な思いで聞いていた。一人で全てを背負おうとする佐藤の決意に取り残されたような寂しさ又何も言えない悔しさ、そしてそんな決断を下した佐藤とその決断をさせてしまった自分に対する腹立たしさが入り交じったなんとも言えない感情だった。

確かに佐藤は拳銃を渡すくらいなら神崎を撃てと言った。しかし、

高木が神崎に拳銃を蹴り渡した時点で佐藤はその指示が無効になったと判断したに違いなかった。そう、最終的に発砲を決断したのは他でも無い高木自身なのだ。今回の一件で、高木は上司である佐藤の命令をことごとく無視してきた。神崎から電話を受けた時も、佐藤は本庁に戻って目暮の指示を仰げと言った。しかし高木は単独で乗り込む事を選んだ。拳銃の引き渡しにしたって、神崎の狙撃にしたってそうだ。高木は佐藤の命令に反する選択ばかりしてきた。そう、全ては高木が己の判断で行った事なのだ。しかし。

佐藤はその事には一切触れ無かった。それは一連の高木の行動が上司である自分の監督責任になるということを佐藤が十分に理解していたからだ。結果的にはその高木の判断が佐藤の命を救い、被疑者を確保する事に繋がったのだが、それはあくまでも結果に過ぎない。本庁への連絡もせず監禁場所に乗り込み、人質を救い出すためとはいえ勝手に被疑者を狙撃したとなれば、その責任を問われたとしても文句は言えない。そして佐藤はその全ての責任を被るつもりでいるのだ。

佐藤の言葉を聞いて、高木は激しい後悔の念に苛まれた。佐藤を想う気持ちが逆に佐藤を苦しめる結果になったのだという事実が心を押し潰されそうになる。自分が正しいと信じてきた事は、全て間違っていたのかもしれない。頭の中が真っ白になり、それ以上何も考えることが出来なかった。高木はただ立っているのが精一杯だった。

## 第5章 救いの微笑

相変わらず茫然自失で立ち尽くすの高木の隣で佐藤は一通り事のいきさつを目暮達に説明した後、伏し目がちにぼやく。

「先程から何度も神崎に史乃さんをどうしたのかと尋ねているんですが、放心状態で全く話にならなくて。」

困りきった様子で溜め息を吐く佐藤に、目暮もつられてひとつ息を吐く。そして、佐藤の労を労うようにその華奢な肩を大きな手でぽんと叩くと高木の後ろで力無く座り込んでいる神崎の前にしゃがみ込む。

「神崎さん。あなた、史乃さんをどうしたんですか。」

低く唸るような口調で目暮は詰問する。しかし神崎は答えない。先程と同じく放心状態でこちらの声などまるで届いていない。

「てめえいい加減にしないと・・・」

血の気の多い刑事の一人が痺れを切らして神崎の胸倉を掴んで凄む。

「おい、神崎は負傷してるんだ。あまり手荒な真似はせんでくれよ。」

目暮はそれを制し、根気よく神崎を問いただす。

しかし、結果は同じだった。

目暮はやれやれと首を竦め、小さく首を振る。

「これはお手上げだな。とりあえず署に連行して根気よく聞き出すしかないさそうだ。」

その一部始終を見守っていた誰もが頷くしかなかった。

目暮は険しい顔で取り囲む刑事達を見回す。

「佐藤と高木は神崎の取り調べに当たって被害者の行方を聞き出してくれ。他の者は、神崎の昨日の足取りを調べて被害者の居場所を掴む事に全力を挙げろ。佐藤君が神崎に襲われた被害者を発見してから既に24時間以上が経過している。一刻も早く見つけ出すんだ。」

目暮の指示に答えるように高木以外の刑事達が力強く頷く。

高木はというと、突然目暮に名前を呼ばれびくりと肩を震わせ、はたと我に帰る。

恐る恐る隣に立つ佐藤の方に首を捻ると、佐藤は心配そうな瞳で高木を見上げていた。口には出さないが、その表情が高木に大丈夫？と問い掛ける。思考回路が完全に止まってしまっている頭を必死に働かせようとするが、感情がそれを邪魔して何も考えられない。焦れば焦るほど頭は混乱し、発狂しそうになる。

「高木くん。」

佐藤が聞き取れないほどの小さな声で高木を呼ぶ。

「はい。」

高木が虚ろな顔で返事を返すと、佐藤は少し背伸びをして内緒話をする時の様にやや背の高い高木の耳元に唇を寄せ、そっと囁いた。

「あなたが命懸けで私を守ってくれたように、私もあなたのことを守りたいの。」

高木は目を見開き佐藤の顔を凝視する。そこには高木が一番好きなあの全てを包み込んでしまう柔らかい微笑だけがあった。

## 第5章 救いの微笑み（後書き）

もうすぐ第5章も終わりを迎えます。頑張りますのでよろしく願います。

## 第5章 希望の光

先程まで高木の心の中に巣くっていた後悔と罪悪感は、その静かな微笑で呆気なく拭い去られる。残ったのは穏やかな安心感。そして、それをくれた佐藤をただ愛おしく思う気持ち。満たされた幸福感が全身を包み込み、思わず涙が零れそうになる。高木はそれをぐっと堪えて口元にぎこちない笑みを浮かべた。

いつだって佐藤はその微笑みで高木の全てを包み込んでしまう。その微笑は雲ひとつない冬空のようにどこまでも澄み渡り、降り注ぐ木漏れ日のようにじんわりと温かい。それはどうしようもない不安や苦しみ、悲しみから高木を救い出してくれる希望の光なのだ。そしてこの道標があったからこそ高木はどうかここまで走って来る事が出来た。大袈裟かもしれないが、佐藤がいなければ生きる事の意味すら見失っていたかもしれない。

もしあなたと出逢った事が運命だったなら。あなたと共に生きていく事が自分の使命なら。どんなに困難な人生でも諦めずに歩いて行けそうな気がする。あなたが傍にいて微笑んでさえくれば、それだけで心はこんなにも満たされるのだから。

高木の今にも泣き出しそうな微笑に佐藤は小さく頷く。その瞳が真っ直ぐ高木に語りかける。

あなたは自分の信じた道を進めばいいのよ。私はあなたを信じてるから。と。

高木が佐藤を大切に思う余り彼女を傷付けてしまったとしても、佐藤はなんの迷いも無くその運命を受け入れるのだ。それは佐藤が高木の想いを信じているから。そして高木が佐藤を愛しているように、佐藤も高木を愛してくれているから。だからこそ出来る限りその想いに応えたいと思う。溢れんばかりの愛情と信頼に応えられる自分でありたいと願う。ちっぽけで何の取り柄も無い自分をありったけの愛で包んでくれる。その佐藤の想いだけは絶対に裏切りたくはな

いのだ。

切ないほど強い愛しさで胸がいっぱいになった瞬間、高木の頭が猛スピードで回転し始める。そしてひとつの仮説に思い至ったその時、複雑に絡まりあっていた糸はすっかり解けていき、今まで曖昧なまま積み重ねてきたものがはつきりと姿を現した。

「佐藤さん。何となく解ったような気がします。」

瞳に悲しみの色を浮かべてぼつりと呟いた高木がひらりと身を翻し、両脇を警察官に抱えられ今まさに連行されようとしている男の前に立つ。

「あなたは知っていたんですね。あの事故の真相を。」

苦し気に搾り出した高木の言葉に男の体がぴくりと震えた。高木はしかめっ面でとつとつと男に語りかける。

「麻緒さんの死は事故じゃない。本当は自殺だということをあなたは知っていたんでしょ？」

俯いていた男が弾かれたように顔をあげる。

「ちよつと高木くん？　どういうこと？」

佐藤が背後から驚きの声を上げ、高木に詰め寄る。

「神崎さん。史乃さんの家にあった紫色のカバーがかけられたノート。あれは麻緒さんの日記なんでしょう？」

佐藤の質問にはあえて答えず真っ直ぐ男を見つめたまま高木はさらに問い掛けた。

「見たのか？」

今まで頑ななまでに押し黙っていた男がぼつりと呟く。その瞳は悲壮なまでに憔悴しきっていた。高木は男を見据えたまま静かに首を左右に振る。

「仏壇に供えられているのを見つけたんです。でも中は読んでいません。書いてあることは、大体予想がついていたので。」

高木はいったん言葉を区切る。唇をぎゅっと結び歯を食いしげると、涙が零れ落ちてしまわぬように大きく息を吸う。そして次の言葉と一緒に吐き出す。

「恐らく史乃さんがあの日記の存在に気付いてこっそり持ち帰る以前に、あなたはあの日記を読んで知っていたんでしょう？あの事故が偶然ではなく麻緒さんが自らの意思で招いた結末だったということに。そしてその悲しい決断をさせてしまったのが他ならぬあなた自身だということに。だからあなたは絶望したんでしょう？最愛の人を最悪の形で失ってしまったのですから。」

## 第5章 希望の光（後書き）

今回は2話続けての更新です。長くなりますがもう1話お付き合いくださいませ。

## 第5章 悲しい真実

男に返事する間も与えず高木はたたみかけるように話し続けた。そうしなければ気付いてしまったあまりにも悲しい真実に涙が零れてしまうかもしれないと分かっていたから。

「麻緒さんがあのような形で自らの命を絶つことに決めたのは、あなたや史乃さんに余計な悲しみを味わわせたくないという彼女なりの優しさだったんでしょう。事故で亡くなるのと自殺で亡くなるのでは心象が随分違いますからね。特にあなたには真相を知られたくなかった。あなたに真実を知られてしまったら、あなたを一生苦しめる事になってしまいますから。」

男は遠い目をして高木が話すのを聞いていた。さながら懐かしい音楽でも聴いているかのように。

「あなたが麻緒さんを誰よりも愛していたように、麻緒さんも愛していたんですよ。あなたのことを。誰よりもね。」

男の瞳から大粒の滴が何の前触れもなく一粒零れ落ちた。それは頬を伝い、ぼたりと床に小さな染みを作った。

「麻緒さんが自ら死を選んだ経緯は僕には分かりません。ただ、麻緒さんはあなたを愛する余り間違った選択をしてしまったんだと思います。それを知ってしまったあなたは自分を責めた。そして考えたんです。あなた達のことを思っであのような死を選んだ麻緒さんの気持ちが無駄にしない為にも彼女の死の真相は誰にも知られてはならないと。」

男は静かに瞼を閉じる。覚めない夢の続きを見ているかのような表情で。

「そんなあなたの思いとは裏腹に史乃さんはあの日記の存在に気付き、麻緒さんの死が自殺であったことを知った。そして昨日あなたを呼び出してこう切り出したんでしょう？娘の死は事故ではなく自殺だった。このことを警察に伝えなければと。史乃さんに呼び出さ

れた時点であなは史乃さんが眞実を知ってしまった事に気付いていた。だからあなたは阻止しようとしたんです。麻緒さんの想いを守るため、そして、認めたくない現実を葬り去るために。」  
周囲はしんと静まり返り、高木の声だけが響いた。神崎だけでなく、佐藤も、周りの刑事達でさえもただ黙ってその場に立ち尽くしている。

悲しい眞実。

それを突き付ける高木の言葉に誰もが胸を引き裂かれる思いだった。高木は強く拳を握り締める。それは自分でも分かるくらい酷く震えていた。呼吸することさえ苦しいくらい張り詰めた空気の中で、高木は必死に声を搾り出す。

「違いますか？神崎さん。」

高木の問いに男は弱々しく首を振り、譫言のようにぼつりと呟く。

「麻緒は、俺が殺したんだ。」

高木の言葉を認めたくないと言わんばかりに男は繰り返す。

麻緒は自殺したんじゃない。俺が殺したんだ。と。

力無く繰り返されるその言葉は冷たいコンクリート壁に虚しく響いた。その場にいた誰もが皆やるせない思いでその言葉を聞いていた。「神崎さん。麻緒さんはこれ以上あなたが傷つく事を望んではいませんよ？」

高木がそつと呟く。

男ははつと顔を上げ、高木を視界に捉えると力無くその場に座り込んだ。

「お人よしだな。」

寂しげな笑みを浮かべて男は呟く。

「あんたに最後のヒントをやるよ。昔は賑やかだったけど、今は寂しい場所。そこにお義母さんはいるよ。」

男の肩は微かに震えていた。高木にはそのヒントが受け入れがたい事実と必死に戦い続けてきたこの男が築き上げた最後の砦なのだと考えた。

## 第5章 悲しい真実（後書き）

長かった第5章も無事終わりを迎えました。この章は特に高木君の語りが多くてちよつと分かりにくかったかもしれないです。すみません。次章では再び佐藤さん目線での展開です。よろしければもう少しお付き合いいただけると嬉しいです。

## 第6章 戸惑い

どれくらいの時が流れたのだろう。恐らくそれはほんの短い時間。佐藤は先ほど高木の口から語られた言葉の意味が飲み込めないまま、じつと刑事と被疑者の対峙の構図を見つめていた。

神崎が麻緒さんの自殺を知っていた？彼が麻緒さんを殺した犯人じゃないか？

予想もしていなかった事実を突然目の前に突き付けられて佐藤は戸惑った。どくんどくと脈打つ心臓の音が異常に早くなり、呼吸をする事ですらままならない。意識がふっと遠退き、目の前にあるはずの光景さえも滲んでいく。信じられないという思いと信じたいという思い。それらが胸の中で交錯して佐藤を混乱させた。

俺が麻緒を殺した犯人だからだよ。

神崎は佐藤にそう告白した。しかし、高木の言う事が真実なら、あの言葉は嘘だった事になる。

確かに神崎の口から麻緒殺害という衝撃の告白を聞いた時、奇妙な違和感を感じたのは事実だ。

完全犯罪を画策し、綿密に計算された完璧な犯行だと神崎は豪語していた。立証不可能な殺人だとも。しかし、佐藤には腑に落ちない点があちらこちらにあった。強い殺意を抱いていたにも関わらず何故麻緒に死を回避するチャンスを与えたのか。もし殺害に失敗していたらどうするつもりだったのか。疑問に思う部分は山ほどあった。それでも、それは狂気に満ちた犯罪者特有の非常識な理屈なのだと自らを納得させた。いや、納得させることができた。

ところが、高木が語った真相はその告白を根底から覆す物だった。麻緒の死は事故でも殺人でもなく自殺だったと言っただ。しかも、神崎篤はその事実を知っていて、事故の真相を知ってしまった史乃や、それを暴こうとする自分達から彼女の思いを守ろうとしたのだとも。

確かにそう考えれば佐藤が神崎の告白を聞いた時に感じた違和感は何となく払拭される。

麻緒の死が事故に見せかけた自殺であり、その原因の一端が神崎にあったのだとしたら。神崎がまだ彼女を愛していて、その真実を麻緒の日記によって知ってしまったのだとしたら。

神崎があのような言動を取ったとしても不思議ではない。寧ろ自然な事のように思う。

しかし、それでも拭い去れない疑問がしこりとなって残ることもまた事実だった。

神崎が剥き出しにした憎悪。そして佐藤や高木に向けて放った悪意。それらも神崎が作り出した幻だったのだろうか。彼の瞳を蝕んでいたあの暗い影でさえも。

どんなに考えても答えは出ない。

私が見た神崎篤は何者だったの？彼が見せたあの目を背けたくなくなるほどの狂気は偽物だったと言うの？

佐藤は抜け出せない迷路の中を一人さ迷っていた。

## 第6章 戸惑い（後書き）

第6章スタートです。頑張りますのでお付き合いの程よろしくお願いします！

## 第6章 悟られた感情

「高木君、佐藤君。前言撤回だ。君達は今神崎が言った監禁場所の特定を頼む。他の者は変わらず神崎の昨日の足取りを追ってくれ。」捜査中だと言うのに珍しく上の空で立ち尽くしていた佐藤は目暮に名前を呼ばれてびくりと体を跳ねさせる。反射的に

「はい」と返事を返し、自らの声で我に帰る。そんな佐藤を高木が心配そうに見つめていた。

しかし、その高木の視線に全く気が付かないほど佐藤は動揺していた。

先程までの冷静だった自分は跡形も無く消え去り、沸き上がってくる感情にただただ翻弄される。

神崎に長時間拘束されていた事で佐藤が心身に受けたダメージは自らが予想していたよりも遥かに深刻なものだった。

歪んだ感情を何の躊躇も無く投げ付けられ、愛する人の命が自分の目の前で奪われるかもしれない恐怖と闘いながら必死に希望を繋いできたのだ。

冷静でいると言う方が無理な話である。

しかし、自分は刑事なのだ。史乃の命が危険に曝されているこの状況下でそんな甘い事は言っていられない。そう自分を奮い立たせて何とか冷静な自分を取り繕ってきたのだ。だが、高木の口からその仮説を聞いた瞬間、佐藤の心を覆い隠していた仮面は呆気なく剥がれ落ちてしまった。自分の意思とは関係なく。

佐藤は何とか平静を取り戻そうと大きく深呼吸する。肺にひんやりとした空気が流れ込み、微かに痛む。

駄目よ、落ち着かなきゃ。私は刑事なんだから。

周りに悟られないように自分に言い聞かせる。

「あの、目暮警部。」

突然いつもの困ったような笑みを浮かべながら高木が怖ず怖ずと口

を開く。

「何だね、高木君。」

目暮が少し怪訝な顔で高木を見る。高木はドアの向こうを指差すと、遠慮がちに打診する。

「少して構わないんで、あちらの空き部屋を使わせて貰えませんか？ちよつと気になる事があって、どうしても佐藤さんに確認しておきたいんです。」

目暮は高木と佐藤の顔を交互に見比べると、何かを悟ったように力強くこくりと頷く。

「神崎の事だろう？佐藤君にはいろいろと喋っていたみたいだからな。構わんよ。」

「ありがとうございます。」

高木は多くを語らなくとも自分の言いたいことを瞬時に見抜いてしまふ物分かりのいい上司に礼を言つと、佐藤の方へ歩み寄り、奥の部屋へと促す。何が何だか解らないまま高木にそつと背中を押され、佐藤は自らが監禁されていた忌まわしい部屋を後にした。

## 第6章 強がり

促されるまま薄暗い部屋に入ると高木は周囲に人が居ないのを確かめ、静かにドアを閉める。密閉された二人だけの空間は、先程の部屋に比べて遥かに静かで肌寒い。

「どうしたの？高木君。私に聞きたい事って何？」

あくまでも冷静な振りをして佐藤は尋ねる。例え相手が愛する男であろうとここで本音を見せる訳にはいかなかった。気を緩めたら、きっと泣き出してしまふ。佐藤美和子という一人の弱い女に戻ってしまう。刑事として捜査の続行を選択した以上、それだけはなんとしても避けたかった。それは佐藤のささやかな意地でもあり、プライドでもあった。

「・・・・・・」

高木は何も言わない。部屋に電灯が無いせいか、窓から差し込む月明かりにぼんやりと照らされた高木の表情は何とも物悲しく見える。胸に込み上げる切なさ、佐藤の表情を幾分か強張らせた。

「何も無いなら行くわよ。たいした話じゃ無いのならわざわざこんな所でしなくても、車の中でだって出来るでしょう？」

佐藤はわざとつつけんどんに言い放って高木の横を擦り抜け、ノブに手をかける。

「佐藤さん。」

不意に高木が口を開き、佐藤の左手首を掴んだ。掴まれた場所がかあつと熱くなり、鼓動が一気に跳ね上がる。

「何よ？」

冷たく吐き捨てるように佐藤は尋ねる。胸が苦しくて振り返ることも出来ない。振り向いてしまったら。高木の顔を見てしまったら。佐藤が精一杯保ってきたものは全て崩れ去ってしまう。溢れ出す感情に流されてしまふ。史乃の救出が急がれる今、それだけは出来ない。本当はすぐにでもその胸に飛び込んで、子どもみたいにわんわ

ん泣いてしまいたいけれど。

「どうしてですか？」

ぽつりと高木が呟く。

「どうしてそんなに悲しい顔してるんですか？」

高木の言葉が胸に痛い。振り返る自信などもう一欠けらも残っていなかった。

「悲しい顔なんてしてないわよ。見えてもないくせに、なんでそんなこと言えるのよ。」

突き放すように乱暴な言葉を投げ付け、掴まれた手を振りほどこうとぶんぶん振り回す。しかし、高木の大きくて温かい手は決して佐藤を離そうとはしなかった。

「見なくたってわかりますよ、オレには。どうして隠そうとするんですか。」

思わず返事に困る。今の佐藤にはただ黙って俯く事しか出来ない。

「せめてオレには。オレだけには……」

先を続けようとする高木の言葉を遮るように、佐藤は一気にまくし立てた。

「刑事だから。私は刑事だからよ。刑事は己の感情を捜査に持ち込む訳にはいかないわ。それに今、私達には史乃さんの命が懸かっているの。」

泣き出しそうになるのを必死で堪えながら、佐藤は毅然と言い放った。そう。それ以外にどんな理由があると言うのか。佐藤には考えもつかなかった。

## 第6章 落涙

「そうでしょうか。」

高木は動じる事なく静かに呟いた。ぎりぎりの所で保っていた佐藤の心はその一言に大きく揺さぶられる。

「本当にそうなんでしょうか。刑事だって人間なんです。泣きたい時だってあるし、憎悪を抱く時だってある。オレはそれでいいと思うんですよ。」

高木は一旦言葉を区切る。背を向けたままの佐藤にも、高木が真っ直ぐに自分を見つめているのが分かる。さっき高木が顔が見えなくても佐藤の表情が分かったのと同じように。

「僕達は感情があるからこそこの職務を全うすることができません。犯罪を憎む気持ちや人を思いやる気持ちが無ければ刑事なんて務まりませんから。」

高木は一語ずつゆっくり言葉を吐き出す。自分の思いを精一杯の言葉で伝えようとする高木の誠実さが痛いほど伝わってくる。

「確かに公正な捜査をするためには感情を捨てなければならぬ時間もあります。でも、感情を捨ててしまったら解らない真実だってあるんです。」

いつもは温和な高木からは想像もつかないほど熱っぽく力強い言葉。「佐藤さん。僕は刑事としても一人の人間としてもあなたの事を尊敬しています。こんなどうしようもない僕にあなたはいつだって希望を与えてくれる。だから僕もあなたに希望を与えられる存在で在りたいんです。」

高木に掴まれた手が火傷しそうなくらい熱い。

「美和子さん。オレはあなたを支えたいんです。」

空虚な強がりか音をたてて崩れ落ちていく。ノブにかけていた手が力無く滑り落ちるのを確認すると、先程までしっかりと掴んでいた佐藤の左手首を解放し、高木はそっと佐藤の名前を呼ぶ。

「美和子さん。」

優しいその声に佐藤はくるりと振り返る。でも顔を上げる事はできない。高木の顔を見てしまったら、きっと彼を困らせてしまうくらい泣きじゃくってしまうと分かっているから。

「美和子さん？」

垂れた前髪の間から遠慮がちに高木が覗き込む。

黒目がちな佐藤の瞳に心配顔の高木が写り込み、程なくしてゆらゆらと揺れた。

ふわり。

柔らかな温もりが佐藤を包み込む。抱きしめられたことに気付いて、佐藤は高木の胸に顔を埋めた。今にも崩れ落ちそうになるのを必死で堪える。

「いいんですよ。我慢しなくても。」

頭の少し上の方から優しい声が降ってきて、佐藤の心を揺らす。たまらず佐藤は声をあげて泣いた。自分の中にある澱んだ感情を洗い流すかのように、涙がとめどなく頬を伝う。高木はそうつと硝子細工でも扱うかのように優しく佐藤の黒髪を梳く。震える肩を抱いてゆっくり、ゆっくり。

高木が傍に居る。

ただ傍に居てくれる。

たったそれだけの事なのに、佐藤の心は嘘のように凧いでいく。ついさつきまで高木の胸で鳴咽を漏らし子どものように泣きじゃくっていたのに、佐藤の心はすっかり満たされていた。愛する人がくれる温もりの尊さを噛み締めながら、佐藤は体中を強張らせていた緊張を解き、高木に体を預ける。とくんとくんと規則正しく刻む鼓動が耳に心地いい。佐藤は恐る恐る手を伸ばし、高木の背中をぎゅうつと掴む。ここにある温もりを確かめるように。もう二度と離さないように。

## 第6章 微笑み返し

「居ますよ、ここに。」

佐藤の想いに応えるように高木は強く佐藤の体を抱きしめた。

「ずっと。ずっと傍に居て。」

佐藤は震える声を絞り出す。

「何があっても傍に居て。私を離さないって約束して。」

ぐいっと顔を上げて、まだ透明の雫で濡れた瞳で真っ直ぐに高木を射ぬく。

高木はふっと目を細めて笑うと自らの中にある確かな想いを言葉にして紡ぎ出す。

「約束しますよ。オレは死ぬまでずっとあなたの傍に居ます。それがオレの望みですから。」

佐藤は相好を崩し、満足そうに高木の胸に顔を埋めてぶつきらばうに呟く。

「今の言葉、ちゃんと覚えときなさいよ。約束破ったら承知しないんだから。」

あはは、と高木のささやかな苦笑が聞こえた。

安心して静かに瞳を閉じ、ひとまわりもふたまわりも大きくてたくましいその背中をしっかりと抱きしめる。佐藤は幸せな気持ちでぽつりと本音を漏らす。

「もう絶対離さないわよ。死んでも離さないんだから。覚悟しときなさいよ。」

すっぽりと腕の中におさまった佐藤を抱く高木の腕に、ぎゅっと力が籠る。

「大丈夫ですよ。覚悟は出来てます。あなたを愛した日からずっと。」

耳元で囁かれた高木の決意に満ちた言葉が佐藤の心を揺らし、瞳から再び大粒の雫が零れ落ちる。

高木と付き合うようになるまでは、こんな風に無防備に泣くことなんて考えられなかった。例え一人きりの時でも声を上げて泣くことは無かった。辛い時も、苦しい時も、悲しい時も、いつだって唇を噛み締め声を殺して泣いた。強く在らねばと自分に言い聞かせながら。

こういう仕事をしているせいか、自分の感情を押し殺すことには慣れてしまった。ある種の職業病なのかもしれない。いつの間にか痛みに耐える事が強さなのだと思い込んでいた。自分が弱い人間だと証明してしまうような気がして、涙を流す事に嫌悪感を覚えた事すらあった。

そんな凝り固まった佐藤の心に安息を与えてくれたのは他ならぬ高木だった。彼が教えてくれたのだ。ただ耐えるだけでは人は強くない。弱い自分と向き合って、そんな自分を受け入れてこそ初めて強くなれるのだと。そして時にはそんな自分を誰かにさらけ出したっていいのだと。そう、誰だって一人では生きていけないのだから。

高木と付き合うようになって、それまで佐藤の中にあつた価値観は見事に突き崩された。それは佐藤にとって決して不快なものではなく、寧ろ新鮮で興味深いものだった。いつも新しい発見に驚かされたり、感心させられたりする。それでいていつだって佐藤の心に寄り添い、受け止めてくれるのも高木なのだ。

高木とならどんなにささやかな喜びでも、どんなにとてつもない困難でも分かち合っていていけると佐藤は確信していた。

高木と一緒になら。一緒に生きていけるのなら。これ以上幸せな事は他に無い。

どんな時もこの人と一緒に生きていきたい。

強く強く、心から願う。

もし神様がいるのなら。どうか、いつまでもこの人と一緒にいられますように、と。

穏やかな温もりに包まれたまま涙が乾くのを待って、佐藤はぐいっ

と顔を上げる。日だまりのように温かな笑顔で見つめる高木に照れくさそうな笑みを返し、佐藤は心を込めて呟く。

「ありがとう。」

高木は一瞬驚いたような顔をして、直ぐに眩しい程の笑みで小さく頷いた。

## 第6章 微笑み返し（後書き）

ちよつと更新が滞つてましてすみません。ただ今金弘はインフルエ  
ンザにかかつておりまして、大変な事になつてます（涙）できるだ  
け早く更新できるよう頑張りますので、ご容赦くださいませ。

## 第6章 一枚上手

まだ少し熱を帯びた目元を指先でなぞり涙が乾いたのを確認すると、佐藤はもう一度高木に笑顔を見せる。

数秒の空白の後、安心したように高木の腕がゆっくりと解け佐藤を解放した。

ついさっきまで目の前に立ち込めていた靄は嘘のように晴れ、すっきりとした気持ちで佐藤は前を見る。両手で軽く頬を叩いて気合いを入れると、先程までとは全く違う凛々しい顔でぽつりと呟く。

「本当の正念場はこれからね。」

高木が真面目な顔で静かに頷く。

「何が何でも探し出してやるっじゃない。史乃さんの居場所。」

佐藤は強い眼差しで高木を見据え意気込む。

そんな佐藤に高木はやや苦笑を漏らすと、

「やっぱり佐藤さんはそれくらい勝ち気な方が似合ってますよ。」  
などと軽口を叩く。

「何よそれ。さっきまでと言ってる事が違うんじゃない？弱気な私は私らしくないっていうの？」

佐藤がむっとして口を尖らせると、高木はあたふたと両手を顔の前で振り、引き攥った笑みを浮かべる。

「いや、あの、そういう事じゃなくてですね。」

慌てる高木に怖い眼をした佐藤が掴みかからんばかりの勢いですいっと詰め寄る。

「じゃあどうということよ。ちゃんと納得がいくように説明してもらおうじゃないの。」

蛇に睨まれた蛙のように、高木は直立不動のままではりぱりと頭を掻きながら苦笑交じりに言葉を捻り出す。

「ええと、その、佐藤美和子警部補の部下であり後輩である僕としては、ですね。僕をぐいぐい引っ張って行ってくれる勝ち気で無鉄

砲な佐藤さんが一番しつくりくるかなあ、と。」

「はあ？高木くん、一体何が言いたいわけ？」

佐藤は胡散臭そうな顔で高木の顔を見つめながら、その言葉の真意を測りかねて首を捻る。

そんな佐藤の様子にますます苦笑しながら高木は先を続ける。

「ただ。」

一旦言葉を区切った高木に引き込まれるように佐藤は問い返す。

「ただ、何よ？」

高木は先ほどのまでの苦笑いを引つ込め、少年のように無邪気な笑顔を覗かせる。その笑顔に佐藤の鼓動がどきりと跳ね上がる。

「ただ、高木渉という一人の男の立場から言わせて貰えば、ですが。」

「

気を持たせるように言葉を区切って話す高木に少しむっとしながらも、どこかで何かを期待している自分が居る。まるで好奇心旺盛な子どもが手品を見ている時のように。いつの間にかそのマジシャンの手の内にはまってしまっている事に気付かないまま、佐藤は無意識に身を乗り出して次の言葉を待つ。

高木は瞳の中にそのとびきりの笑顔を残したまま、少し真剣な顔をして佐藤が待ち望んでいる最後の言葉を切り出した。

「勝気だろうが、弱気だろうが。佐藤美和子という女性の存在そのものがオレを動かす原動力になってる訳なんですけど。」

高木の顔を上げしげと見つめていた佐藤はますます首を捻る。

けれど、高木が最後に口にした言葉の意味を悟った瞬間、ぼつと音を立てて頬が赤く染まった。いや、耳まで真っ赤になっているに違いなかった。月明かりしかないこの部屋では佐藤のそんな変化までは高木に分からなかっただろうが。

「なっ。」

何柄にもなく気障な事言っただけだよ、と言いかけて、佐藤は思わず言葉に詰まる。

「説明になってませんね。すみません。」

高木がいつもの気が抜けてしまっくらい愛想のいい笑みを浮かべて佐藤を見ていた。

やっぱりなんだかんだ言っただけの方が一枚上手なのよね。

佐藤の胸の中で負けず嫌いの虫が疼く。

「どっちにしても高木くんには私が必要だって事でしょ。」

してやったりといわんばかりの顔でさらりと佐藤は言う。

高木はそんな佐藤に溢れんばかりの笑顔で答えた。

## 第6章 一枚上手（後書き）

最後の方、ちょっと解りにくかったですね。大丈夫でしょうか？特に高木君の最後の台詞が・・・総括すると佐藤さんの最後の台詞に集約されるわけですが。さて、次話で第6章も最終話を迎えます。お楽しみに！

## 第6章 寂莫の業火1

「ところで、ねえ、高木くん。」

佐藤は少し真剣な面持ちで、笑顔を向ける高木に向かって切り出す。

「さっき神崎に言った話、本当なの？」

高木の顔からさっと笑みが消え、真面目な顔がこくりと頷く。

「ええ。彼は否定していましたが、多分間違い無いと思います。」

高木はきっぱりと肯定した。

「どうしてそう言えるの？確かにそう考えた方がしっくりくる事はたくさんあるわ。でも。」

佐藤が矢継ぎ早に口にする疑問を遮るように、高木は落ち着いた口調で答える。

「きっかけは麻緒さんの日記でした。あれを史乃さんの家で発見した時ふと思ったんです。この日記帳には何が書いてあるのか。そして今までどこに存在していたのかってね。」

高木は自分の考えをまとめるように、ゆっくりと丁寧話す。佐藤は黙ってそれを聞いていた。

「麻緒さんの離婚話の件で史乃さんの家を訪ねた時の様子から考えて、史乃さんが以前からその存在を知っていたようには思えない。日記には少なくとも亡くなる数日前までの麻緒さんの心情が綴られていたでしょうからね。」

佐藤は以前史乃の家を訪ねた時の事を思い出す。あの時史乃は佐藤達の質問に涙を浮かべてこう答えた。

あの子がそんな事を？私には仲のいい夫婦にしか見えなかったのにと。

その様子は確かに嘘をついているようには見えなかった。

「それなら必然的にあの日記は麻緒さんの家に在ったって事になりますよね。夫婦なら妻が日記をつけていた事を知っていてもおかしくはない。つまり、神崎もあの日記の存在を知っていたんじゃない

かと考えたんです。もちろんその中身もね。」

淡々と高木は続ける。佐藤は小さく頷いた。

「もし神崎が何らかの方法で麻緒さんを殺害したのだとしたら、自分の不利になるような証拠品は全て処分しているはずです。あの日記帳には恐らく神崎との離婚問題についても書かれていたでしょうから、間違い無く神崎にとっては百害あって一利なしの代物です。それなのに、何故彼はそれを処分せず大切に取っておいたのか？」

佐藤にも何となく高木の言いたい事が理解出来た。

「次に疑問を感じたのは、神崎が此処に停めていた車の助手席に、無くなった筈の麻緒さんのピアスが落ちていた事です。そんな物が見つかったら、ピアスの行方に疑問を持って事故の事を調べていた僕たちに追求されるのは必至です。それなのに神崎はそれを処分するどころかずっと身につけていたようにさえ見受けられたんですよ。」

「

それは佐藤にとって非常に興味深い話だった。たいてい犯罪者の心理とは常識を逸することの多いものだが、高木の話の聞いていると神崎という男の心理はもつと単純明快なものであるように思えてくる。佐藤はいつの間にか高木の話に聞き入っていた。

## 第6章 寂莫の業火1（後書き）

前回の後書きにて、次話が第6章の最終話ですと予告しましたが、あまりにも長くなってしまったため、2話に分けることにしました。すみません。というわけで、もう1話連続更新です。長くなりますがお付き合いくださいませ。

## 第6章 寂莫の業火2

「そして、最後に僕がこの仮説に行き着いたのは、佐藤さん。あなたが僕に教えてくれたからですよ。」

突然自分の名前を呼ばれて佐藤は驚く。

「え？私・・・？」

自らを指差す佐藤に高木は小さく頷く。

「さつき僕は自分があなたを想ってしまったことが、逆にあなたに辛い選択をさせてしまった事に気付いて驚愕したんです。でもあなたは僕に言ってくれましたよね。私もあなたを守りたいって。あの言葉を聞いて思っただんですよ。神崎と麻緒さんも同じだったんじゃないかって。」

神崎と麻緒も同じ？

佐藤は少し首を捻り、そして、ああ成る程と納得する。

「神崎は麻緒さんを愛していた。そして愛する余り彼女を傷付けた。その事が麻緒さんに悲しい選択をさせてしまったんじゃないか。そして麻緒さんもまた神崎を愛していて、そのために悲しい結末を選択した。でもその事を神崎には知られたくなかった。自分が選んだ悲しい事実から神崎篤という愛する人を守る為に。高木くんが言いたいのはつまりそういう事でしょ？」

高木は佐藤の問い掛けに静かに頷いた。

「そう考えたら自然と全てが納得できたんです。そうして出てきた答えが・・・」

あの仮説だったのね。と佐藤はやるせない気持ちで溜め息をつく。

「でも、それでも納得出来ない事があるの。」

佐藤は先ほど自分では見つけられなかった答えを求めて高木に問う。

「神崎の中に在ったあの悪意は何だったの？私が見た憎悪は一体・・・」

高木は少し悲しそうな顔を見ると、ぼつりとその答えを吐き出した。

「あれは恐らく自分自身に向けられたものだったんですよ。」

自分自身に向けられた？神崎自身に？

佐藤は啞然とした。

高木は佐藤から視線を外すと俯きがちに、苦しそうに言葉を絞り出す。

「神崎は僕たちに自分と麻緒さんの姿を重ねていたんだと思います。奇しくも互いを想い合う男女という点はぴったり同じでしたから。」

高木の発した『互いを想い合う男女』という言葉が妙に切ない。佐藤はきゅつと瞳を閉じた。

自分から愛する人を奪った自分。そしてもう戻らない最愛の人。それらへの想いをあの男は自分達に重ねたのか。

だとしたら、佐藤があの瞳の中に見たあの憎悪は神崎自身を焼き尽くす業火。あの男は自らの憎悪の炎に焼かれながら、朽ちていくのを待っていたというのか。

佐藤は神崎が見せた悲しい憎悪を思い出す。それは果てしなく広がり絶える事は無かった。あの憎悪は決して許す事の出来ない己への……

佐藤の胸の中に寂莫の想いが込み上げる。堪え切れず佐藤の瞳から涙が零れ落ちた。それに気付いて高木がやるせない顔でそっとその肩を抱く。

自分達にあの男を救う事ができるだろうか。

佐藤は自問する。

いや、救わなければならない。今まで一人でその苦しみに耐えてきたあの男を。せめて自らが放つ憎しみの炎だけでも消さなければならない。一刻も早く。あの男の罪がこれ以上重くなる前に。

佐藤は涙に濡れた瞳に強い光を宿して高木を見上げる。

高木は言葉無く静かに頷いた。

佐藤にはその瞳が微かな月明かりに照らされ濡れているように見えた。



## 第6章 寂莫の業火2（後書き）

やっと第6章が終わりました。予告通り1話で終われずホントにすみませんでした。でも、この話はここでどうしても書いておきたかったんですよ。第5章終盤の高木君の語りを補足する意味でも、第7章に繋げる為にも必要なお話なので。さて、いよいよ次話から第7章に突入です。次話も佐藤さん視点で展開していきます。お楽しみに！

## 第7章 あなたでよかった（前書き）

第6章の寂莫の業火1・2の最後の部分を少し訂正しました。

## 第7章 あなたでよかった

先程まで佐藤が監禁されていた部屋では目暮と数人の刑事達が何やら会話を交わしていた。

「警部。」

佐藤が声をかけると、目暮は首を捻り、

「ああ、終わったかね。」

と穏やかな表情で問い掛ける。

「ええ。私達はこれから神崎のヒントに合致しそうなところを当たってみるつもりです。」

佐藤が淀みなく答えると、目暮は表情を引き締めて佐藤の肩を叩く。  
「あんなことがあったばかりだというのにすまんが、神崎や史乃さんの事は恐らく君や高木君の方が良く解っているだろうからな。頼んだぞ。」

「大丈夫です、警部。私達が必ず史乃さんを見つけ出します。」

佐藤は自分を信頼してくれる上司の言葉に力強く頷いた。

「その言葉、君を探していた時の高木の言葉とそっくり同じだな。」

目暮が微かに苦笑を漏らす。

「え？」

佐藤の短い問い掛けに、いや何でもないと小さく首を左右に振ると、目暮は思い出したようにポケットを探る。

「こいつを預かっていたのを忘れるところだったな。神崎が君に返しておいてくれと言ってたぞ。」

そう言つて目暮が差し出したその手の中には見覚えのあるものが握られていた。佐藤が気を失っている間に神崎に奪われた筈のそれ。不安に押し潰されそうになっていた佐藤に愛しい恋人の想いを届けてくれたそれ。当分自分の元には戻ってこないだろうと諦めていたそれが、そこにあった。

「こんな事件を起こした被疑者を庇うつつもりは無いんだが、神崎篤

という男は我々が思い描いているような凶悪な男とは少々違うのかもしれない。」

目暮は手の中のそれを見つめながらふっと苦笑にも似た笑みを漏らすと、佐藤にそれを手渡す。

「そうですね。私もそんな気がします。」

手渡された携帯電話を見つめながら、佐藤は上司の言葉に同調した。思わず小さく苦笑してそれを胸ポケットにしまう。

「わしも一通り片が付いたら杯戸署の捜査本部へ移ってそちらから指揮を取る。もし何か解ったら直ちに連絡してくれ。」

目暮の言葉に力強く返事を返すと二人は部屋を後にした。

高木の後について階段を駆け降り出口へと向かいながら、佐藤は自分が監禁されていた工場の広さと暗さに気付く。高木がこんな暗闇の中をライトも点けずに手探りで自分を探してくれたのだと思うと佐藤の胸はじんと熱くなった。少し前を走る背中がとてつもなく大きく見えて、くすぐったい気持ちになる。

通用口を抜け表に出たところで前に行く高木に追いつき、佐藤は思い切って尋ねてみる。

「ねえ高木くん。よくこんな真っ暗で何も見えない広い工場の中をライトも点けずに探し回ったわね。」

すると高木は少し苦笑を浮かべながらさらりと答える。

「あの時は無我夢中でしたから。」

照れ臭そうに笑う高木がいじらしくて佐藤は思わずその手をとる。

高木が驚いたように目を見開き、佐藤を見つめる。佐藤はとびきりの笑顔でぼつりと呟いた。

「高木くんではよかった。」

高木は怪訝な顔で首を捻る。

「高木くんを好きになつてよかったって言ったのよ。」

佐藤は躊躇なく本音を吐き出した。高木の顔がみるみる綻んでいくのを佐藤は幸せな気持ちで見つめていた。

## 第7章 あなたでよかった（後書き）

しばらく更新止まってましてすみません。いよいよ第7章です。物語は終焉に近づいてきました。佐藤さんと高木君は史乃さんの監禁場所を特定する事が出来るのでしょうか？

## 第7章 疑問

「高木くん、今から史乃さんの家に行ってみない？もしかしたら何か手懸かりが掴めるかもしれないわ。」

高木の車の助手席に乗り込むなり佐藤は先程から頭の中に巡らせていた考えを提案した。

「本当なら神崎の家を調べたいところだけど、家搜の許可が下りるまで待たなきゃいけないし。それまでに少しでも調べられるところは調べておきたいの。史乃さんの家、鍵はかかって無かったんでしょ？」

佐藤は真剣な顔で高木に問う。今は一分一秒でも無駄にしくは無かった。

「そうですね。解りました。」

高木は精悍な顔で頷きエンジンをかけるとスムーズに車を発進させた。

「佐藤さん、寒くないですか？」

車が駐車場を出る直前、突然高木が車を止め、少し心配そうな顔で振り返り尋ねる。その問いかけに、佐藤は高木らしいなと思わずふつと笑みを漏らす。

「大丈夫よ。ありがと。」

佐藤が答えると、高木は小さく笑みを浮かべて、

「なら良いですけど。もし寒かったら遠慮無く言って下さいね。エアコンが効くまで少し時間がかかりますから。」

と気遣いをみせる。

「それくらい我慢できるわよ。」

佐藤が苦笑すると、高木はおもむろに自分のコートを脱ぎ佐藤に差し出した。

「足元、冷えるでしょう？あの工場の中かなり寒かったし、佐藤さん、スカートだから。」

照れ臭そうに笑う高木からコートを受け取り、佐藤は馬鹿ねと笑う。  
「これくらいで寒がつてたら刑事なんて務まらないでしょ？」

そう言いながらも高木の気遣いが嬉しくて、無意識のうちに笑みが零れる。

「すみません。僕の自己満足なんです。」

そう言つて困つたように笑うと、高木は再び表情を引き締めアクセルを踏み込んだ。

高木の温もりが残る上着を膝にかけながら、佐藤は前を見据える高木の横顔に向かつて真面目な顔でぽつりと呟く。

「高木くん。神崎のヒントの意味、解る？」

佐藤の問いに、高木は前方を見つめたまま微かな溜め息を漏らすと小さく首を左右に振る。

「残念ながらさっぱりです。でも、第一のヒントほど複雑なものは無いでしょうね。」

そういえば、と佐藤は不思議そうに尋ねる。

「第一のヒントの答えがあそこだつてどうして解つたの？」

高木がどうやって第一のヒントを解読したのか。それはずっと気になつていた疑問だつた。そして、もしかしたらそこに第二のヒントを解読する手懸かりが隠されているかもしれないという期待も少なからずあつた。

怖いくらい真剣な目で尋ねる佐藤をちらりと横目で一瞥すると、高木は苦笑にも似た笑みを浮かべ、

「ああ、それはですね・・・」

と指先で頬を掻きながら説明し始める。佐藤は身を乗り出すようにしてその話に聞き入つた。

## 第7章 疑問（後書き）

更新が遅くなつてすみません。いよいよ高佐揃つて捜査開始です！

## 第7章 第六感（前書き）

しばらく更新ストップしてまして申し訳ありません。

## 第7章 第六感

高木の解説は佐藤にとって実に興味深いものだった。

実は神崎に監禁されている間、佐藤もずっとそのヒントの答えを考え続けていたのだ。

もし佐藤が高木より先にヒントを解読できれば、次に神崎が高木に電話をかけた際、こっそりその答えを伝える事が出来るかもしれないと考えたからだ。しかし、どんなに頭を捻って考えてみてもちつともその答えは解らなかった。あの難解な暗号が何故高木には解けたのか。その答えに佐藤はただただ驚嘆するばかりだった。

「へえ、なるほど。英語に変換して、日本語の単語の音に置き換えるくらいならまだ解らんでも無いけど、そこから先は連想ゲームみたいな物ね。よっぽど発想力が豊かでないと解けない暗号だわ。」  
一通り高木の解説を聞き終えると、顎に手をあてて佐藤が唸る。

「杯戸町の工場、か。あんなヒントでよくそこまで解ったわね。」

佐藤が驚愕の表情を浮かべて高木の横顔を見上げると、高木は唇の端に苦笑を浮かべて謙遜する。

「今となってみれば僕もよく解ったなあと思いますよ。ああいったモノは事件の捜査と同じで考えられる限りの可能性をひとつずつ検証して潰していくしかないですから。ただ、あの手のものを解読するには第六感とでも言うんですかね？そういう閃きみたいなものにより求められるのかもしれませんが。僕もあの時は必死でしたから、単に第六感が冴えていただけなのかもしれませんね。」

「第六感……」

佐藤は高木が発した言葉をなぞるように呟く。

第六感。それは人間に備わっているという不思議な感覚。勘だとか閃きだとか、そういった類のものを総称して使われたりする。

高木は謙遜して言うが、研ぎ澄まされた刑事の勘が、高木をヒントの解読へと導いたという事か。ついこの間まで自分の後を追いかける

て来ていた後輩の高木が、いつの間にかこんなにも成長していた事に驚くと同時にちよっぴり悔しいような嬉しいようなほろ苦い気持ちに胸に込み上げる。

「高木くん、いい刑事になったわね。」

ぼつりと佐藤が微笑を浮かべて呟く。それは心の何処かですっと抱き続けていた予感。いつかは追い越されてしまうのではないかという焦りと不安から、認めたくないとい今まで見て見ぬふりをしてきた感情。だが、今は素直に認められる。この人はもう立派な刑事なのだ。

「そ、そんなつ。僕なんてまだまだ半人前で、佐藤さんの足元にも及びませんっ。」

高木は大袈裟なくらいぶんぶん首を振って答える。

「僕、いつも失敗して佐藤さんにフォローして貰ってますし、拳銃の腕も逮捕術も車の運転だって佐藤さんの方が僕なんかよりずっと上手いし。」

それに、と高木は続ける。

「佐藤さんの刑事としての姿勢っていうか、在り方っていうか。それは絶対揺らぐ事なんかなくて。僕なんかには到底真似できないですから。」

照れ臭いのか真っ直ぐ正面を見据えたまま、佐藤さんの事、尊敬してますよ。と高木は真剣な眼差しで言う。

佐藤は思わず言葉に詰まる。凄く嬉しくて、でもなんだか気恥ずかしくて、俯きがちに喉の奥からなんとか言葉を絞り出した。

「ありがとう。」

高木はちらりと佐藤を見遣るといつもの穏やかな笑みを浮かべる。

「いえ、僕の方こそありがとうございます。」

高木が答えるのとはほぼ同じくして、車はパーキングへと滑り込んだ。

## 第7章 第六感（後書き）

しばらくの間更新をストップしてまして申し訳ありません。ちよつと浮気心が芽生えてしまい、2本ほど高佐の短編を書いていた事もあり、更新が遅れてしまいました。続きを楽しみにして下さっている方、本当に申し訳ありません。こんないい加減な作者ですがお付き合いいただけると有り難いです。よろしくお願いします。

## 第7章 消えた靴

先日佐藤が乗って来た赤い車は主の帰りをひっそりと待っていた。高木はその隣のスペースにぴたりと車をつける。

「あれからもう一日経つのね。」

佐藤はぽつりと呟いた。

此処に来た時はまさかこんな事になるなんて予想もしていなかった。史乃や自分が拉致され監禁される事になるなんて、ちっとも考えやなかった。あの時はただ、仲田が起訴される前に一言、史乃に謝っておきたくて。そう、恐らく傷付けてしまったであろう彼女に。ただそれだけの事だった。それなのに。

佐藤は車を降りると微かな苦笑を浮かべて月明かりにぼんやりと光るそれに向かって呟いた。

「ただいま。」

それだけを口にする、感傷に浸る間も惜しくて佐藤は高木を促し神崎邸へと急ぐ。念のためインターホンを鳴らしてみるが、当然の如く誰も応答することはなかった。昨日佐藤が此処に来た時と同じように。

門扉を抜けて扉の前に立つと、佐藤はちらりと高木の顔を見る。高木が小さく頷くのを確認して、佐藤は引き戸に手を掛けた。からからと乾いた音を立てて扉が開く。

中を覗き込むと、薄暗いそこには昨日と同じ光景が広がっていた。下駄箱の上に活けられた花も昨日佐藤が訪れた時のままだ。しかし、心なしか元気が無いようにも見える。この花も主の帰りを静かに待ち侘びているという事か。佐藤はぐりと辺りを見回した。そしてある一点で視線を止める。昨日と唯一違う所。玄関に出ていた筈の史乃の靴が消えていた。

「靴が、無くなってる……」

ぽつりと佐藤が呟く。高木が怪訝な顔で佐藤の背後から玄関を覗き

込む。

「史乃さんの靴が無くなってるのよ。私が来た時は確かに此处にあった筈なのに。」

そう言いながら佐藤は引き戸をくぐり、がらりと下駄箱の扉を開け中を確認する。

「やつぱり無いわ。無くなってる。」

ぼそりと呟く佐藤の背後で高木が顎に手をあて上目使いに記憶を辿る。

「そういえば、僕がここに来た時には靴なんて出ていませんでしたよ。」

佐藤は静かに下駄箱の扉を閉めると腕を組み考える。

「それなら神崎が持ち去ったって考えるのが最も自然よね。意識を失って倒れていた史乃さんが自ら靴を履いて出て行くとは考えにくいもの。」

佐藤が独り言のように呟く。

「そうですね。それにしても何故神崎は史乃さんの靴を持ち去ったんでしょうか？」

高木が不思議そうに首を捻る。

「史乃さんのだけじゃないわ。」

今度ははつきりと佐藤が答える。

「史乃さんの靴だけじゃなくて、私の靴もよ。」

佐藤は自らの足元に視線を落とす。

佐藤の足には当然のように履き馴れたローヒールのパンプス。しかしそれは昨日この家を訪れた時、異変を感じた佐藤が玄関に脱ぎ捨てたはずの物だ。和室で襲われ意識を失った佐藤には、再びその靴を履いている時間など無かった。それなのに佐藤がああ廃工場で目を覚ました時、佐藤は既にこの靴を履いていた。それはつまり、佐藤を拉致した犯人、神崎篤が玄関に脱いであった佐藤の靴を持ち出し、佐藤に履かせたという事だ。神崎は一体何の為に靴を？

「まあ私の靴を持ち去った理由はだいたい検討がつくけど、史乃さ

んの靴を持ち去った理由が良く解らないのよね。」  
佐藤は小さく首を捻った。

## 第7章 消えた靴（後書き）

佐藤さん、本格始動です！これから佐藤さんの推理が展開していきます。お楽しみに！

## 第7章 記憶

「確かにそうですね。佐藤さんの靴を持ち去ったのは恐らく佐藤さんが此処に來た痕跡を残さない為なんでしょうけど、史乃さんの靴まで持ち去る必要は無いですよ。この家は史乃さんの家なんだし。」

高木も首を捻る。

「それをわざわざ持ち去ったということは、持ち去らなければならぬ何らかの理由があつたって事よね。」

佐藤が真剣な表情で呟いた。何なんだろう。この違和感は。胸の中でざわめくこそばゆいような感覚は。佐藤は何度も自問自答する。

「靴を残しておくとか何かの証拠になつてしまふとか？」

高木がぼつりと思ひ付いたようにを呟く。

「あるいはその靴が神崎にとって必要な物だったか、ね。」

いくら考えてみても答えは出ない。

佐藤は氣を取り直して高木を振り返る。

「高木くん。中也調べてみましょうか。他にも何か手懸かりがあるかもしれないわ。」

高木がこくりと頷くの待って佐藤は靴を脱ぐ。今度はきちんと揃えて玄関の隅に置く。その後高木が続いた。

一番手前にある和室の襖を開け電氣を点けると、昨日見た光景がフラッシュバックする。

「確か此処に史乃さんが倒れてたんだわ。」

佐藤が呟き自らが拳銃を隠した座布団の辺りを指差し高木を振り仰ぐ。

「不自然に襖が開いてたから覗いてみたら史乃さんが倒れてて。それで慌てて駆け寄って、抱き起こして。」

佐藤はその場所にひざまづく。あの時は完全に油断していた。史乃の安否を確認しなければという思いが先にたつて、背後から近付い

てくる人影に気付くのが遅れた。もう少し早くその事に気付いていたら、こんな事にはならなかった筈なのに。佐藤は思わず唇を噛む。  
「私のミスだわ。」

俯きがちにぼつりと呟く。

「気付いた時にはもう手遅れだったもの。振り向きざまに撲られて、気を失ってしまった。」

自分のふがいなさが齒痒くて、悔しい。あと一秒、いや一瞬、気が付くのが早ければ。史乃も自分も神崎に拉致される事は無かったかもしれないのに。

「佐藤さん……」

高木の声が僅かに揺れた。

「泣いてなんかいいわよ。」

その声に振り向く事なく佐藤は答える。一点を睨みつけたまま不機嫌な顔で佐藤は続ける。

「泣いたって史乃さんが見つかる訳じゃないし。」  
それに。

佐藤は心の中で呟く。

もう迷いはないもの。あなたが死ぬまで私の傍に居てくれるって約束してくれたから。

佐藤は微かに表情を緩めるとおもむろに立ち上がる。高木を振り返り小さく笑う。

「佐藤さん。」

高木がほつとしたような声で佐藤を呼び、唇の端に安堵の笑みをうかべる。それを確認して、佐藤は麻緒の日記帳が供えられていたという仏壇の前へと歩を進めた。

## 第7章 記憶（後書き）

神崎邸に残された手懸かりと佐藤さんの記憶が二人を神崎のヒント解読に導いていきます。昔は賑やかだったけれど今は寂しい場所と一体どこに在るのでしょうか？

## 第7章 接点

供えられたお菓子や果物に埋もれるようにひっそりとその日記帳は置かれていた。そつと手に取って、しげしげとその表紙を見つめる。佐藤は静かに深く息を吐いた。中を見るべきかどうか、迷う。

神崎篤が最も愛した麻緒の綴ったこの日記帳の存在が今回の事件の根幹に在ると言うのなら、この中に神崎がよこした最後のヒントを解く鍵が隠されているのでは無いかという予感が佐藤にはあった。意を決したように表情を引き締め、佐藤はぎこちない手つきでその表紙をめくる。

はらり。

表紙をめくったのと同時に何かが舞い落ちた。

畳の上に落ちたそれを佐藤は指先でそつと拾い上げる。それは角の丸くなった1枚の写真。写っているのはまだあどけない制服姿の少年と少女。二人は微妙な距離を保ちながら仲良く写真に収まっている。はにかむ二人の姿がほほえましくて、自然と頬が緩む。何気なく裏返してみると、そこにはまだ幼さの残る『篤くん』の文字。そして小さなハートマーク。

「これ……」

佐藤は小さく息を飲む。いつの間にか隣に立っていた高木が怪訝な顔で佐藤の手元を覗き込む。

「篤くんと……ってまさか？」

高木が呆然と呟き佐藤を見る。目が合つて、佐藤は小さく頷いた。もう一度写真に写った初々しい二人の姿を確認する。緩く癖のある黒髪をふたつに束ね、嬉しそうに微笑む少女。その隣で切れ長の目に照れ臭そうな笑みを浮かべて佇む少年。

「神崎……この少年、神崎篤に間違いありませんね。目元に面影がありますし。それにほら、この子が付けてる名札。」

眉間に皺を寄せ、じつと写真を見つめていた高木が少年の左胸を指

差して佐藤に示す。

「神崎篤の旧姓は確か中川でしたよね？」

写真の中で微笑む少年の胸に付けられた名札からは、辛うじて中川という文字が見てとれる。

「ええ、そうよ。神崎は両親の反対を押し切って神崎家に婿入りしたそうだから。」

佐藤は顎に手をあて伏し目がちに答える。

「で、こっちの少女は麻緒さんね。名札に麻という字が見えるし。」  
ほっそりとした白い指で佐藤が少女の名札を示すと高木が怪訝な顔で首を傾げた。

「この写真に写っているのが本当に神崎と麻緒さんなら、二人は幼い頃から面識が合ったって事ですよね。」

同意を求めるように問い掛ける高木に淡々と佐藤は答える。

「そういう事になるわね。大学時代にキャンパスで見かけた麻緒さんに一目惚れした神崎が彼女を口説き落としたんだって彼等を知る人達は言ってたけど。」

佐藤は以前麻緒の事故について調べていた時に得た証言を思い出す。恐らく高木も同じ事を思い出していたのだろう。ぽつりと高木が呟いた。

「二人の最初の出会いは大学ではなかった・・・」

佐藤はこくりと頷き再び写真に視線を落とす。そこには屈託の無い笑顔。佐藤の胸はぎゅっと締め付けられる。

この時彼等は夢にも思わなかっただろう。自分達の未来に待ち受けるのがこんなにも悲しい結末だったとは。

佐藤は強く唇を噛む。この二人に訪れる皮肉な運命に心が痛んだ。

## 第7章 同じ言葉

佐藤は無言で高木に写真を手渡すと、ぱらぱらとページをめくり始めた。

日記は麻緒が亡くなる3週間前から始まり2日前の日付で終わっている。

やや小さめの整った文字でびっしりと書き込まれた日記帳から麻緒の几帳面で真面目な性格が垣間見える気がした。

感情移入してしまわないように敢えて拾い読み程度にしか目を通していかないにも関わらず、そこには切々と訴えかけてくる麻緒の強い思いが在った。不覚にも佐藤の胸に言いようも無い切なさが入り込んでくる。気を緩めると瞼の奥から熱いものが沸き上がってきた。で、佐藤は思わず視線を上げ、大きく息を吐いた。

「何か、分かりました？」

遠慮がちに高木が尋ねる。ふるふると小さく首を左右に振って、佐藤はぼつりと呟いた。

「麻緒さん、神崎の事を誰よりも愛していたのね。」

そう、この日記には隅々に至るまで神崎篤に対する彼女の愛情が満ち溢れていた。そして、彼を愛する余り苦悩する彼女の姿もありありと。

佐藤は再び視線を落とす。息を殺してひたすら文字を追う。部屋には佐藤が淡々とページをめくる音だけが響いた。高木が隣で静かにその様子を見守る。やがて張り裂けそうな胸の内を綴った日記帳に最後のページが訪れた。

下された決断。そこに綴られた悲しい決意に佐藤はぐつと唇を噛む。そうしなければ込み上げてくる感情に飲み込まれてしまいそうだった。

そうやって読み進めていくうちに、佐藤はページの下の方に幾つもの丸い染みが付いている事に気付く。

・・・涙？

それは麻緒が堪え切れずに流したものだっただろうか。それとも・・・

哀感に満ちた表情で佐藤は滲んだ文字をぼんやりと見つめていた。小さな溜め息がひとつ零れた。再び唇を噛み締め、佐藤は文字を追い始める。しかし、ある一点でその視線がぴたりと止まる。

この言葉、どこかで・・・

佐藤は顎に手をあて眉をしかめた。どこかに眠っている筈の記憶を懸命に探る。聞き覚えのある言葉。どこかで耳にした筈の言葉。独特な響きを持つこの言葉を一体どこで聞いたのだろう。

強く瞳を閉じ、考える。ふと脳裏に今朝の光景が蘇り、佐藤は弾かれたように顔を上げた。それに気付いた高木が不思議そうな顔で問い掛ける。

「どうかしたんですか？」

佐藤は唇の端に確信に満ちた笑みを浮かべて答える。

「見つけたわ。神崎と麻緒さんの接点。やっぱり彼等は出会っていたのよ。幼い時に。ある場所で。」

興奮の余り佐藤は高木の腕を思い切り掴んでいた。その勢いに気圧された高木が呆気にとられた顔で佐藤を見る。

「ほら見て。ここ。」

佐藤は高木の目の前に持っていた日記帳を突き出し、ある文章を指差す。高木はそれを受け取ると佐藤が指差した部分に顔を近付け、一言一句間違えないようゆっくりと声に出して読み上げた。

「もう一度あのふっかけが見たかった。篤と二人で見たあの場所で最後にもしひとつだけ願いが叶うなら、無邪気に笑い合えたあの頃に戻りたい。」

読み終えた高木に佐藤は真剣な顔で問う。

「高木くん、今の文章の中で何か気になる言葉、無かった？」

その問いにすかさず高木が答える。

「ああ、ふっかけ、ですか？」

佐藤はこくりと頷く。

「ふっかけてこの辺じゃ使わない言葉よね。ふっかけるだったら使うけど。」

佐藤は自分の見つけた答えが合っているかを確認するように高木に尋ねる。

「確かにそうですね。この文章を読む限りではふっかけてのが何の事なのかは解りませんが。」

高木は手にした日記帳に視線を落とし、首を捻る。

「それね、多分方言よ。今朝ね、神崎も言ってたの。窓から外を見て独り言みたいに。あれ？ふっかけか？ってね。」

佐藤の言葉に高木がはっと顔を上げる。

「まさかそれって。」

佐藤はこくりと頷く。

「神崎と麻緒さんは同じ方言を使っていた。つまり、彼等は同じ地域で暮らしてたってことよ。東京以外の、ね。」

## 第7章 同じ言葉（後書き）

神崎が呟いた言葉と麻緒が書き残した言葉から、佐藤さんは今まで知り得なかった二人の接点に気付いたようです。これから佐藤さんはどんな推理を展開していくのでしょうか。

## 第7章 連想ゲーム

「確かに神崎と麻緒さんが同じ方言を使っていたのなら、二人が過去に同じ地域で暮らしていた事があったと考える方が自然ですね。それならこの写真に二人が並んで写っているのも頷けますし。」

高木は手にした写真に視線を落とす。微笑ましい二人の姿に一瞬穏やかな微笑を漏らした後で僅かに表情を曇らせると、溜め息と共にぼつりと疑問を吐き出した。

「二人は一体何処で出会ったんでしょうか？」

佐藤は小さく首を振り、嘆息を漏らす。

「さあ。それはまだ解らないわ。でも、このふっかけて言葉が私の予想通り方言だったとしたら、ある程度地域は絞れるでしょうけど。」

麻緒の日記帳に残されていたこの言葉を目にした時、どこかで聞いた事のある言葉だと思った。それは今朝、神崎の口からぼつりと漏れたこの言葉を耳にしていたから。しかし、二人が使っていたこの言葉が何を意味するものなのかは佐藤にも解らなかった。だからこそ、この言葉が方言なのではないかと思ったのだ。ただ、それが何を意味する言葉で、どの地方の方言なのかが判ったところで史乃の監禁場所を特定する材料になるかどうかは分からない。佐藤は再び短い溜め息を吐いた。

二人の間に重苦しい沈黙が訪れる。

それに耐え兼ねた高木が手元の日記帳に視線を落としぱらと捲り始めた。そんな高木をぼんやりと見つめながら、佐藤は考えを巡らせる。今まで知り得なかった神崎と麻緒の接点。それをこのまま追求すべきなのか。それとも一先ず切り捨てるべきなのか。少し迷って。決断を下そうとしたその時、ひたすらページを捲っていた高木の手がぴたりと止まった。

「あの、佐藤さん。」

不意に名前を呼ばれて顔を上げた佐藤に真剣な目をした高木が問いかける。

「もしかしたら神崎が言ってた『昔は賑やかだったけど、今は寂しい場所』って、神崎家の事なんじゃないでしょうか。」

佐藤は予想外の高木の推理に啞然とする。

「いえ、その。さっきの佐藤さんの話を聞いていてふと思ったんです。神崎の最後のヒントは第一のヒントとは明らかに違いますよね。第一のヒントのようにキーワードになりそうな言葉ありませんし、置き換えたり変換したり出来そうな言葉も無い。どちらかと言うと連想ゲーム的な要素が強いような気がします。恐らくこのヒントは複雑な暗号でもなんでもなく、単純に、神崎の記憶の中にある思い出になぞらえて作られたものなんじゃないかと。それならば。」

高木は佐藤の表情を伺いながら、ゆっくりと続ける。

佐藤は真っ直ぐに高木を見据え、黙ってその推理を聞いていた。

「神崎の思い出の中で、昔は賑やかだったけど今は寂しい場所に当てはまるのはどこなのかと考えてみたんです。神崎が麻緒さんと結婚した当初は家庭も上手くいっていた。愛し合って結婚したんですから当然二人の間には沢山の言葉が交わされていたでしょう。でも、自分が社長になって以来、会社は順風満帆に大きくなったものの、神崎と麻緒さんの関係はぎくしゃくして、次第に会話は無くなっていった。神崎が、昔は賑やかだったと言ったのは、彼にとつて最も幸せだった頃の神崎家の事で、今は寂しい場所というのは崩壊してしまつた自分たちの家庭の事なんじゃないかと。」

高木が出した結論を聞き終えたその時。ふいに確信めいた何かが佐藤を貫いた。それは恐らく第六感。そう、佐藤の刑事としての勘だった。

「当たらずとも遠からずって所かもしれないわ。」

佐藤は小さく、しかし、はつきりと呟いた。

「高木くんの推理はきつといい線いってると思うわ。高木くんの言う通り、恐らく神崎はその場所を彼の中にある思い出に重ね合わせ

てあんなヒントを作ったのよ。だけど、もし最後のヒントの答えが神崎の自宅なら彼が史乃さんの靴を持ち去った理由が説明できないと思わない？でも、あの場所なら……」

大きな瞳に凜とした光が宿る。

「何か、判ったんですか。」

高木の問いに、佐藤はゆっくりと頷いた。

「まだ当たってるかどうか自信は無いけど、今の高木くんの推理を聞いて、何となく判ったような気がするの。史乃さんの監禁場所。」

高木の顔に驚きの色が広がる。

佐藤は自分の考えをまとめるように話し始めた。

## 第7章 連想ゲーム（後書き）

更新が遅れまして申し訳ありませんでした。次話くらいで神崎の出したヒントの答えと『ふっかけ』の謎の一部が明らかにする・・・予定です。佐藤さんの「絶体絶命のクライシス 華麗に再生（この字であってんのか？） 逆転 謎解き」をお楽しみに（笑）

## 第7章 佐藤の推理（前書き）

長い間更新せずに申し訳ありませんでした。頑張って書いていきますので見捨てないでやって下さい（泣）

## 第7章 佐藤の推理

「神崎が言ってた『昔は賑やかだったけど、今は寂しい場所』っていうのはこの事じゃないかしら。」

佐藤は高木の手から先程の写真を取ると、改めて高木の目の前に翳す。

「ここって？」

高木が不思議そうな顔で佐藤と写真を交互に見比べる。

「ほら、ここよ。」

佐藤は指先で写真の一部を示す。そこには窓が沢山ついた建物らしきものがぼんやりと写っていた。

「ここって・・・学校？」

まじまじと写真を見つめていた高木が怪訝な表情で尋ねる。佐藤は無言で、しかし、力強く頷いた。

「神崎と麻緒さんの背格好から考えると恐らく小学校ね。ここが神崎のヒントの答えだと思うわ。そして、神崎と麻緒さんが初めて出合った場所も、多分ここだと思う。」

佐藤の出した答えに高木は戸惑いの表情を浮かべる。

「佐藤さんはどうしてここが神崎のヒントの答えだと思っんですか？」

佐藤は一語一語言い含めるように答える。

「賑やかだったというのはたくさん人がいて活気があるって事でしょう？で、寂しいっていうのは人がいなくなってひっそりしてるって事よね？だから私も考えてみたのよ。神崎の思い出の中にある『昔は人が大勢いて活気があったけど、今は誰もいなくなってひっそりしている場所』っていうのが何処なのかって。」

「それが何で小学校なんですか？」

佐藤の言いたい事がまだ良く解らないといった表情で高木はさらに問いかける。佐藤は真っ直ぐに高木を見据え、ひとつの可能性を提

示した。

「今は少子化やら市町村合併やらで小学校が統廃合される事は珍しくないわ。つまり、神崎が通っていた小学校もすでに廃校になっている可能性は十分あるってこと。」

先程まで不可解な顔で佐藤を見つめていた高木が顎に手を遣り真面目な顔で呟いた。

「そうか。それなら確かに神崎のヒントの答えにぴったりですね。小学校なら子供の声やら何やらで、通常は賑やかな場所ですし。しかもそれが神崎にとって最愛の麻緒さんと無邪気に幼少期を過ごした思い出の場所だったとしたら尚更でしょうしね。」

佐藤は小さく頷く。

「そしてその小学校が廃校になっていたとすれば、そこは寂しい場所以外の何物でもないわ。ましてや麻緒さんが亡くなってしまった今となつては、ね。それに、そこなら神崎が史乃さんの靴を持って行った理由も説明がつくわ。神崎は靴を持ち去る事で何かを隠したかったのではなく、靴が必要だと思ったから持ち出したのよ。意識を取り戻した史乃さんに廃校舎の中を靴なしで歩かせるのは忍びなかったのね。」

そこまで一気に言葉を吐き出して、佐藤はやるせない顔で大きくひとつ溜め息をつく。

「佐藤さん。僕も恐らく神崎のヒントの場所はその小学校で間違い無いと思います。」

高木が佐藤の瞳を真っ直ぐ見据える。

佐藤は静かに頷くと、胸ポケットから携帯を取り出しボタンを押す。高木が無言でじっとそれを見つめる。

数回のコール音の後、先ほど自分達を送り出してくれた上司の声が電話の向こうから聞こえてきた。

「あ、警部。佐藤です。すみませんが、東京近県で神崎が通っていた小学校を調べていただきたいのですが。ええ。まだ確定ではありませんが、可能性は高いと思います。分かりしだい私と高木君はそ

ちらに向かいます。それと警部。ふっかけてご存知ですか？いえ、恐らく方言ではないかと思うのですが。神崎はその方言が使われている地方の小学校に通っていたんじゃないかと。はい、お願いします。」

佐藤は手短かに用件を伝えると電話を切った。

## 第7章 佐藤の推理（後書き）

長期にわたり更新をストップしておりまして本当に申し訳ありません。忙しさと浮気心にかまけて（おいっ！）なかなか筆が進まず、気づいたら前回の更新からかなりの日にちが経ってしまっていました。．．．ほんとにすみません。次話で一応この章は最終話を迎えます。作者の予想以上に話が長くなっておりまして、一体どこまで行くんだこの話は．．．と少々焦りを感じつつ、皆様のご期待にそえるよう（自信はありませんが）頑張っていきたいと思えますので、もう少しお付き合いいただければ嬉しいです。

## 第7章 敵わない

佐藤は携帯をポケットに戻すと声にならない溜め息をふと漏らす。史乃が拉致されてから既に丸一日以上。もうすぐ2度目の闇が訪れる。これ以上考えている猶予は無かった。無意識に唇を噛み、血が通っていないのかと疑いたくなるくらい冷たい手を握り締める。その時。

高木が無言でそっと包み込むように佐藤の手を取った。

佐藤は瞳を大きく見開き高木を見上げる。高木は微かな笑みを浮かべて言い聞かせるように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「史乃さんならきつと大丈夫です。今は自分達の推理を信じましょう。」

佐藤は小さく頷くと、自分の不安な心を見透かしたような高木の言葉に、敵わないな、と思う。

さっきもそうだ。

高木がさりげなくかけてくれる言葉だとか穏やかな微笑みだとかが、不思議なほど佐藤を安心させる。その優しさが佐藤にとってどれほど心強いのか。さっきまで冷え切っていた指先に温かいものが巡り、佐藤を縛り付けていた強張りが一気に解ける。繋いだ手の温もりが、佐藤に勇気と希望を与える。それを手放さないように、佐藤はぎゅっと掌に力を込めた。

どれくらいそうしていただろうか。

そんなに長い時間ではなかったはずだが、二人にはとても長く長い時間が流れたように思えた。互いの手を繋いだまま、佐藤と高木は無言で立ち尽くす。

不意に佐藤の胸ポケットで携帯がなって、二人の間に緊張が走った。

「はい、佐藤です。」

佐藤は素早く携帯を取る。

「目暮だが。さっき言ってた件、解ったぞ。奴が通っていたのは栃

木の小学校だそうだ。だが、もうその小学校は廃校になってるらしい。ああ、それと、例の『ふっかけ』だが。あれは栃木の方言で風花の事を言っただそうだ。」

目暮からの報告を受けて、佐藤の眼に光が宿る。

高木はその光を見逃さなかった。

「ありがとうございます、警部。私たちは直ちにそちらに向かいます。」

佐藤はぺこりと頭を下げ、電話を切った。

その顔は確信に満ちた刑事の顔だった。

「その様子だと、ビンゴ、ですね。」

高木がにやりと嬉しそうに笑う。

「ビンゴもビンゴ。大当りよ。やっぱり神崎が通ってた小学校は廃校になっているそうよ。」

佐藤もにやりと笑う。

「じゃあキマリですね。早速向かいましょう。」

こくりと頷いて、佐藤は神崎邸を後にする。

絶対に助け出すから。だからどうか無事でいて。

佐藤は心の中で強く願った。

## 第7章 敵わない（後書き）

長かった第7章もようやく最終話を迎える事が出来ました。途中で長期間更新しなかったりして、続きを待っていてくださった皆様には大変ご迷惑をおかけしました。本当に申し訳ありません。後は次章とエピソードを残すのみです。ここのところ後書きで予告を書くと守れていないことが多いので（爆）目標だけ。頑張って3月中には完結したい・・・です。そうできるよう、できるだけ頑張ります。なので、もう少しこのお話にお付き合いいただけたら嬉しいのです。そして、これは確定しているのです。次話は引き続き佐藤さん目線で展開していきます。どうかこれからも『光と影』と金弘美樹をよろしく願います。

## 第8章 回りだした齒車

パーキングに停めていた銀色のスカイラインに乗り込むと、高木は静かにアクセルを踏み込む。流線型の車体は住宅街を走り抜け、ほどなくして幹線道路に合流する。金曜日の夜ということもあってか、幹線道路には車が溢れていた。信号が赤に変わるとたちまち車の列が出来る。そのテールランプが放つ赤い光が眩しくて、佐藤は思わず目を細めた。途切れることを知らない車の波を高木は無理の無い運転でどんどん追い越して行く。しばらく走ったところで首都高に乗ると、先ほどまで押し黙っていた高木が真っ直ぐ前を見据えたまままで不意に口を開いた。

「神崎はどうして史乃さんを小学校に監禁したんでしょうか。いくら自分と麻緒さんの思い出の場所で、廃校になっっているから人が来ないとは言っても、監禁場所として適当だとは思えないんですが。」もっともな高木の疑問に佐藤はぼつりと答える。

「本気じゃなかったから。」

佐藤の答えがあまりにも抽象的だったせいか、その真意を量りかねた高木は目を丸くする。呆氣にとられた表情がちらりと佐藤の横顔をうかがい見る。

「えーっと。」

苦笑を浮かべ戸惑いがちに呟く高木に、佐藤は相変わらずじつと前を見据えたままで淡々と自分の考えを話し始めた。

「神崎は初めから本気で史乃さんをどうにかしようと考えていた訳じゃなかったってことよ。事件の根幹を知ってしまった今だからそう思えるのかもしれないけど、今回の事件は神崎篤によって巧妙に仕組まれた計画犯罪なんかじゃなく、いくつもの誤解や偶然によって作り出された結果に過ぎなかった。つまり、神崎が史乃さんを監禁したのは、そうせざるを得ない状況に彼が追い込まれてしまったから。」

佐藤は微かに表情を曇らせる。

「神崎は昨日史乃さんの家を訪れた時点では想像もしていなかったでしょうね。まさか自分が二人の人間を拉致して監禁することになるなんて。だって彼は史乃さんが麻緒さんの死の真相を黙ってさえいてくれればそれで良かったんだもの。でも、史乃さんはそれを拒んだ。そこから全ての歯車は狂ってしまったんだわ。」

佐藤は静かに溜め息を吐く。最愛の人を失ってしまった男。愛する人が残した想いを守りたいが故に犯罪に手を染めてしまった男。その男の真つ直ぐで一途な想いが佐藤の胸を痛いくらいに締め付けた。「なかなか首を縦に振らない史乃さんを前にして、彼は必死に考えたんだと思うわ。そして、誰にも邪魔されない自分達の思い出の場所に史乃さんを連れて行き、時間をかけて説得しようと思いついたのね。だけど、史乃さんが素直に来てくれるとは思えない。だから眠らせて連れて行こうと考えた。」

恐らく麻緒さんが亡くなってから神崎は睡眠障害にでも陥っていたんじゃないかしら。どうやら睡眠薬を携帯していたみたいだから。と佐藤は付け加える。部屋で倒れている史乃を抱き起こした時、彼女に目立った外傷は無かった。それは恐らく睡眠薬で眠らされていたからだろう。

「でもそれを実行に移した時、そこに佐藤さんが現れた。」

高木はじつと前を向いたまま、少し低い声で呟く。

「ええ。神崎は焦ったでしょうね。最も来て欲しくない人間が尋ねて来たんだもの。」

佐藤は少し視線を落とす。脳裏にあの時の光景が鮮明に蘇った。

「追い詰められた神崎は計画を変更せざるを得なくなった。」

高木の声は相変わらず低いままだ。

「殴打して気絶させた私だけをあそこに置いておく訳にはいかなかったから、彼は咄嗟に考えたんでしょうね。どうすることが最善の方法なのかを。」

## 第8章 回りだした齒車（後書き）

とうとう第8章スタートです。佐藤さんと高木くんは、神崎の思い出の場所で史乃さんを無事に見つけ出すことができるのでしょうか？そして、佐藤さんと高木くんが推理する事件の真相とは。少しずつ事件の全容が解き明かされていきます。お楽しみに！

## 第8章 悪魔の囁き

佐藤はぼんやりと前を見る。都会の夜空は明るいように見えて、実は暗い。いくつもの人工的な光に彩られた地上はこんなにも明るいというのに、そこから見上げる都心の空は星ひとつ見えない闇だ。希望など微塵も感じさせない深い闇。そう、まるで今あの男が抱えている心と同じように。

「意識を失っている私を神崎邸に放置しておけば、目覚めた私は間違い無く神崎に疑いの目を向ける。かといってどこかに監禁でもしようなものなら、今度は行方不明の刑事を捜索すべく警察が動く。いずれにしても、神崎篤という男が捜査線上に上がった時点で、彼が最も恐れていた麻緒さんの事故の真相が暴かれる可能性は極めて高くなる。神崎にとつて絶対絶命の危機だったに違いないわ。」

まさに究極の二者択一ね。と佐藤は小さく溜め息を吐き出した。

「そして神崎はある事に気付いたんだわ。もし私をどこかに監禁して時間を稼いだとしても、私と一緒に麻緒さんの事故について調べていた高木くんなら、直ぐにこの事件の真相に気付いてしまうかもしれないって。」

逃げ場を失った事に気付いた神崎はきつと絶望を味わったに違いない。そう。麻緒を失った時に感じたのと同種の絶望を。自分は最愛の人だけでなく、その人の遺した想いすら守れないのか、と。

「でも。」

佐藤は眉を潜め、ぼつりと呟いた。

「それと同時に彼に悪魔が囁いたのよ。」

そう。彼は悪魔の声を聞いたのだ。逃れられないと思っていた現実から逃れられるかもしれない唯一の方法を。その悪魔から。佐藤が続けるよりも先に、先程まで黙って佐藤の話を聞いていた高木が険しい顔で口を開く。

「今のところ事件の真相に迫っているのは僕と佐藤さんしかない。」

それならば二人とも消してしまえばいい。そうすれば真相は闇の中だ、と。」

高木の言葉に佐藤はこくりと頷いた。二人の間に短い沈黙が訪れる。その沈黙に耐え切れず、佐藤はちらりと高木の横顔を覗き見た。眉間に皺を寄せ、相変わらず険しい表情で前を見据えていた高木が、声にならない溜め息を吐き出す。

「神崎はその悪魔の囁きに心を奪われてしまったんですね。その先に待っているのが彼の望んでいる結末ではないと気付かないまま。」同情でも憐れみでもない、ただ愁いを帯びた高木の声が、よりいっそう佐藤を切なくさせる。愛する人を失ったあの男は魅入られてしまったのだ。悲しい運命を操る悪魔に。そして、彼は踏み出してしまった。もう二度と戻る事の出来ない道へと。

「私と史乃さんをそれぞれ別の場所に監禁し、高木くんを呼び出す。そして私と高木くんを二人同時にこの世から消し去る。そうすればあの事故の真相には誰も気付かない。きっと神崎はそう考えたのね。だから私をあの工場に、そして史乃さんを当初の予定通り思い出の場所に監禁する事にした。」

佐藤は膝の上で組んだ己の手をじっと見つめる。胸に込み上げる物を飲み込むように、ぐっと唇を噛み締める。

「神崎にとってあの工場は既に稼動していない上に神崎物産の所有物でもありましたから、佐藤さんを監禁し、僕を呼び出して二人同時に抹殺するにはおあつらえむきだったんでしょね。」

静かな口調で高木は言う。佐藤はじつと一点を見つめたまま答える。

「神崎は覚悟していたんだと思うわ。麻緒さんの想いを守るためにはそうするしかないって。例えば自分が自分を犯罪者に陥める事になったとしてもね。」

あの男の献身的な愛が、こんな結末を引き起こす事になるなんて、一体誰が予想しただろう。神崎が受け入れたその残酷な運命を思うと、佐藤の心は激しく痛んだ。

## 第8章 悲しい嘘

「神崎は麻緒さんが残した深い愛情に応えたいと願ったのね。彼は知ってしまったから。彼女が離婚を切り出した本当の理由を。」

佐藤は先ほど史乃の家で見た麻緒の日記を思い出す。そこに書き残されていた真実は、あまりにも悲しく、切ないものだった。

彼女は耐えられなかったのだ。一人娘の自分の為に両親の反対を押し切って神崎家に婿入りしてくれた夫が、会社や神崎家を守るために苦しむその様を見る事が。妻に心配をかけまいと一人で全てを背負い込み、次第に笑顔を失っていく事が。だから彼女は愛する男を神崎家というしがらみから開放してやりたいと願った。その願いは日増しに強くなり、とうとう彼女はひとつの結論を下す。

愛する男を守る為には離婚するしかない、と。

彼女はそれが最善の方法だと信じた。まさか、男を想う余りに吐いた優しい嘘が、自分を追い詰める事になるなんて微塵も疑わずに。そして彼女は神崎に別れを告げたのだ。自らの心を偽って。

一方、別れを告げられた男は無条件に妻の嘘を信じ、彼女が幸せになるのならと己の気持ちを押し殺してそれを受け入れた。

「愛する人の幸せを願う余り、二人はすれ違ってしまったのね。」

佐藤は独り言のように呟いた。その言葉が狭い空間に虚しく響く。ハンドルを握っていた高木が僅かに目を伏せた。

「互いの事を想って吐いた嘘が、互いを傷付ける嘘になり、愛し合う一組の男女に別れをもたらしたんですね。永遠の別れを。」

哀愁を帯びた高木の声が、ますます佐藤を感傷的な気持ちにさせる。「もし麻緒さんが本当の気持ちを神崎に伝えていれば。神崎が彼女の真意に気付いていれば。こんな事にはならなかった筈なのに。」

佐藤はきゅっと唇を噛んだ。そうしなければ、哀感と共に涙が溢れてしまいそうだった。

誰よりも愛する男の自由を望んだ女。そして、最愛の女の幸せを誰

よりも願った男。

互いの事を想うあまり吐き続けた嘘が、気付かぬうちに二人を引き返す事の出来ない絶望の淵へと追い込んでいく。愛する人の自由と引き換えにした最愛の人との離別。その代償は計り知れないほど重く彼女に押し掛かった。それでも彼女の夫に対する想いは少しもぶれることなく貫かれたのだ。彼女が自ら命を絶った後も。

「どうしても言えなかったんですよ。自分の本当の気持ちを。言ってしまったら、余計に相手を苦しめてしまうんじゃないかと思って。」

低い声で呟く高木の表情は暗い。唇を噛み締めたその横顔が、佐藤には込み上げてくる何かに耐えているように見えた。

## 第8章 悲しい嘘（後書き）

またしても更新が遅くなってしまい申し訳ありません。最近なかなか書く時間が無くて・・・って言い訳ですね。はい。すみません。気合入れてモバパソまで購入したというのに、何をやってるんでしようか（汗）頑張って書きますので、見捨てないでやって下さい。よろしくお願いします。

## 第8章 絆

「ねえ。怒らないで聞いてくれる？」

佐藤はハンドルを握る精悍な横顔に問いかける。高木は一瞬怪訝な表情でこちらを振り返し、直ぐに視線を前方へ戻すと微かに苦笑を浮かべ、こくりと静かに頷いた。それを確認して佐藤はぼそりと呟く。

「これは刑事として聞くんじゃないで、一人の女として聞くんだだけ。」

一旦言葉を区切り、少し躊躇しながらも核心を切り出す。

「もし。もしも私が麻緒さんと同じように涉くんを愛しすぎるあまりに自分の命を絶つような事があったとしたら。涉くんならどうする？」

現実的ではない馬鹿馬鹿しい質問だと自分でも思う。そんな事を聞いたところで高木を困らせるだけだという事も解る。普段なら絶対に聞かないような無意味な質問。それでも湧き上がってくる不安が佐藤にその質問を切り出させた。

高木は一瞬言葉を無くす。呆気にとられた表情でこちらを振り返り、佐藤が冗談で言ったのではない事を悟ると、真剣な顔でこう答えた。  
「美和子さん。オレはずっとあなたの傍に居るって約束しましたよね。」

高木の言いたい事がいまいち飲み込めないまま佐藤は小さく頷いた。それを見届けた高木は静かに、しかし、きっぱりと言い放つ。

「オレはあなたに自ら命を絶つような選択は絶対にさせません。どんな事があってもオレはあなたと生きていくって決めてますから。だからもしあなたが死を考えるような事があったとしても、必ずオレが思い止まらせてみせます。美和子さん。あなたはオレにとって無くてはならない大切な人なんです。だからどんな事があっても失うわけにはいかないんです。」

予想もしなかった答えに佐藤の視界がぼんやりと滲む。こんな馬鹿げた質問を投げ付けた自分が高木にどんな答えを期待していたのかは良く解らない。けれど、高木のくれた答えは佐藤にとっては十分過ぎるほど想いの籠った尊い物だった。

「答えになってませんか？」

少し不安げな声で問い返し、高木は苦笑した。

「うん。十分過ぎるくらいだわ。」

高木が前を向いているのを確認して、佐藤は頬に零れた雫を指先でこっそりと拭う。

「涉くん。私はずっとあなたと一緒に生きていく。だから・・・」その先は声にならなかった。どうしようもなく込み上げてくる愛おしさが、佐藤の口から言葉を奪う。俯いて唇を噛み締め、再び瞳から零れ落ちそうになる雫をなんとか堪えた。

その時、不意にするりと高木の左手が伸びて来て、佐藤の頭をぽんぽんと撫でた。

大きくて温かい手。

その手は優しく佐藤の髪を梳き、そっと頬を撫でる。高木は相変わらず前を見据え、右の手でハンドルを握ったままだ。けれどその左手は、堪え切れず佐藤の頬に零れ落ちた一筋の雫を確実に拭った。

「オレ達なら大丈夫ですよ。」

穏やかだけれど力強い声がぼつりと囁く。

「うん。」

佐藤は俯いたまま、小さく頷いた。先程からずっと胸の中で燦り続けていた不安が音も無く消えて行く。

「ごめんね。涉くんの想いを疑った訳じゃないの。」

小さな声で詫びる佐藤に高木はいつもの穏やかな笑みを向けて答える。

「解ってますよ。不安だったんでしょう？あんなに愛しあっていた二人があんな結末を迎えてしまったから。」

オレも同じ事を考えてましたから。と高木は苦笑する。

「でも何度聞かれても答えは同じです。」

きっぱりとした口調で高木は告げる。その答えに佐藤は顔を上げ、小さく微笑んだ。

「ありがとう。私も同じよ。あなたとずっと一緒に生きていきたいから。」

佐藤の答えに高木は満足そうに笑った。

## 第8章 絆（後書き）

やっぱり3月中には終われそうにありません（泣）あともう少し頑張って書きますので、よろしくお願いします。

## 第8章 人として

首都高を下りてしばらく走ったところで、先ほどまで無言で何かを考え込んでいた高木が突然神妙な顔で呟いた。

「神崎は僕達を殺した後、監禁した史乃さんをどうするつもりだったんでしょうか。」

それは単に疑問を投げ掛ける、というよりは、佐藤の意見を確認するかのような言い方だった。恐らく高木は既に彼なりの結論を出しているのだろう。

考えられる可能性はいくつかあった。史乃を説得して全てを隠蔽してしまうか。それとも殺害して口を塞ぐか。あるいは神崎自身が麻緒と同じように自殺してしまうという事も考えられた。しかし、どれも違うような気がする。あの男は冷酷非道な悪魔などではない。慣れない悪魔を精一杯演じているだけの心優しいひとりの人間なのだ。

「多分神崎はそんな先の事までは考えてなかったんじゃないかしら。」

佐藤はぽつりと呟いた。

「そうですね。」

その答えに高木がほつとしたような顔で同調する。

「ただひとつだけ言える事があるとすれば、神崎は史乃さんが意識を取り戻してそこから逃げ出したとしても構わないと思っていたのかもしれないって事。」

佐藤は小さな溜め息を吐いた。

そう、彼は最初から史乃を拘束するつもりなんて毛頭無かったに違いない。もし本気で監禁しておくつもりだったのなら、あんな物を持ち出したりはしないだろう。

「僕もそう思います。史乃さんの靴を持ち出した時点で神崎は心のどこかでそう思っていたんでしょうね。」

佐藤と同じ結論を高木も出していたのだと判って幾分かほつとする。自嘲気味な笑みを唇の端に浮かべながら、佐藤は同じく苦笑を湛えた高木の横顔を見遣る。

「自分を監禁した犯人に肩入れするなんて、刑事としては失格ね。」  
ぽつりと呟いた佐藤に、高木はますます苦笑する。

「佐藤さんが刑事失格だったら僕はどうなるんですか。」

ぽりぽりと頬を掻きながら、高木は静かに、しかしはっきりとした口調で呟いた。

「でも人間としてはそれで良いんだと思いますよ。」

その言葉に佐藤は思わず微笑んだ。

「私もそう思うわ。」

そつと囁いて、

「人間としての感情を忘れてしまったら刑事は務まらないものね。」

先ほど廃工場で高木が佐藤に紡いでくれた言葉を思い出す。刑事である前に、人間でなければならぬ。高木はそう教えてくれた。その言葉の意味が、今ならはっきりと解る。さっき聞いたときよりももつとはっきりと。

穏やかな笑みを浮かべた高木がこくりと頷くのを確認して、佐藤は再び前を見る。フロントガラスの向こうには、眠らない都心の夜とは違う穏やかで静かな闇が広がっていた。

「そろそろ着きますよ。」

少し硬い表情で、高木が告げる。

「とうとう答えが出るのね。私達が探し求めてきた答えが。」

佐藤は強い光を瞳に宿し、静かに唇を噛み締めた。

## 第8章 人として（後書き）

次話でいよいよ史乃さんの安否が明らかになります。神崎が史乃さんを監禁した場所は、果たして佐藤さんと高木くんが推理した小学校で合っているのでしょうか？

## 第8章 入口

その小学校は廃校になってから幾分年月が経っているものの、あの写真の中に切り取られた時と同じ佇まいを残していた。ぼんやりと闇に浮かび上がった白い校舎がなんとも物悲しい。

高木が恐らく駐車場だったであろうスペースに車を止め、ちらりと佐藤を見る。目が合って、二人はどちらともなく小さく頷くとドアを開け外に出た。

東京を出た時と比べると、僅かに寒さが増した気がする。澄み切った空気がそう感じさせるのかもしれない。先ほど車の中から天を仰いだ時には見えなかった星が、己の存在を主張するかのようになきらと瞬いていた。校庭の一角に植えられた桜の樹は子ども達を見送った時と同じように蕾を膨らませている。そのうちのいくつかは既に綻び始めていた。佐藤にはその先端から微かに覗く淡いピンクが震えているように見えた。

「ここに、居るんでしょうか？」

高木が前方に見える白い箱を真っ直ぐに見つめながら佐藤に問う。確かにこの校舎にはこれといった物音も無く、明かりが漏れているような所も無い。ざっと見る限りでは到底ここに人が監禁されているようには思えなかった。

「ここ以外には考えられないもの。」

険しい顔で佐藤は答える。大きく息を吸い込むと、ひんやりとした空気に肺の奥がきりきりと痛んだ。

「行くわよ。」

短く告げると佐藤はゆっくりと歩き出す。後を追うように高木が続いた。逸る気持ちを抑えながら入口へと急ぐ。

大きな玄関扉は当然の事ながら鍵が掛けられており、人が入れそうな隙間すらなかった。それならば窓から侵入したのだろうと検討を付け、周囲を回って確認してみる。しかし、どこにも神崎が侵入し

たような形跡は無かった。佐藤は眉を顰め、唇を噛む。

神崎は一体どこからこの校舎の中に入ったっていうの？それとも、ここに史乃さんは居ないっていうの？

佐藤が口元に手を遣り考え込んでいたその時、

「佐藤さん、ここから入れそうですね。」

先程まで背後に居た筈の高木が少し離れた所から手招きする。駆け寄る佐藤に高木がにやりと笑みを浮かべて言う。

「ほら。このドア、鍵が掛かってないみたいですから。」

高木がゆつくりとノブを引く。するとその扉は鈍く軋みながら何の抵抗も無く開いた。

それは用務員室のドアだった。恐らく住み込みで働く用務員職の間が玄関として使っていたのだろう。当然、その部屋の内扉は校舎に繋がっている筈だ。

「良く見つけたわね。」

佐藤が感心したように言うと、高木は苦笑を漏らす。

「いや、手当たり次第に窓やらドアやらを引っ張ってたら偶然開いちやっただですよ。」

さあ、行きましょう。と促す高木に力強く頷いて、佐藤はその扉をくぐった。

## 第8章 入口（後書き）

今回は連続2話更新です。もう1話お付き合いくださいませ。

## 第8章 終焉

校舎へと続く内扉を開けると、長い廊下が真つ直ぐ奥へと伸びている。そこは薄暗く、ひっそりと静まり返っていた。

「夜の学校って何だか不気味ね。」

余りの静けさに、佐藤は思わずぼつりと呟く。

「そうですね。」

短く答えて高木が佐藤の顔を覗き込む。

「何よ。」

思わず可愛げのない低い声で唸る。一瞬顔を覗かせた闇に対する恐怖心を見透かされたようで、何だか無性に腹が立った。

「いえ、別に。」

高木はするりと佐藤の横をすり抜け、悪戯っぽい笑みを浮かべてくるりと振り返る。

「早くしないと置いてっちゃいますよ。」

そう言つて先に歩き出した高木の後を佐藤は慌てて追いかける。直ぐに追いついて隣に並ぶと、長身の高木が手前の教室のドアに付いた小窓から中を覗き込みながら尋ねてくる。

「史乃さん、どこに居るんですかね。」

高木は佐藤の返事を待つ事無くその扉をがらりと開け、中を見回した。佐藤も高木の背後から室内を覗き込んでみる。しかし、そこに人が居るような気配は無い。佐藤は眉間に皺を寄せ、険しい表情でその疑問に答えた。

「恐らく神崎と麻緒さんが一緒に過ごした教室でしょうね。でもそれがどの部屋かは判らないし。とりあえずひとつずつ確認していくしかないわね。」

高木も同じ事を考えていたのか、佐藤の方を振り返るとふっと小さく苦笑った。

佐藤と高木は片っ端から教室の中を確認して回る。1階の部屋を全

て回り終えると、高木が独り言のように呟いた。

「あとは2階ですね。」

佐藤は静かに頷く。月明かりに青白く照らし出された階段を踏み外さないよう注意しながらゆっくりと進む。その二人の足音が広い校舎に響き、佐藤の心に忘れかけていた恐怖を引き戻した。それは単に暗がりには怯えるだけのものではない。まだ目の前に現れない結論に対する不安と焦りが入り混じっていることに佐藤は気付いていた。思わずごくりと息を呑む。

「佐藤さん。あれ……。」

先に2階の廊下に辿り着いた高木が上擦った声で佐藤を呼び、前方を指差した。慌てて残りの階段を駆け上がり、高木が指差す方に視線を向ける。奥から2つ目の部屋。その覗き窓から、僅かだが光が漏れているのが見て取れる。二人は顔を見合わせると、弾かれた様に闇の中を駆け出した。

扉の前で立ち止まり、大きく深呼吸をした高木が扉に手をかける。からりと乾いた音がして扉が開いた。薄明かりの室内に捜し求めていた姿が在った。

「刑事さん……。」

真っ直ぐこちらを見据え呟いたその表情は硬い。

「史乃さん、無事だったんですね。」

問いかける佐藤の言葉に、すべてを悟った老女は悲しい笑みを浮かべて呟いた。

「終わっただんですね。何もかも。」

佐藤は唇を噛み、無言でごくりと頷いた。

## 第8章 終焉（後書き）

サブタイトルは終焉ですが、実際に第8章が終焉を迎えるのは次話なんです。紛らわしいタイトルですみません・・・

## 第8章 決意

安堵と悲嘆が入り混じった表情で史乃は深く長い嘆息を吐いた。その溜め息の意味は聞かなくても解る。佐藤と高木は互いに顔を見合わせた。彼女の心情を思うと、直ぐには言葉が見つからない。どんな言葉を掛けたら良いのか思い至らないまま、ゆっくりと仄明るい室内に足を踏み入れる。目に飛び込んできたその部屋の光景は、予想していたものとは大きく違っていた。それに気付いて思わず表情が曇る。二人は思い知らされた。神崎篤という男がどれほどまでに慈悲深い男であつたかを。

「史乃さん……」

佐藤は戸惑いがちに呼びかける。その声に史乃はぼつりと呟いた。

「篤さんは悪くないんです。」

搾り出すような掠れた声で史乃は繰り返した。

「篤さんは何も悪くないんです。」

その声は微かに震えていた。今にも泣き出しそうな表情で彼女は二人を見る。

「私がいけないんです。私が篤さんを……」

続けようとした史乃の言葉を遮るように、佐藤は小さく首を振った。

「史乃さん。篤さんは気付いていたんです。」

その言葉に史乃は目を見開く。

「彼は判っていたんです。でも、彼にはこうする事しか出来なかった。」

あなたたち親子を愛していたから……大きく見開かれた史乃の瞳に透明な雫が浮かぶ。それはみるみるうちに大きくなり、やがて頬を滑り落ちた。肩を震わせ微かな嗚咽を漏らしながら、史乃は両手で顔を覆い、その場にしゃがみこんだ。枯れる事を知らないその涙を見られまいとするかのように。その小さな背中に今まで気丈に振る舞ってきた史乃の姿が重なる。

彼女はこの小さな背中にとれほどの悲しみを隠してきたのだろう。この小さな体でどれほどの痛みに耐えてきたのだろう。それを思うと激しく胸が締め付けられ、呼吸する事ですら苦しくなる。瞼の奥に込み上げてくる熱をぐつと堪えて佐藤は唇を噛んだ。そつと老女の隣にしゃがみこみ、その小さな背中をさする。今の自分出来る事といえば、それくらいしか無かった。

「ごめんなさいね・・・」

顔を上げることなく掠れた声で史乃が呟いた。佐藤は無言で首を横に振る。しばらくの間、史乃は泣き続けた。今まで彼女の中に押し込められていた全ての感情を洗い流すかのように大粒の涙がとめどなく彼女の頬を濡らす。佐藤と高木は黙ってその痩せた背中を見つめていた。彼女の悲しみを思うとただそうする事しか出来なかった。歳を取ると涙もろくなるものね。」

涙で濡れた頬を拭いながら、史乃は苦笑めいた笑みを浮かべて顔を上げた。

「史乃さん。」

その顔を見て、佐藤は唇の端に複雑な笑みを浮かべる。

「こんなに泣いたのは久しぶりだわ。なんだかすつきりした。」

そう言つて史乃は微かに笑った。ゆつくりと立ち上がり、はつきりと意思を秘めた口調で切り出す。

「刑事さん。私が知っている事を全てお話します。」

その決意に満ちた言葉に、佐藤と高木は小さく頷いた。

## 第8章 決意（後書き）

お待たせしておりました。申し訳ありません。なんとか無事第8章を終える事が出来ました。あとはエピローグを残すのみです。いつも沢山の応援を頂き本当に有難うございます。あと少し、頑張つて書きますので最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

## エピソード 対面

庁舎内の取調室で、高木と佐藤は被疑者と対面した。先日比べる  
と些かやつれたように見えるその顔からは、あの廃工場で見た高  
慢さや猛々しさはすっかり消え去っていた。それでもまだどこか夢  
から覚めていないような眼が気に掛かる。一通り形式ばった内容を  
問い、高木は本題を切り出した。

「神崎さん。あなたはあの日、史乃さんに会いに神崎邸に行きまし  
たね。」

高木の問いかけに男は素直に頷いた。

「電話があつたんです。麻緒の事故の事で話したい事があるから来  
て欲しいと。お義母さんが麻緒の遺品を整理しに家に来た後で、麻  
緒の日記帳が無くなっている事には気付いていたので、もしかした  
らと思いました。」

男は躊躇うことなく淡々と答える。その顔に表情は無い。

あの日。午前中で仕事を終えた神崎は史乃の家の近くのレストラン  
で食事を取り、その駐車場に車を停めたまま神崎邸に向かった。そ  
こで史乃から切り出された話は神崎の予想通りのものだった。

「お義母さんはやはり真相を知ってしまったんです。警察に麻緒の  
日記を見せて、あの事故がただの交通事故ではなく本当は麻緒の自  
殺だったのだと話した方が良いと言いました。でも俺はどうしても  
・・・そうしたくなかった。」

男は唇を噛んだ。膝の上に置いた手をぎゅっと強く握り締める。そ  
の手は微かに震えていた。

「麻緒さんが残した想いを守りたかったんですね？」

その顔を真っ直ぐに見据え、優しい口調で高木は尋ねた。

「知らなかったんです。あの日記を読むまでは。麻緒が一体どんな  
気持ちで離婚を切り出したかなんて。」

男の顔が苦悶に歪む。それを見つめる高木の胸にやり切れない切な

さが込み上げた。

麻緒が神崎に離婚を切り出したのはあの事故の2週間程前の事だった。このままでは夫が壊れてしまうと思った彼女は自らの本心を押し隠し、最愛の夫と離婚する事を決意したのだ。ただ、理由も無く離婚して欲しいといったところで夫は絶対に納得しないだろう。ましてやそれが自分の為だと知ったら夫は絶対に離婚しないと言い張るに違いない。そう考えた彼女は彼にこう言ったのだ。「好きな人が出来たから離婚して欲しい。」と。

「あの時。麻緒から離婚を切り出されたあの時、あいつの本心に気付いていれば。俺よりも他の男の方があいつを幸せにしてやれるかもしれないなんて馬鹿な事を考えなければ。」

男は強い口調で吐き捨てた。後悔だけがその顔に滲む。

「あいつが自殺する事は無かった。」

俯きがちにぼつりと呟いた男の肩は僅かに震えていた。その震えは堪えきれない悲しみから来るものなのか。それとも己に対する怒りから来るものなのか。量りかねて思わずその顔を覗き込む。

「俺があいつを殺したんです。」

男はきつぱりと呟いた。その瞳には深い闇が静かに広がっていた。

## エピソード 対面（後書き）

2話連続更新です。とうとうエピソードに突入しました。高木さんと佐藤さんは、神崎の心を闇から救い出す事が出来るのでしょうか？最後まで頑張って書きますので、応援よろしくお願いします！

## エピローグ 予想外の実事

その闇の正体は何なのかはおおよそ検討が付く。しかし、高木にはそれを止める術など見当も付かない。己の無力さを痛感し、高木は僅かに唇を嚙んだ。

「あの雨の日、俺は離婚届に判を押したんです。あいつの目の前で

」

男は真つ直ぐに高木を見据え、淡々と話し続ける。暗く澱んだ瞳で、まるで自分の罪を懺悔するかのように淡々と。

「二人で離婚届を出しに行った後、麻緒を実家まで送りました。いつもの路地の前であいつを降ろして。あいつは笑って俺にさよならと言いました。俺は何も言えなかった。直ぐに自宅に帰りました。

まさか、あんな事になるなんて思いもせずに。」

狭い取調室に男の声が静かに響く。

「えっ。離婚届を提出したんですか？」

今までまったく知らなかった事実が男の口から語られたことに高木は思わず困惑の声を上げた。たった今、神崎は離婚届を出しに行つたと証言したが、実際のところ二人はまだ離婚していない。その事は二人の間に離婚話が出ていたという証言を得た時既に調査済みだ。この矛盾は一体どこから生じているのか。不思議そうに首を捻る高木に男は少々苦笑しながらその種を明かす。

「ええ。行くには行つたんですけど、証人欄が空欄になっていたので受理されなかったんです。」

まったく恥ずかしい話ですが、と前置きをして男は続ける。

「協議離婚の際には二人の証人を立てなきゃいけないって事を知らなくてね。」

男はふつと小さな溜め息を漏らす。

「今となつて思えば、あれは神様がくれた最後のチャンスだったのかもかもしれませんね。」

独りごちた男の顔に再び苦笑が浮かぶ。その瞳に深い悲しみの色が混じっているのを高木は切ない思いで見つめていた。

高木はもちろん結婚などしていないから、婚姻届ですらどうやって書くのか解らない。ましてや離婚届なんて、ドラマの中でしか目にすることが無いのだから尚更だ。後で知った話だが、協議離婚する際には成人二人の証明が必要になり、それがないと書類は受理されないらしい。

結局受理されなかった書類は男が預かり、証人欄に友人のサインを貰って再提出することにして二人は岐路に着いた。

その時、麻緒は既に決意を固めていたのだろう。最後に最愛の夫に残した言葉は永遠の別れを告げる言葉だった。

「角を曲がる直前にバックミラーで見たあいつの姿は今でも目に焼きついていますよ。自分でも何故だか解らないんですけど、あの時俺にははつきりと見えなりました。土砂降りの雨の中に立ち尽くすあいつの姿が。」

男の胸に押し寄せる悲しみは到底計り知れない。ただ二人がいかに互いのことを愛していたかという事だけは痛いほど解る。そして、その愛が二人の人生を大きく変えてしまったことも。

「助手席のシートの上に麻緒のピアスが落ちている事に気付いたのは自宅に帰った後でした。引き返して届けるかどうか迷って。その時でした。お儀母さんから麻緒が事故に遭ったと電話があったのは。」

男は静かに目を伏せた。

## エピソード 予想外の実事（後書き）

相変わらず更新が遅くてすみません。

私事ですが、先日『漆黒の追跡者』を観に行ってきました！高佐ファンとしてはかなり嬉しい内容で、とっても良かったです。アニメではハンマー男も放送され、まさに高佐づくしな今日この頃。金弘も頑張つてこの作品を完結させたいと思いますのでよろしくお願いします。

## エピローグ 生きてこそ

男が病院に駆けつけた時には既に手遅れだった。頭部を強打したことによる即死。

それが男に突きつけられた最悪の結末だった。あまりのショックに男の瞳からは一滴の涙さえも零れる事はなかった。人間はとてつもなく悲しい出来事に直面した時、なかなかその事実を受け入れる事が出来ないという。男は身をもつてそれを経験したのだ。ようやく涙が溢れたのは、葬儀が終わり変わり果てた最愛の妻と再会した時だった。

もうあの笑顔を見ることは出来ない。  
あの温もりに触れることも出来ない。

小さくなつた妻の欠片を拾う男の目から大粒の雫がとめどなく零れ落ちた。

「刑事さん。どんなに悲しくても涙はいつか枯れてしまふんですよ。時間が経てば喉も渴くし、腹も減る。その現実がなんだか虚しくてね。」

男は苦しそうに唇を噛んだ。先程まで高木を見据えていた男の目が僅かに伏せられる。高木の心はちくりと痛んだ。

生きるという事は決して楽な事ではない。もしかしたらさまざまな不条理に苦悩し、絶望する事の方が多いかもしれない。それでも人は生きる。その先にある希望を信じて。何故なら人は生きるために生まれてくるのだから。生きる事で希望を見出せるのだから。

オレにはできるだろうか。生きる希望を失ってしまったこの男を救う事が。この男の生に希望を与える事が。

真つ直ぐに男を見据えながら高木は自問自答する。一瞬の静寂が辺りを包んだ。

「ちょうどその頃ですよ。刑事さん達がうちにやって来たのは。」  
その静寂を振り払うように、男は再び口を開いた。その視線が再び

高木を捉える。

「刑事さんから麻緒の死がただの事故ではないかもしれないと告げられた時、俺の中で燻っていた思いに答えを突きつけられたような気がして。」

男は妻の遺品を整理し始めた。そして、あの日記帳を見つけたのだ。「麻緒が日記を付けていたのは知っていました。でも今までそれを読もうと思った事は無かった。なんとなく良心が咎めました。でもそれでも俺は知りたかった。」

男の瞳が一瞬揺れたような気がした。

「覚悟していたとはいえ、真実を知った時には体が震えました。俺があいつを追い詰めてしまったんだと思うと夜も眠れなくて。気が狂いそうでした。」

男は顔を歪め再び強く唇を噛んだ。握り締めた拳が静かに震えている。

「だからあなたは睡眠薬を持ち歩いていたんですね？」

高木の問いに男は無言で頷いた。

「どんなに薬を飲んでも眠れなくてね。怖いんですよ。夜が来るのが。あいつを死に追いやってしまったという現実を突きつけられるようで。」

男は唇の端に苦い笑みを浮かべた。高木にはその顔が泣いているように見えた。

## エピソード 汚れの瞬間（とき）

それまで直視していた男の顔から僅かに視線を落とし、高木は瞳を閉じた。大きくひとつ息を吐き、再び視線を上げる。

「あなたはその睡眠薬で史乃さんを眠らせ、あの小学校に監禁したんですね。」

感情を押し殺した声で、淡々と高木は尋ねた。そうしなければ悔しさと切なさには押し流されてしまいそうだった。その声に男は力無く頷く。

「このままではお義母さんの口から麻緒の死の真相が漏れてしまう。それだけはどうしても避けたかった。」

追い詰められた男は、隙を見て持っていた睡眠薬を史乃の飲み物に入れた。

「お義母さんを眠らせてしまえばとりあえず時間が稼げる。それしか思いつかなかったんですよ。あの時の俺にはね。」

男は自嘲気味に笑う。高木はその笑みを見つめながらふと思った。もしかしたらこの男は、眠りから覚めた史乃の記憶の中から麻緒の死の真実が夢のように消えてしまっている事をどこかで期待していたのかもしれない、と。

「でもいざお義母さんが眠ってしまったら、どうしたら良いか判らなくなってしまうて。とにかくどこかに運ぼうと車を取りに戻ったんです。そうしたら・・・」

俯きがちに幹線道路を歩いていた男の脇を見覚えのある赤い車を通り過ぎた。男は思わず顔を上げ振り返る。特徴のある赤い車体は少し先の交差点を左折し神崎邸の方へと消えた。

「正直生きた心地がしませんでしたよ。もし刑事さんにお義母さんを発見されたら真っ先に俺が疑われる。そうなれば麻緒の死が事故でなかったことがばれてしまう。」

気が付くと男は走り出していた。車を停めていたレストランに向か

つてではなく、元来た道を。先程己の横を通り過ぎた赤い車を追いかけるように。

角を曲がり少し走ったところでパーキングから出て来る女の姿に気付いて、男は電柱の陰に身を隠した。何時もの鋭い眼差しとはまた違う愁いを帯びた瞳をした女は迷う事無く神崎邸の方へと歩いて行く。男は距離を保ちながら女の後をつけた。女の姿が路地の向こうに消えたのを確認して、角からそつと顔を出す。門扉をくぐる女の姿が見え、男は慌てて後を追った。門扉の陰から恐る恐る中を覗き込んだその時、女が怪訝な顔で玄関の扉に手を掛けるのが目に入った。男は思わず息を飲んだ。次の瞬間、女の顔色が変わる。その瞳に鋭い光が宿ったのを男は見逃さなかった。もう迷っている暇など無い。男は庭に置いてあった真新しい鉢を手にとると、足音を忍ばせ、開け放たれた玄関からそつと中に入った。

「史乃さんつ。しつかりして。史乃さんつ。」

動転した女の声が聞こえる。鉢を握り締める手に力が籠った。大きくひとつ息吸い込み、男は覚悟を決めた。襖の影から飛び出すと、持っていた鉢を躊躇う事なく女の後頭部めがけて振り下ろす。無我夢中だった。

## エピソード 消えない罪

あっけなく女はその場に崩れ落ちた。初めて人を殴り倒してしまった恐怖に思わず持っていた鉢を取り落とす。ごとんという鈍い音が部屋に響いた。

殺してしまったかもしれない。

体がわなわなと震えた。男は膝から崩れ落ちるようにその場にしゃがみこみ、呆然と妻の遺影を見上げた。

もう引き返すことは出来ない。

男は決意を固めた。

大きく数回肩で呼吸をして、まだ小刻みに震える脚で何とか立ち上がる。自由の利かない体を引きずるようにして女の傍へ行き、その背中がまだ呼吸を刻んでいる事に気付くと、無意識の内に安堵の息が漏れた。ゆつくりとその場に座り、うつ伏せに倒れた女の膨らんだ上着のポケットを探る。そこから手錠を取り出すと、男はそれを華奢な女の手首に嵌めた。

「車を取りに戻って家に着く頃には不思議と落ち着いていました。そして思い付いたんです。警察に麻緒の死の真相を知られる事も無い。俺が犯した罪を知られる事も無い。そんな最善の方法を。」

男はささやかな嘆息を漏らすと、先程からじっと見据えていた高木の顔から視線を逸らす。

「何故あの小学校に史乃さんを監禁したんですか？しかも、あんな状態で。」

一瞬の沈黙を保ってから尋ねた高木の声は低く、掠れていた。

高木は昨夜の情景を思い出す。史乃が監禁されていた部屋の鍵はかかっていなかった。かといって史乃の四肢が拘束されている訳でもなかった。部屋にはかつて備品として使われていたであろうストーブとベッドが置かれ、机の上には食料や水も用意されていた。この男は一体どんな思いで史乃をあそこに連れ去ったのか。微かな期待

を悟られないよう瞳の奥に押し隠す。その問いに男は視線を戻し、悲しい笑みで答えた。

「救われたかったんですかね。」

本音だと思った。高木の顔にぎこちない安堵の笑みが浮かぶ。

「あそこは俺と麻緒が出逢った思い出の場所なんですよ。」

男の言葉を高木は黙って聞いていた。

「両親が今の会社を立ち上げた頃、俺は栃木の祖父母の家に預けられていたんですよ。祖父はあの学校の用務員をしていてね。2年ほど通っていたんですよ。あの小学校に。そこに麻緒が転校してきました。3年の12月だったかな。」

遠い瞳をして語る男の表情は穏やかだった。

「あいつの親父さんが倒れて、お義母さんも大変だったみたいで。あいつもお義母さんの実家に預けられていたんですよ。まあ、あいつは4ヶ月程しかいませんでしたけど。」

同じ東京出身で、家の事情で祖父母の家に預けられている。似たような境遇の二人は直ぐに意気投合した。

「あれが俺の初恋でした。」

ぼつりと呟いて、男は静かに瞳を閉じた。込み上げてくる感情を飲み込むように唇の端を引き締める。静寂が狭い部屋を支配した。

「戻りたかった。無邪気に人を愛せたあの頃に。」

吐き出した男の声は震えていた。唇を噛み締めて何かを堪える。

「でも・・・」

短く区切って男はゆっくりと瞳を開けた。

「もう戻る事なんてできない。俺の犯した罪は消えないんですよ。」

あいつを死に追いやったという罪はね。」

低い天井を仰ぎ見た男の瞳に再び暗い影が広がっていく。高木はそれを齒痒い思いで見つめていた

## エピソード 消えない罪（後書き）

長期間に及んだ『光と影』の連載も、いよいよあと3話を残すのみとなりました。あともう少しお付き合いいただけたら嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。

## エピローグ 共に生きる

一通り取調べを終えた高木と佐藤は千葉と白鳥に後を任せ、連れ立って取調室を後にした。隣を歩く佐藤の顔に笑顔は無い。二人は一旦捜査1課の大部屋に戻るとどちらともなくコートを掴む。お互い庁舎内で食事をする気にはなれなかった。

エレベーターでロビーに下り、手にしたコートを羽織りながら庁舎から出ようとしたその時、開いた入口ドアから季節が逆戻りしたのかと疑いたくなるくらい冷たい風が吹き込んできた。あまりの寒さに自然と二人の距離が近くなる。

「もうすぐ4月だっていうのに今日はまた一段と冷えるわね。」

ぎこちない笑みを浮かべて佐藤が言う。コートの前をかき集めて、ぎゅっと握り締める仕草がその寒さを物語る。

「そうですね。ついこの間春一番が吹いたばかりだって言うのに。」

高木も思わず首を竦めた。

空は青く澄み渡っているというのに、どういう訳か風はひんやりと冷たい。

「こういつの、何て言ったかしら。寒の戻り？それとも花冷えが正しいのかしら。」

唇に指先を当てて考え込む佐藤に、

「花冷えじゃないすか？」

短く答えて苦笑を向けたその時、高木の頬に何かが触れた。ひんやりとしたその感触に高木は弾かれたように顔を上げる。それにつられて佐藤も天を仰いだ。

真つ青な空には季節外れの銀色の花びらが舞う。まるで風に遊ぶように、はらり、はらりと。

それは幻想的な光景だった。一瞬都会の喧騒を忘れてしまう程に。

「……風、花？」

ぽつりと呟いた佐藤の言葉に、高木ははっとして振り返る。

「佐藤さんっ。戻りましょう！」

無意識のうちに佐藤の手を取り本庁に向けて走り出す。握り締めた一回り小さな佐藤の手は、つい先程まで冷たい風に曝されていたというのにほんのりと温かかった。

この温もりがあるからオレはこうして生きていける。この温もりだけは、どんな事があっても絶対に手放してはならないのだ。

きつく握り返してくる佐藤の柔らかな手を引きながら、高木は強く思う。

自分は悲しい運命を辿ったあの二人のように、大切な佐藤の温もりを自ら手放すような事は絶対にしない。愛する人の幸福を願うなら、その手は決して放してはならないのだ。幸せは願うだけでは手に入らない。掴む努力をしなければ、絶対に叶えられないものなのだ。それはきつと容易い事ではないだろう。それでも。それが例えどんなに辛く苦しい事であったとしても。二人でなら乗り越えていける。繋いだ手を離さなければ、その先にはきつと素晴らしい未来が待っているのだと信じられる。オレ達はそれを知っているから。

だから二人で生きていくのだ。この先もずっと。二人が幸せであるために

## エピソード 伝えたい思い

息を切らしてロビーを駆け抜け、エレベーターホールへと向かう。上りボタンを押してみたものの、最寄階で停止しているその箱はなかなか降りてこない。

「くそつ。」

短く舌打ちして吐き捨てる。

伝えなければ。あの男に。彼が最も愛した彼女の想いを。一刻も早く。

「高木くんつ。こつち！」

苛立つ高木の手を佐藤が力強く引く。彼女もきつと高木と同じ思いなのだろう。高木の方を振り向きもせず、階段を目指す。慌てて高木も後を追う。少し先を行く佐藤の背中が凜として美しかった。

この背中がいつまでも真つ直ぐに彼女の信じたものを追い続けて行けるように。

支えたい。

それこそがオレの生きる希望なのだ。

刑事という仕事柄いつこの命を落とす事になるのかは判らない。それは心のどこかで常に覚悟している。それでもオレは願う。

どんな事があっても生きたいと。

生きて彼女を守りたいと。

「高木くんつ。私に構わず先に行つて。」

不意に佐藤が振り返り、息を切らして叫ぶ。何の迷いも無く放たれたその言葉に、高木は躊躇無くその背中を追い越した。さすがに全速力で階段を駆け上がると息が切れる。それでも二人は走るのを止めない。高木の手がノックも無しに取調室のドアを開け、二人はほぼ同時に転がるようにして中へと飛び込んだ。

「た、高木？佐藤さんも・・・どうしたんです？そんなに慌てて。」  
予想外の出来事に、千葉が目を見黒させて尋ねる。そんな千葉の横

を無言で通り過ぎ、高木はその窮屈な部屋の窓を勢い良く開け放った。

「高木君、一体何を……」

言いかけた白鳥の言葉を遮るように、大きく肩で息をしていた佐藤が穏やかな声で呟いた。

「神崎さん。これが麻緒さんからの答えよ。」

佐藤は呆気に取りられる男の前に立ち、真っ直ぐ窓の外を見る。それに促されるように、男は怪訝な顔で首を捻った。

「あ……」

男の口から微かな声が漏れた。よろけるようにふらりと椅子から立ち上がった男は、呆然とその光景を見つめる。

「ふっかけ……」

呟いた男の瞳にみるみる透明な雫が浮かび、ゆらゆらと揺れた。やがてその清らかな雫は男の瞳から零れ落ち、頬を伝う。

「神崎さん。確かに麻緒さんはあなたを想うあまり、間違った選択をしてしまったかもしれません。でも、それはあなたの罪じゃない。」

静かな声で高木は語りかける。麻緒から託されたもどかしいほどの思いを精一杯の言葉にして紡ぎ出す。

「あなたが必死になつて守ろうとした想いは。麻緒さんが本当にあなたに残したかった想いは……。希望、なんですよ。愛するあなたの幸せが彼女の希望であり、幸福だったんです。あなたを守る事を、彼女は望んだんですよ。」

男は溢れる涙を拭いてもせずに、こくりと小さく頷いた。まるで長い悪夢から目覚めたかのように男の瞳の中に広がっていた闇が晴れていく。それを確認して、高木は静かに微笑った。

## エピソード ずっと二人で……

取調室を出てホールで下りのエレベーターを待ちながら、高木は当たり前のように隣に居る佐藤の横顔をちらりと窺い見る。隣にある温もりに安堵する一方で、一昨日千葉から佐藤が行方を眩ませたと聞いた時の息苦しさが甦り、高木の心臓はぎゅっと締め付けられた。「ん？なあに？どうしたの？」

複雑な表情で俯いてしまった高木に気付いた佐藤が不思議そうな顔で覗き込む。そんな佐藤の問いかけに、高木は微かな苦笑を浮かべて顔を上げた。

「いえ、別に。」

短く答えたところで、ホールにエレベーターの到着を知らせるチャイムが鳴る。二人は吸い込まれるようにその箱に乗り込んだ。狭い空間に二人しか居ないことを確認して、高木はぼつりと呟く。

「良かったなと思って。」

高木の口から漏れた言葉に、佐藤が怪訝な顔で振り返る。小首を傾げて少し背の高い高木を見上げた後、佐藤は直ぐに柔らかな笑顔を浮かべてこくりと頷いた。

「今まで刑事をやってきて、被疑者に礼を言われたのは初めてですね。」

照れくさそうに呟く高木に佐藤はくすりと小さな笑みを漏らす。

「私もよ。被害者や遺族からお礼を言われる事はあっても、逮捕した被疑者から言われた事なんて無かったわ。」

二人は互いに顔を見合わせ微笑んだ。こうして共に笑いあえる幸せを噛み締めながら。

「佐藤さん。」

瞳に笑みを残したまま、高木は佐藤を呼ぶ。

「ん？」

佐藤の澄んだ瞳が高木の瞳を見つめた。

「無事で……良かったです。」

高木の言葉に一瞬驚いたように瞳を見開いた佐藤の顔が、ゆっくりと綻んでいく。その笑顔に高木の心は一気に満たされた。

「ねえ、高木くん。」

不意に名前を呼ばれ高木の手には佐藤の小さな手が触れる。

「ありがとう。」

佐藤はそれ以上何も言わなかった。高木は答えるようにその手を強く握り締めた。

翌日。

神崎篤は検察庁に送検された。この先彼にどのような判決が下されるのか。それは高木にも判らない。ただ、神崎史乃が彼による監禁を否定した事と、今回の事件の根幹に彼が最も愛した妻の死が深く係わっていた事を考慮すれば、恐らく寛大な処分が下される事になるだろう。彼の犯した犯罪は憎むべきものであり、決して許す事は出来ないが、高木には彼自身を憎むことなど到底出来そうにない。それは恐らく佐藤も同じだろう。

「神崎さん、もう大丈夫よね。」

閑散とした休憩所でコーヒーを飲みながら、佐藤がぽつりと呟いた。「ええ。彼は麻緒さんの想いを裏切るようなことは絶対にしないとします。」

高木は紙コップから顔を上げ、穏やかな笑みで答える。

「ねえ。」

周りに人が居ないのを確認するかのように辺りを見回した佐藤が高木のワイシャツの袖を引く。

「何ですか？」

きょとんとして尋ねる高木を上目遣いに見上げながら、佐藤がぼそりと呟く。

「私たちは大丈夫よね？」

その問いに微かな苦笑を漏らしながら、高木はきょろきょろと辺りを見回し誰も居ないのを確認してそつと佐藤の耳元に唇を寄せ囁く。

「もちろんです。どんな事があってもオレが必ずあなたを幸せにしますから。」

佐藤はみるみる相好を崩し、こくりと頷く。その笑顔につられて高木も笑った。

「さてと。それじゃあ聞き込み行きますか。」

高木の答えに満足したのか勢いよく立ち上がり、紙コップをゴミ箱に放り込んだ佐藤がまだ僅かに笑みを残したまま高木の方を振り返る。

「はいっ。」

力強く返事を返すと、高木は紙コップを握りつぶしゴミ箱に投げ込んだ。先に歩き出した佐藤の凜とした背中を慌てて追いかける。いつもと変わらない光景。けれどそこには昨日までとはまた少し違う二人の絆があった。

光と影 完

## エピソード ずっと二人で・・・（後書き）

やっと最終話を迎えることが出来ました。これもひとえに応援してくださった読者の皆様のおかげです。本当に有難うございました。光と影はこれにて完結ですが、あと1話を使って作者の後書きを書かせていただきたいと思いますので、よろしければお付き合いくださいませ。

## 後書きという名の駄文

遅くなりましたが後書きです。

昨年10月に連載を開始した『光と影』も、無事に最終話を迎える事ができました。これも一重に根気よく最後までお付き合い下さった読者の皆様のおかげです。応援して下さいました読者の皆様、本当に有難うございました。

皆様のご期待にそえる作品に仕上がったかどうか自信はありませんが、自分が書きたかった事は精一杯書いたつもりです。回収しきれない伏線がどこかに転がっているような気もしますが（おいっ）その辺は目に見えていただけたら有り難いです……（汗）で、ここからはこの作品の裏話というか、解説（？）を少し……普段ラブコメ高佐を書く事が圧倒的に多い私が何を血迷ったか、無性に高佐のシリアスな事件モノが書きたくなりましたで。

で、書き始めたのがこの『光と影』なんですね。

最初は軽い気持ちで書いていたのですが、だんだん調子にのってきてしまい。

ミステリーなんだけどラブストーリーでもあるという欲張りな路線にうつかり手を出してしまった事から私の苦悩の日々は始まったんですよ（大袈裟！？）連載を開始した時には既に大まかなプロットは出来上がっていたので、もう少し楽に（？）書けるかなと思っていたのですが、実際に物語が進んでいくとそういう訳にはいけなくなってしまう……普段どちらかというと思い付きというか、閃きというか、とにかく自分の感性の赴くままに作品を書いている私にとって、きちんと論理的に話を組み立てて書くというのは想像以上に大変な事です。

いかに自分の考えが甘かったかをまざまざと思い知らされる羽目になりました（涙）当初のプロットから変更を余儀なくされたところも多々あり、気付いたら85話というところでもない長編になってし

まってて・・・最終話を書き終えた時には、飽きっぽい私が良くここまで書き上げたものだあと呆れにも似た妙な感動が沸き上がりましたね。

物語について言うと、高佐と神崎×麻緒のカップルを対比させる事で、高佐が互いを想う気持ちだとか、共に生きる事の意味だとかに気付いていく過程を書いてみたつもりです。

どちらも愛し合う男女という点は同じなのですが、相手を想う余りに悲しい結末を迎えてしまった神崎×麻緒と、互いを想う気持ちが絆を深めた高木×佐藤の物語が対比していく事で、ミステリー（そもそもこの作品をミステリーと言えるかどうか定かではないのですが）としてだけでなく、ラブストーリーとしても楽しんで頂ける作品になればと思ひまして。

まあ、神崎篤というオリキャラについては人物像を設定した当初から私利私欲の為に犯罪に走るような男にはしたくなかった。麻緒とのエピソードを入れる事で彼が理不尽な理由で犯罪を犯した訳ではない事を強調したかったんですよ。ラストは絶対ハッピーエンドにしたかったですし、その方が救いがあるというか。

すみません。長々と訳の解らない解説を書いてしまいました（汗）最後になりましたが、しょーもない後書きまで読んで頂き本当に有難うございます。最後まで読んで下さった読者の皆様、労いのお言葉や作品の感想を送って下さった皆様、応援して下さいました皆様に改めて心よりお礼を申し上げます。長い間本当に有難うございました。

金弘美樹

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3763f/>

---

光と影

2010年10月8日21時54分発行